Veritas NetBackup™ クラウド管理者ガイド

UNIX、Windows および Linux

リリース 8.1.1

VERITAS™

Veritas NetBackup™ クラウド管理者ガイド

最終更新日: 2018-03-28

マニュアルバージョン: NetBackup 8.1.1

法的通知と登録商標

Copyright © 2018 Veritas Technologies LLC. All rights reserved.

Veritas、Veritas ロゴ、NetBackup は Veritas Technologies LLC または同社の米国とその他の国における関連会社の商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、サードパーティの所有物であることをベリタスが示す必要のあるサードパーティソフトウェア (「サードパーティプログラム」) が含まれている場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。このベリタス製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所で入手できます。

https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されます。Veritas Technologies LLC からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Veritas Technologies LLC は、本書の提供、内容の実施、また本書の利用によって偶発的あるいは必然的に生じる損害については責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR 12.212 の規定によって商業用コンピュータソフトウェアと見なされ、場合に応じて、FAR 52.227-19「Commercial Computer Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202、「Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation」、その後継規制の規定により制限された権利の対象となります。業務用またはホスト対象サービスとしてベリタスによって提供されている場合でも同様です。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Veritas Technologies LLC
500 E Middlefield Road
Mountain View, CA 94043

http://www.veritas.com

テクニカルサポート

テクニカルサポートは世界中にサポートセンターを設けています。すべてのサポートサービスは、お客様のサポート契約およびその時点でのエンタープライズテクニカルサポートポリシーに従って提供されます。サポートサービスとテクニカルサポートへの問い合わせ方法については、次の弊社の Web サイトにアクセスしてください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP.html

次の URL で Veritas Account の情報を管理できます。

https://my.veritas.com

既存のサポート契約に関する質問については、次に示す地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

世界全域 (日本を除く)	CustomerCare@veritas.com
Japan (日本)	CustomerCare_Japan@veritas.com

マニュアル

マニュアルの最新バージョンがあることを確認してください。各マニュアルには、2 ページに最終更新日付が記載されています。最新のマニュアルは、次のベリタス Web サイトで入手できます。

https://sort.veritas.com/documents

マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次のベリタスコミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問することもできます。

http://www.veritas.com/community/ja

ベリタスの Service and Operations Readiness Tools (SORT) の表示

ベリタスの Service and Operations Readiness Tools (SORT) は、時間がかかる管理タスクを自動化および簡素化するための情報とツールを提供する Web サイトです。製品によって異なりますが、SORT はインストールとアップグレードの準備、データセンターにおけるリスクの識別、および運用効率の向上を支援します。SORT がお客様の製品に提供できるサービスとツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

目次

第 1 章 NetBackup クラウドストレージについて 8

NetBackup 8.1.1 の新しいクラウド機能 8
Cloud Storage の機能について 8
クラウド構成ファイルのカタログバックアップについて 11
NetBackup クラウドストレージのサポート制限事項について 12

第 2 章 クラウドストレージについて 14

NetBackup のクラウドストレージベンダーについて 14
Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について 17
NetBackup 認定の Amazon S3 クラウドストレージベンダー 18
Amazon S3 ストレージ形式の要件 25
Amazon S3 のクラウドストレージプロバイダのオプション 26
Amazon S3 のクラウドストレージのオプション 31
Amazon S3 のサーバーの詳細な構成オプション 33
Amazon S3 資格情報ブローカーの詳細 36
Amazon S3 対応クラウドプロバイダのプライベートクラウドについて 37
Amazon S3 ストレージクラスについて 38
長期保持のための Amazon Glacier のデータの保護 39
Amazon のクラウド階層化を使用したデータの保護 43
Amazon IAM ユーザーに必要な権限 47
EMC Atmos クラウドストレージの API 形式について 47
NetBackup 認定の EMC Atmos クラウドストレージベンダー 48
EMC Atmos ストレージ形式の要件 48
EMC Atmos のクラウドストレージプロバイダのオプション 49
EMC Atmos のサーバーの詳細な構成オプション 52
AT&T のプライベートクラウドについて 53
Microsoft Azure クラウドストレージ API 形式について 54
NetBackup 認定の Microsoft Azure クラウドストレージベンダー 55
Microsoft Azure ストレージ形式の要件 55
Microsoft Azure クラウドストレージプロバイダのオプション 56
Microsoft Azure のサーバーの詳細な構成オプション 60
OpenStack Swift クラウドストレージの API 形式について 62
NetBackup 認定の OpenStack Swift クラウドストレージベンダー 63

OpenStack Swift のストレージ形式の要件 64
OpenStack Swift のクラウドストレージプロバイダのオプション 65
OpenStack Swift のストレージ領域のオプション 68
OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション 71
OpenStack Swift プロキシ設定 71
Rackspace Cloud Files ストレージの要件について 73
Rackspace ストレージサーバーの構成オプション 73
Rackspace のプライベートクラウドについて 76

第 3 章 NetBackup のクラウドストレージの構成 78

NetBackup でクラウドストレージの構成を開始する前に 79
NetBackup のクラウドストレージの構成 80
Cloud のインストール要件 82
［拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)］プロパティ 82
帯域幅スロットルの詳細設定 84
帯域幅スロットルの詳細設定 85
［クラウドストレージ (Cloud Storage)］プロパティ 87
クラウドストレージインスタンスの追加 88
クラウドストレージホストプロパティの変更 89
クラウドストレージホストのインスタンスの削除 91
NetBackup CloudStore サービスコンテナについて 92
NetBackup CloudStore Service Container のセキュリティ証明書 93
NetBackup CloudStore Service Container のセキュリティモード 94
NetBackup cloudstore.conf 設定ファイル 94
ホスト名ベースの証明書の配備 97
ホスト ID ベースの証明書の配備 98
クラウドバックアップ用のデータ圧縮について 100
クラウドストレージのデータ暗号化について 101
NetBackup クラウドストレージの暗号化のキー管理について 101
クラウドストレージサーバーについて 103
クラウドストレージのオブジェクトのサイズについて 103
クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて 105
NetBackup クラウドのマスターホストとしてのメディアサーバーの使用 106
クラウドストレージのストレージサーバーの構成 108
KMS データベース暗号化の設定 111
ストレージクラスの Amazon クラウドストレージへの割り当て 113
クラウドストレージサーバープロパティの変更 114
NetBackup クラウドストレージサーバーのプロパティ 116

NetBackup クラウドストレージサーバー帯域幅スロットルのプロパティ 117
NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ 121
NetBackup CloudCatalyst ストレージサーバーのプロパティ 126
NetBackup クラウドストレージサーバーの暗号化プロパティ 127
クラウドストレージのディスクプールについて 128
クラウドストレージのディスクプールの構成 129
NetBackup クラウドストレージ暗号化の KMS キー名のレコードの保存 138
クラウド環境へのバックアップメディアサーバーの追加 140
クラウドストレージ用のストレージユニットの構成 142
クラウドストレージユニットのプロパティ 143
クライアントとサーバーの最適比率の構成 145
メディアサーバーへのバックアップ通信量の制御 146
NetBackup アクセラレータバックアップと NetBackup 最適化合成バックアップについて 147
NetBackup アクセラレータをクラウドストレージで有効にする 147
最適化合成バックアップをクラウドストレージで有効にする 149
バックアップポリシーの作成 151
クラウドストレージディスクプールプロパティの変更 152
クラウドストレージディスクプールのプロパティ 153
NetBackup クラウドの認証局 (CA) の管理 155

第 4 章 監視とレポート 159

クラウドバックアップの監視とレポートについて 159
クラウドストレージジョブの詳細表示 160
圧縮率の表示 161
NetBackup クラウドストレージのディスクレポートの表示 161
クラウドストレージ暗号化用の KMS キー情報の表示 162

第 5 章 操作上の注意事項 165

NetBackup bpstsinfo コマンドの操作上の注意事項 165
追加のメディアサーバーを構成できない 166
NetBackup アクセス制御が有効になっている場合、クラウドの構成が失敗することがある 166
クラウドストレージサーバーのアーティファクトの削除 167

第 6 章 トラブルシューティング 168

統合ログについて 168
vxlogview コマンドを使用した統合ログの表示について 169
vxlogview を使用した統合ログの表示の例 170

レガシーログについて 171
クラウドストレージ用の NetBackup ログファイルディレクトリの作成 173
NetBackup クラウドストレージログファイル 173
libcurl ログの有効化 176
NetBackup 管理コンソールが開きません 176
クラウドストレージの構成上の問題のトラブルシューティング 177
NetBackup の拡張性のあるストレージのホストプロパティを利用できない 178
NetBackup CloudStore サービスコンテナへの接続が失敗する 178
クラウドストレージのディスクプールを作成できない 180
クラウドストレージを作成できません 180
クラウドストレージサーバーへのデータ転送が、SSL モードで失敗する 181
Amazon GovCloud クラウドストレージの設定が非 SSL モードで失敗する 182
Google Nearline ストレージからのデータリストアは失敗する場合がある 182
フランクフルト地域でクラウドストレージ構成のバックアップが失敗することがある 183
クラウド圧縮オプションを使うクラウドストレージ構成のバックアップが失敗することがある 183
認証バージョン V2 でのストレージ領域のフェッチの失敗 183
クラスタ環境でのインストール後に nbcssc サービスが起動しない 184
クラウドストレージの操作上の問題のトラブルシューティング 184
クラウドストレージバックアップが失敗する 185
NetBackup CloudStore サービスコンテナの停止と起動 190
nbcssc 処理の再起動によって、すべての cloudstore.conf の設定が元に戻される 190
NetBackup CloudStore サービスコンテナの起動とシャットダウンのトラブルシューティング 190
GLACIER リストアジョブのキャンセル後に bptm プロセスの終了に時間がかかる 192

索引 193

1

NetBackup クラウドストレージについて

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup 8.1.1 の新しいクラウド機能
- Cloud Storage の機能について
- クラウド構成ファイルのカタログバックアップについて
- NetBackup クラウドストレージのサポート制限事項について

NetBackup 8.1.1 の新しいクラウド機能

- Amazon GLACIER をサポートします。p.39 の「長期保持のための Amazon Glacier のデータの保護」を参照してください。
- Amazon LIFECYCLE をサポートします。p.43 の「Amazon のクラウド階層化を使用したデータの保護 」を参照してください。
- NetBackup は IPv6 をサポートするようになりました。

Cloud Storage の機能について

NetBackup Cloud Storage では、クラウドの STaaS (Storage as a Service) ベンダーからデータをバックアップ、リストアできます。NetBackup Cloud Storage は Veritas OpenStorage と統合されています。

表 1-1 に、NetBackup Cloud Storage で提供される機能の概要を示します。

表 1-1　　機能

機能	詳細
構成ウィザード (Configuration Wizard)	［クラウドストレージサーバーの構成 (Cloud Storage Server Configuration)］ウィザードが組み込まれ、クラウドストレージのセットアップおよびストレージのプロビジョニングを容易に行うことができるようになりました。クラウドストレージのプロビジョニングは、完全に NetBackup インターフェースを介して行われるようになりました。
圧縮	NetBackup Cloud Storage Compression は、クラウドに送信する前にデータをインラインで圧縮します。圧縮機能は、LZO Pro (圧縮レベル 3) というサードパーティのライブラリを使います。
暗号化	NetBackup Cloud Storage の暗号化では、データがクラウドに送信される前にデータをインラインで暗号化します。暗号化はNetBackup キーマネージメントサービス (KMS) と連動することによって暗号化キーを管理する機能を利用します。 暗号化機能では AES 256 暗号フィードバック (CFB) モードの暗号化を使用します。
スロットル (Throttling)	NetBackup Cloud Storage のスロットルでは、ネットワークとクラウド間のデータ転送速度を制御します。スロットル値は NetBackup メディアサーバーごとに設定されます。 特定の実装では、クラウドへのバックアップとリストアによる WAN 使用率を制限する必要があります。この制限を実装して他のネットワークの動作を制約しないようにします。スロットルは NetBackup 管理者に NetBackup Cloud Storage のトラフィックを制限する機能を提供します。クラウドの WAN トラフィックに制限を実装することで、割り当てられた以上の帯域幅を消費できないようにします。 NetBackup Cloud Storage スロットルを使用して、次の項目を構成および制御できます。 ■ 読み込み操作および書き込み操作で異なる帯域幅値。 ■ 各クラウドプロバイダで一度にサポートされる最大接続数。 ■ 総帯域幅に対するネットワーク帯域幅の割合。 ■ 時間ブロックごとのネットワーク帯域幅。

機能	詳細
測定 (Metering)	NetBackup Cloud Storage の測定レポートを使用して、NetBackup Cloud Storage 内のデータ転送を監視できます。 クラウドベースのストレージは、永続的なバックアップイメージを使用する従来のテープまたはディスクメディアとは異なります。クラウドストレージベンダーは、保存されたバイトおよび転送されたバイトごとにクラウドベースのストレージのコストを計算します。 NetBackup Cloud Storage ソフトウェアでは、保存および転送されるデータを最小限に抑えるために複数の技術を使用します。これらの技術により、保護データ量に関する従来のカタログベースの情報は、保存または転送されるデータ量と一致しなくなります。測定によって、1 つ以上のクラウドベースのストレージプロバイダ間でメディアサーバーごとに転送されるデータ量をインストール時に監視できます。 測定レポートは NetBackup OpsCenter で生成されます。
Cloud Storage サービス (Cloud Storage service)	NetBackup CloudStore サービスコンテナ (`nbcssc`) プロセスでは、次の機能を実行します。 ■ NetBackup Cloud Storage に関連する構成パラメータの制御 ■ 測定プラグインの測定情報の生成 ■ スロットルプラグインを利用したネットワーク帯域幅の使用率の制御 Windows では、このサービスは NetBackup によってインストールされる標準サービスです。UNIX では、このサービスは標準デーモンとして実行されます。
ストレージプロバイダ (Storage providers)	ベリタス社では、現在複数のクラウドストレージプロバイダーをサポートしています。これらの各ベンダーについての詳細情報が利用可能です。 p.14 の「NetBackup のクラウドストレージベンダーについて」を参照してください。

機能	詳細
OpsCenter レポート (OpsCenter Reporting)	OpsCenter の新しいクラウドレポートを使用して、クラウドストレージに送信されるデータを監視およびレポートできるようになりました。クラウドレポートには次の項目が含まれます。 ■ ［ジョブの成功率 (Job Success Rate)］: クラウドベースのストレージでフィルタ処理されたドメイン、クライアント、ポリシー、ビジネスレベルビューにまたがるバックアップジョブレベルごとの成功率。 ■ ［将来期限切れになるデータ (Data Expiring In Future)］: クラウドベースのストレージでフィルタ処理された次の 7 日間のそれぞれの日に期限切れになるデータ。 ■ ［クラウドの計測 (Cloud Metering)］: クラウドプロバイダごとのクラウドに書き込まれたデータの履歴ビュー。 ■ ［平均データ転送率 (Average Data Transfer Rate)］: クラウドプロバイダごとのクラウドへの平均データ転送速度の履歴ビュー。 ■ ［クラウドの計測のチャージバック (Cloud Metering Chargeback)］: クラウドプロバイダごとのクラウドベースのストレージに課金されるコストのランキング、予測および分布ビュー。 **メモ:** 次のクラウドプロバイダの監視とレポートの OpsCenter サポート: Amazon S3、AT&T、Rackspace NetBackup がサポートする Amazon S3 互換のすべてのクラウドプロバイダのうち、OpsCenter は Amazon S3 のみ監視およびレポートをサポートしています。 **メモ:** Amazon がクラウドサービスプロバイダである場合、OpsCenter は MSDP クラウドストレージサーバーがクラウドにアップロードするデータをレポートできません。

クラウド構成ファイルのカタログバックアップについて

NetBackup のカタログバックアッププロセスの間に次のクラウド構成ファイルがバックアップされます。

- 中間測定データを含んでいる、`meter` ディレクトリのすべての `.txt` ファイル
- `CloudInstance.xml`
- `CloudProvider.xml`
- `cloudstore.conf`
- `libstspiencrypt.conf`
- `libstspimetering.conf`
- `libstspithrottling.conf`
- `libstspi`*`cloud_provider_name`*`.conf`

NetBackup がサポートするクラウドプロバイダに固有のすべての .conf ファイル

- libstspi*cloud_provider_name*.pref
  NetBackup がサポートするクラウドプロバイダに固有のすべての .pref ファイル

カタログバックアップのプロセスの間にバックアップされるクラウド構成ファイルは次の場所にあります。

Windows	install_path¥NetBackup¥db¥cloud
UNIX	usr/openv/netbackup/db/cloud

メモ: NetBackup カタログバックアップのプロセスの間に cacert.pem ファイルはバックアップされません。

この cacert.pem ファイルはクラウドプロバイダに固有のファイルです。このファイルは NetBackup インストールの一部としてインストールされます。このファイルには NetBackup でサポートされる認証局（CA）の証明書が含まれています。

NetBackup クラウドストレージのサポート制限事項について

以下の項目は、NetBackup クラウドストレージの制限事項の一部です。

- クラウドベンダーは最適化された複製をサポートしません。
- クラウドベンダーはテープへの直接バックアップをサポートしません (NDMP による)。
- クラウドベンダーは、バックアップイメージのディスクボリュームスパニングをサポートしません。
- NetBackup クラウドがサポートしないプラットフォームに NetBackup マスターサーバーがインストールされている場合に、クラウドストレージサーバーの構成でこの問題が発生する場合があります。
  NetBackup がクラウドストレージでサポートするオペレーティングシステムについては、NetBackup オペレーティングシステム互換性一覧を参照してください。次の URL から入手できます。
  http://www.netbackup.com/compatibility
- Hitachi クラウドストレージでは、暗号化オプションを有効にしている場合は、合成バックアップが正常に実行されません。合成バックアップを正常に実行するには、Hitachi クラウドポータルでバケット（または名前空間）のバージョニングオプションを有効にする必要があります。バージョニングオプションを有効にする方法について詳しくは、Hitachi クラウドプロバイダに問い合わせてください。

- クラウドストレージサーバーは、データを格納するために同じボリューム (バケットまたはコンテナ) を使用できません。各クラウドストレージサーバーに対して個別のボリューム (バケットまたはコンテナ) を作成する必要があります。
- NetBackup 7.7.1 以降のバージョンでは、フランクフルト地域を使ったクラウドストレージの構成をサポートしています。
- NetBackup Cloud Storage 設定ウィザードでは、以下の項目が英語でのみ表示されます。
  - すべてのクラウドプロバイダ名
  - クラウドプロバイダの説明
  - AmazonGov では、[Certificate File Name]、[Private Key File Name]、[Private Key Passphrase]、[Agency]、[Mission Name]、および[Role] のフィールド
  - Openstack Swift では、[Tenant Type]、[Tenant Value]、[User Type]、[User Domain Type]、[User Domain Value]、[Project Domain Type]、および [Project Domain Value]のフィールド
- NetBackup は IPv6 をサポートするようになりました。IPv6 をサポートするすべてのクラウドベンダーとプロキシサーバーの種類でのみ、サポートが利用可能です。

2

クラウドストレージについて

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup のクラウドストレージベンダーについて
- Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について
- EMC Atmos クラウドストレージの API 形式について
- Microsoft Azure クラウドストレージ API 形式について
- OpenStack Swift クラウドストレージの API 形式について

NetBackup のクラウドストレージベンダーについて

NetBackup では、クラウドストレージがストレージ API 形式に基づいてサポートされています。NetBackup でクラウドストレージ用にサポートされているすべてのクラウドベンダーは、サポート対象のいずれかの形式を使用しています。ストレージ API 形式およびクラウドベンダーについて詳しくは、以下を参照してください。

クラウドストレージの API 形式	表 2-1 では、各ストレージ API 形式の要件、およびそのストレージ API 形式を使用するクラウドベンダーの要件について説明するトピックへのリンクが提供されています。
サポート対象のクラウドベンダー	表 2-2 では、NetBackup クラウドストレージで認定されているクラウドベンダーと、そのストレージ API 形式を識別します。設定のヘルプについては、ストレージ API 形式に関する情報を参照してください。

http://www.netbackup.com/compatibility

表 2-1 では、NetBackup クラウドストレージで認定されているクラウドストレージ API を識別します。

表 2-1　NetBackup でサポートされているクラウドストレージ API 形式

API 形式	詳細情報
Amazon S3	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
EMC Atmos	p.47 の「EMC Atmos クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Microsoft Azure	p.54 の「Microsoft Azure クラウドストレージ API 形式について」を参照してください。
OpenStack Swift	p.62 の「OpenStack Swift クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。

表 2-2 では、NetBackup クラウドストレージで認定されているクラウドベンダーを識別します。設定のヘルプについては、ストレージ API 形式に関する情報を参照してください。

表 2-2　サポート対象クラウドベンダーのアルファベット順リスト

クラウドベンダー	ストレージ API 形式別の情報サイト
Amazon (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Amazon GovCloud (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Alibaba Cloud Object Storage Service (OSS)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
AT&T (Atmos)	p.47 の「EMC Atmos クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
China Mobile Cloud Connector (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
CMCC Cloud Storage v5.x(S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Chunghwa Telecom hicloud S3 (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Cloudian HyperStore (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
EMC ATMOS Private Cloud	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。

クラウドベンダー	ストレージ API 形式別の情報サイト
FUJITSU クラウド サービス K5	p.62 の「OpenStack Swift クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Google Nearline (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
HGST Storage (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Hitachi Cloud Service (HCS) (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Hitachi Content Platform (HCP) (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
IBM Softlayer	p.62 の「OpenStack Swift クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
IBM Cloud Object Storage	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Iron Mountain Iron Cloud	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Microsoft Azure	p.54 の「Microsoft Azure クラウドストレージ API 形式について」を参照してください。
Microsoft Azure Government	p.54 の「Microsoft Azure クラウドストレージ API 形式について」を参照してください。
NetApp AltaVault	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
NetApp StorageGRID	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
NooBaa	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Oracle (Swift)	p.62 の「OpenStack Swift クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Oracle OCI	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
OpenTelekom	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。

クラウドベンダー	ストレージ API 形式別の情報サイト
Rackspace	p.73 の「Rackspace Cloud Files ストレージの要件について」を参照してください。
StorReduce (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
SwiftStack (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
SwiftStack (Swift)	p.62 の「OpenStack Swift クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
StorageGRID Webscale オブジェクトストレージ	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Telefonica (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
Verizon (S3)	p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。

Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について

NetBackup は、ストレージに Amazon S3 のストレージ API を使用するベンダーのクラウドストレージをサポートします。Amazon S3 のストレージ API ベンダー向けの要件と構成オプションに関する情報は、次のとおりです。

表 2-3 Amazon S3 ストレージ API 形式の情報とトピック

情報	トピック
認定されたベンダー	p.18 の「NetBackup 認定の Amazon S3 クラウドストレージベンダー」を参照してください。
要件	p.25 の「Amazon S3 ストレージ形式の要件」を参照してください。
ストレージサーバーの構成オプション	p.26 の「Amazon S3 のクラウドストレージプロバイダのオプション」を参照してください。
サービスホストとエンドポイント構成オプション	p.31 の「Amazon S3 のクラウドストレージのオプション」を参照してください。
SSL、プロキシ、HTTP ヘッダーのオプション	p.33 の「Amazon S3 のサーバーの詳細な構成オプション」を参照してください。

情報	トピック
資格情報ブローカーオプション	p.36 の「Amazon S3 資格情報ブローカーの詳細」を参照してください。
ストレージクラス	p.38 の「Amazon S3 ストレージクラスについて」を参照してください。

一部のベンダーは、Amazon S3 のストレージ形式 API を使用するプライベートクラウドをサポートしています。

p.37 の「Amazon S3 対応クラウドプロバイダのプライベートクラウドについて」を参照してください。

NetBackup 認定の Amazon S3 クラウドストレージベンダー

表 2-4 は、NetBackup 8.1.1 リリースの時点で NetBackup で認定されている Amazon S3 互換クラウドベンダーを示します。クラウドベンダーは Veritas Technology Partner Program (VTPP) に参加することで認定を受けることができます。

表 2-4 NetBackup のサポート対象の Amazon S3 互換クラウドベンダー

クラウドベンダー	注意事項
Amazon	NetBackup は Amazon Web Services (AWS) 署名バージョン 2 と署名バージョン 4 をサポートします。 次のストレージクラスがサポートされます。 ■ STANDARD ■ STANDARD_IA ■ GLACIER ■ LIFECYCLE NetBackup はカスタムの HTTP ヘッダーもサポートします。

クラウドベンダー	注意事項
Amazon GovCloud	デフォルトでは、ベンダーホストのクレデンシャルを入力します。クレデンシャルを入力するのではなく、資格証明ブローカーを使うには、[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]で[資格情報ブローカーの使用 (Use Credentials Broker)]を選択します。別のウィザードパネルでブローカーの詳細を入力します。 次のストレージクラスがサポートされます。 ■ STANDARD ■ STANDARD_IA ■ GLACIER ■ LIFECYCLE NetBackup はカスタムの HTTP ヘッダーもサポートします。
Alibaba Cloud Object Storage Service (OSS)	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
China Mobile Cloud Connector (CMCC)	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
CMCC Cloud Storage v5.x(S3)	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。

クラウドベンダー	注意事項
Cloudian HyperStore	バケット要件（作成可能なバケット最大数など）について詳しくは、Cloudian クラウドプロバイダに問い合わせてください。 NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の［クラウドストレージ］ホストプロパティを使います。 p.87 の「［クラウドストレージ (Cloud Storage)］プロパティ」を参照してください。 ［クラウドストレージ］ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
EMC ATMOS Private Cloud	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の［クラウドストレージ］ホストプロパティを使います。 p.87 の「［クラウドストレージ (Cloud Storage)］プロパティ」を参照してください。 ［クラウドストレージ］ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
Google Nearline	バケット名の先頭には goog を使えません。 バケット名には、Google、または Google に相似するスペルミスを含めることができません。 次のリンクを参照できます。 https://cloud.google.com/storage/docs/bucket-naming 空のバケットを削除し、バケット名を再使用します。Google Nearline のストレージ地域内にバケットを作成できます。
HGST Storage (S3)	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の［クラウドストレージ］ホストプロパティを使います。 p.87 の「［クラウドストレージ (Cloud Storage)］プロパティ」を参照してください。 ［クラウドストレージ］ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。

クラウドベンダー	注意事項
hicloud S3	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
Hitachi Cloud Service (HCS)	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
Hitachi Content Platform (HCP)	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。

クラウドベンダー	注意事項
IBM Cloud Object Storage	次のストレージクラスがサポートされます。 ■ Cold ストレージクラス ■ Flex ストレージクラス ■ Standard ストレージクラス ■ Vault ストレージクラス 次の地域がサポートされます。 ■ EU Cross Region ■ US Cross Region ■ US East Region ■ US South Region NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
Iron Mountain Iron Cloud	**メモ:** サポートを有効にするには `Cacert.pem` を更新する必要があります。 NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
Open Telekom	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。

クラウドベンダー	注意事項
Oracle OCI	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
NetApp AltaVault	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
NetApp StorageGRID	LAN でサポートされます。 NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
NooBaa	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
SwiftStack	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。

クラウドベンダー	注意事項
StorReduce	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
StorageGRID Webscale オブジェクトストレージ	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
Telefonica	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。
Verizon	NetBackup ストレージサーバーを構成する前にサービスホストのエンドポイントを追加できます。これを実行するには、NetBackup の[クラウドストレージ]ホストプロパティを使います。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。 [クラウドストレージ]ホストプロパティでエンドポイントを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときに追加する必要があります。

メモ: Veritasは NetBackup リリースの更新前にベンダーを認定する場合があります。この表にリストされていないクラウドストレージベンダーについては、次の Web ページで対応クラウドベンダーの最新のリストを参照してください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.000115793

Amazon S3 ストレージ形式の要件

次の表に、NetBackup における Amazon S3 形式のクラウドストレージの詳細と要件を示します。

表 2-5 Amazon クラウドストレージの要件

要件	詳細
ライセンス要件	クラウドストレージを許可する NetBackup ライセンスを保有している必要があります。
ベンダーアカウントの要件	お使いのベンダーが提供するストレージから作成、書き込み、読み取りを行うには、アカウントを取得する必要があります。
バケット	次に、Amazon ストレージバケットの必要条件を示します。 ■ 1 つの Amazon アカウントにつき最大 100 個のバケットを作成できます。 ■ Amazon AWS Management Console を使用して空のバケットを削除できます。ただし、NetBackup でバケットを作成するときに、削除されたバケットの名前を再利用できないことがあります。 ■ NetBackup がサポートする Amazon のストレージ地域内にバケットを作成できます。
バケット名	NetBackup で使うバケットを作成するには NetBackup を使うことを Veritas がお勧めします。Amazon S3 インターフェースでは、NetBackup が許可しない文字を使用できる場合があります。したがって、NetBackup を使ってバケットを作成することにより、潜在的な問題を抑制できます。 米国標準地域でのバケット名に関する NetBackup 必要条件を以下に示します。 ■ バケット名は 3 文字から 255 文字である必要があります。 ■ 国際標準化機構 (ISO) のラテン文字アルファベットの 26 文字の小文字。これらは英語のアルファベットと同じ小文字です。 ■ 0 から 9 までの整数。 ■ 次の文字 (バケット名の最初の文字としてこれを使用することはできません): ピリオド (.)、下線 (_)、ダッシュ (-)。 ダッシュ - 例外: ピリオド (.) は使用できません 通信に SSL を使用する場合。デフォルトでは、NetBackup は通信に SSL を使用します。 p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。 **メモ:** 次のシナリオでは、バケットは NetBackup で使用できません。a. NetBackupがサポートしない地域でバケットを作成した場合。b. バケットの名前がバケットの命名規則に従っていない場合。

要件	詳細
ディスクプールの数	最大 90 個のディスクプールを作成できます。90 個以上のディスクプールを作成しようとすると、「ディスクボリュームの作成に失敗しました、要求が無効です」というエラーメッセージが生成されます。

Amazon S3 のクラウドストレージプロバイダのオプション

図 2-1は Amazon S3 クラウドストレージの[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]パネルを示します。

図 2-1 Amazon の[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]パネル

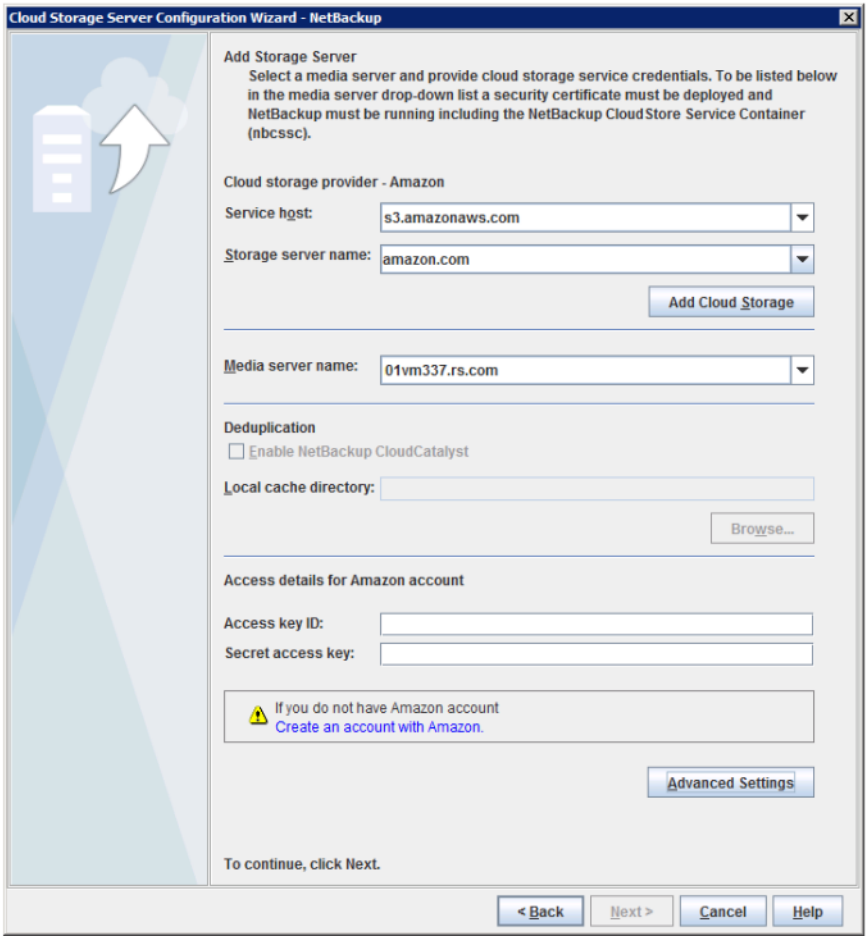


表 2-6 では、Amazon S3 のストレージサーバー構成オプションについて説明します。

表 2-6 Amazon S3 のクラウドストレージプロバイダの構成オプション

フィールド名	必要な内容
サービスホスト (Service host)	お使いのベンダーのクラウドサービスのエンドポイントの名前をドロップダウンリストから選択します。 ベンダーのクラウドサービスのエンドポイントがドロップダウンリストに表示されない場合は、クラウドストレージインスタンスを追加する必要があります。この表の[クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)]の説明を参照してください。
ストレージサーバー名 (Storage server name)	ベンダーのデフォルトのストレージサーバーが表示されます。ドロップダウンリストには、使うことのできる名前のみが表示されます。複数のストレージサーバーが利用可能な場合は、デフォルト以外のストレージサーバーを選択できます。 ドロップダウンリストには、クラウドストレージの論理名を使って別のストレージサーバー名を入力できます。Amazon の同一の物理サービスホストを参照する異なる複数の名前を使って、複数のストレージサーバーを作成できます。利用できる名前がリストにない場合は、ドロップダウンリストに新しいストレージサーバー名を入力して作成できます。 **メモ:** Veritas は、Amazon S3 対応クラウドプロバイダを構成するときに追加するストレージサーバー名を論理名にし、物理ホスト名と一致しないようにすることをお勧めします。例: Amazon GovCloud ストレージサーバーを追加するときに、「amazongov.com」または「amazon123.com」といった名前を使わないようにします。これらのサーバーは、クラウドストレージ構成時に失敗を引き起こす可能性のある物理ホストであることがあります。代わりに、「amazongov1」または「amazonserver1」などのストレージサーバー名を使います。 **メモ:** パブリッククラウドの場合は[クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)]オプションが無効になります。既存のクラウドストレージを使う必要があります。

フィールド名	必要な内容
クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)	クラウド配備の詳細を構成するには、[クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)]をクリックします。カスタマイズしたクラウド配備は、[サービスホスト (Service Host)]ドロップダウンリストにリストされていないクラウドインスタンスを参照します。クラウド配備の詳細を構成した後は、サービスホストが[サービスホスト (Service Host)]ドロップダウンリストに表示されます。 p.31 の「Amazon S3 のクラウドストレージのオプション」を参照してください。 追加したクラウドストレージは、NetBackup 管理コンソールを使って変更または削除できません。ただし、csconfigコマンドを使ってストレージサーバーを変更または削除できます。 **メモ:** Amazon S3 対応クラウドプロバイダのカスタムクラウドインスタンスを作成するには、NetBackup csconfig -a コマンドを使うことができます。nbdevconfig と tpconfig コマンドを実行する前に csconfig コマンドを実行する必要があります。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。このガイドは次の URL から入手できます。 http://www.veritas.com/docs/DOC5332

フィールド名	必要な内容
メディアサーバー名 (Media server name)	NetBackup メディアサーバーをドロップダウンリストから選択します。ドロップダウンリストには、NetBackup 8.1.1 以降のメディアサーバーのみが表示されます。また、クラウドストレージサーバーの必要条件に適合するメディアサーバーのみがドロップダウンリストに表示されます。次のトピックでは、構成の必要条件について説明します。 p.105 の「クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて」を参照してください。 選択したホストが、機能と使用可能なストレージについてストレージベンダーのネットワークに問い合わせます。メディアサーバーはバックアップおよびリストアのためのデータムーバーにもなります。 クラウドストレージをサポートするには、メディアサーバーが次の項目に適合している必要があります。 ■ クラウドストレージでオペレーティングシステムがサポートされている必要があります。NetBackup がクラウドストレージでサポートするオペレーティングシステムについては、NetBackup オペレーティングシステム互換性一覧を参照してください。次の URL から入手できます。 http://www.netbackup.com/compatibility ■ NetBackup クラウドストレージサービスコンテナ (nbcssc) を実行している必要があります。 p.92 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナについて」を参照してください。 ■ Amazon S3 互換クラウドプロバイダでは、メディアサーバーで NetBackup 8.1.1 以降のリリースを動作している必要があります。 ■ クラウドストレージに使用する NetBackup メディアサーバーは、マスターサーバーのバージョンと同じ NetBackup バージョンにする必要があります。
クレデンシャルの入力 (Enter Credentials)	適用先: Amazon GovCloud のみ。 このオプションはデフォルトで選択されます。アクセスキー ID と秘密アクセスキーを入力して、このウィザードパネルでクラウドストレージサーバーのクレデンシャルを設定するには、このオプションを選択します。
資格情報ブローカーの使用 (Use Credentials Broker)	適用先: Amazon GovCloud のみ。 クレデンシャルブローカーを使ってクラウドストレージサーバーを構成するには、このオプションを選択します。このオプションを選択する場合は、次に表示される[資格情報ブローカーの使用 (Use Credentials Broker)]ウィザードパネルを使って資格情報ブローカーの情報を設定します。

フィールド名	必要な内容
重複排除 (Deduplication)	このオプションを有効にすると、重複排除データをクラウドにアップロードできる、CloudCatalyst ストレージサーバーが作成されます。 次のいずれかに該当する場合、このオプションはグレー表示になります。 ■ 選択したメディアサーバーに NetBackup 8.1 以降がインストールされていない ■ CloudCatalyst がメディアサーバーオペレーティングシステムをサポートしていない ■ CloudCatalyst がクラウドベンダーをサポートしていない サポート情報については、NetBackup 互換性リストを参照してください。 http://www.netbackup.com/compatibility CloudCatalyst について詳しくは、『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。 http://www.veritas.com/docs/DOC5332
ローカルキャッシュディレクトリ	CloudCatalyst ストレージサーバー上のストレージのパスとして使用されるマウントパスを入力します。 例: `/space/mnt/esfs` 重複排除データは、クラウドにアップロードされる前に、このローカルキャッシュディレクトリに書き込まれます。キャッシュが大きくなるほど、NetBackup が要求をローカルで処理できる可能性が高くなり、読み取りと書き込みのためのクラウドアクセスが回避されます。 注意: ■ このパスは、CloudCatalyst キャッシュ専用のファイルシステムを指す必要があります。パスが他のデータやアプリケーションとストレージを共有していると、誤ったキャッシュ退去が発生します。 ■ NetBackup がローカルキャッシュディレクトリ内のファイルを管理します。ユーザーは、このディレクトリ内のファイルを手動で削除しないでください。
アクセスキー ID (Access key ID)	[資格情報ブローカーの使用 (Use Credentials Broker)]を選択する場合、Amazon GovCloud には適用されません。 ベンダーアカウントのアクセスキー ID を入力します。 アカウントがない場合は、[サービスプロバイダによるアカウントの作成 (Create an account with the service provider)]リンクをクリックします。
シークレットアクセスキー (Secret access key)	[資格情報ブローカーの使用 (Use Credentials Broker)]を選択する場合、Amazon GovCloud には適用されません。 ベンダーアカウントの秘密アクセスキーを入力します。100 文字以下である必要があります。

フィールド名	必要な内容
詳細設定 (Advanced Settings)	クラウドストレージホストの SSL、プロキシ、HTTP ヘッダー (サーバー側の暗号化またはストレージクラス) の設定を変更するには、[詳細設定 (Advanced Settings)] をクリックします。 p.33 の「Amazon S3 のサーバーの詳細な構成オプション」を参照してください。

Amazon S3 のクラウドストレージのオプション

Amazon S3 プロバイダのウィザードパネルで[クラウドストレージの追加]をクリックすると[クラウドストレージの追加]ダイアログボックスが表示されます。次のタブが含まれます。

[全般設定 (General Settings)] タブ	p.31 の 表 2-7 を参照してください。
[地域の設定 (Region Settings)] タブ	p.33 の 表 2-8 を参照してください。 **メモ:** 複数の地域に対してクラウドストレージ配備を設定しない場合は、地域の設定を行う必要はありません。

メモ: Amazon 仮想プライベートクラウド (VPC) 環境でクラウドストレージサーバーを追加するには、考慮事項を確認してください。

表 2-7 [全般設定 (General Settings)] タブのオプション

オプション	説明
プロバイダの形式 (Provider Type)	クラウドストレージプロバイダです。このフィールドの状態は次のとおりです。 ■ [クラウドストレージ (Cloud Storage)] ホストプロパティからクラウドストレージを追加するとアクティブになります。リストから必要なプロバイダを選択します。 ■ [クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)] からクラウドストレージを追加するか [クラウドストレージ (Cloud Storage)] ホストプロパティから設定を変更すると非アクティブになります。ウィザードまたは [クラウドストレージ (Cloud Storage)] ホストプロパティで選択したホストを示します。

オプション	説明
サービスホスト (Service host)	クラウドサービスプロバイダのホスト名を入力します。 パブリッククラウドインスタンスを追加する場合は、クラウドストレージプロバイダからサービスホストの詳細を取得する必要があります。テキストボックスにサービスホストの詳細を入力します。 プライベートクラウド配備のクラウドストレージインスタンスを追加する場合に、クラウドプロバイダが「service.my-cloud.com/services/objectstore」という URL を使ってアクセス可能な場合は、「service.my-cloud.com」といったサービスホスト名を入力します。 カスタムインスタンスの場合、IPv6 のエンドポイントを使用するには、IPv6 対応のサービスホストを使用してインスタンスを更新するか、新しいインスタンスを作成する必要があります。 **メモ:** 「http」または「https」の接頭辞をサービスホスト名に付加しないでください。 **メモ:** デフォルト (米国東部 (北バージニア)) の AWS リージョンの VPC については、サービスホストとして external-1.amazonaws.com を使用します。
サービスのエンドポイント (Service endpoint)	クラウドサービスプロバイダのエンドポイントを入力します。 [サービスエンドポイント (Service endpoint)]- クラウドサービスプロバイダのエンドポイントを入力します。たとえば、「service.my-cloud.com/services/objectstore」URL を使ってクラウドプロバイダサービスにアクセス可能な場合、「/services/objectstorage」と入力します。 クラウドプロバイダサービスが「service.my-cloud.com」URL から直接アクセス可能な場合は、空白のままにできます。
HTTP ポート (HTTP port)	非セキュアモードでクラウドプロバイダサービスにアクセスするときに使うことができる HTTP ポートを入力します。
HTTPS ポート (HTTPS port)	セキュアモードでクラウドプロバイダサービスにアクセスするときに使うことができる HTTPS ポートを入力します。
ストレージサーバー名 (Storage server name)	NetBackup を使って設定し、アクセスするクラウドストレージの論理名を入力します。 **メモ:** 同一のパブリックまたはプライベートクラウドストレージインスタンスに関連付けられた複数のストレージサーバーを設定できます。

オプション	説明
エンドポイントのアクセススタイル (Endpoint access style)	クラウドサービスプロバイダのエンドポイントのアクセススタイルを選択します。 デフォルトのエンドポイントのアクセススタイルは[パススタイル (Path Style)]です。 クラウドサービスプロバイダが URL の仮想ホストも追加でサポートする場合は、[仮想ホストスタイル (Virtual Hosted Style)]を選択します。

メモ: 複数の地域に対してクラウドストレージ配備を設定しない場合は、地域の設定を行う必要はありません。

表 2-8 [地域の設定 (Region Settings)]タブ

オプション	説明
地域名 (Region name)	クラウドストレージが配備された特定の地域を示す論理名を入力します。例: 東部
ロケーションの制約 (Location constraint)	関連付けられた地域でのデータ転送操作でクラウドプロバイダサービスが使うロケーション識別子を入力します。パブリッククラウドストレージの場合、クラウドプロバイダからロケーション制約の詳細を取得する必要があります。 **メモ:** デフォルト (米国東部 (北バージニア)) の AWS リージョンの VPC については、ロケーション識別子として US-east-1 を使用します。
サービスホスト (Service host)	地域のサービスホスト名を入力します。[全般設定 (General Settings)]タブで入力したサービスエンドポイント、HTTP ポート、HTTPS ポートの情報は、任意の地域から情報にアクセスするときに使われます。
追加 (Add)	地域を追加する場合、[追加 (Add)]をクリックします。

Amazon S3 のサーバーの詳細な構成オプション

次の表で、すべての Amazon S3 互換クラウドプロバイダに固有の SSL、HTTP ヘッダーの構成、プロキシサーバーオプションについて説明します。これらのオプションは[サーバーの詳細な構成 (Advanced Server Configuration)]ダイアログボックスに表示されます。

表 2-9 ［全般設定 (General Settings)］タブのオプション

オプション	説明
SSL を使用する	NetBackup とクラウドストレージプロバイダ間のユーザー認証またはデータ転送に SSL (Secure Sockets Layer) プロトコルを使う場合は、［SSL を使用する (Use SSL)］を選択します。 ■ ［認証のみ (Authentication only)］- クラウドストレージにアクセスするときのユーザーの認証で SSL のみを使う場合は、このオプションを選択します。 ■ ［データ転送 (Data Transfer)］ - SSL を使ってユーザーを認証して、NetBackup からクラウドストレージにデータを転送するにはこのオプションを選択します。 **メモ:** NetBackup は、SSL モードでクラウドストレージと通信するときに、認証局 (CA) による署名付き証明書のみをサポートします。クラウドサーバー (パブリックまたはプライベート) に CA による署名付き証明書があることを確認します。CA によって署名された証明書がない場合は、SSL モードでの NetBackup とクラウドプロバイダ間のデータ転送が失敗します。 **メモ:** Amazon GovCloud クラウドプロバイダの FIPS リージョン (s3-fips-us-gov-west-1.amazonaws.com) では、セキュアモードの通信のみがサポートされます。このため、FIPS 領域を持つ Amazon GovCloud クラウドストレージを設定するときに［SSL を使用する (Use SSL)］オプションを無効にすると、設定は失敗します。
HTTP ヘッダー	選択した HTTP ヘッダーに適切な値を指定します。［値 (Value)］列をクリックして、ドロップダウンリストを表示して値を選択します。 ■ ［x-amz-server-side-encryption］ - Amazon S3 クラウドストレージのデータを保護する場合は、［値 (Value)］ドロップダウンリストから AE256 を選択します。 AE256 は 256 ビット高度暗号化標準を意味します。 ヘッダー値を AE256 に設定すると、Amazon S3 クラウドストレージが受信するすべてのオブジェクトはクラウドに保存される前に暗号化されます。Amazon S3 サーバー側の暗号化では、現在利用可能な最強のブロック暗号 AE256 を使ってデータが暗号化されます。さらに、この暗号化では、定期的に循環されるマスターキーを使ってキー自体が暗号化されます。 **メモ:** Amazon S3 クラウドストレージサーバーを作成するときに暗号化オプションをすでに有効化している場合は、このオプションを有効にする必要はありません。NetBackup がネットワーク上でデータを送信する前に、データがすで暗号化されているためです。 ■ ストレージクラスは、ストレージサーバーの作成時に設定されます。構成した後でストレージクラスを編集することはできません。

表 2-10 ［プロキシ設定 (Proxy Settings)］タブのオプション

オプション	説明
プロキシサーバーを使用する	プロキシサーバーを使用しプロキシサーバーの設定を指定する場合は、［プロキシサーバーを使用する (Use Proxy Server)］オプションを選択します。［プロキシサーバーを使用する (Use Proxy Server)］オプションを選択すると、次の詳細を指定できます。 ■ プロキシホスト (Proxy Host): プロキシサーバーの IP アドレスまたは名前を指定します。 ■ プロキシポート (Proxy Port): プロキシサーバーのポート番号を指定します。 ■ プロキシタイプ (Proxy Type): 次のいずれか 1 つのプロキシタイプを選択できます。 　■ HTTP 　　**メモ:** HTTP プロキシタイプのプロキシの資格情報を提供する必要があります。 　■ SOCKS 　■ SOCKS4 　■ SOCKS5 　■ SOCKS4A
プロキシのトンネリングを使用 (Use Proxy Tunneling)	HTTP プロキシタイプのプロキシのトンネリングを有効にすることができます。 ［プロキシのトンネリングを使用 (Use Proxy Tunneling)］を有効にすると、HTTP CONNECT 要求がクラウドメディアサーバーから HTTP プロキシサーバーに送信され、TCP 接続がクラウドバックエンドストレージに直接転送されます。 データは、接続からヘッダーまたはデータを読み取ることがなくプロキシサーバーを通過します。
認証形式 (Authentication Type)	HTTP プロキシタイプを使用している場合は、次のいずれかの認証形式を選択できます。 ■ なし (None): 認証が有効になりません。ユーザー名とパスワードは要求されません。 ■ NTLM: ユーザー名とパスワードが必要です。 ■ 基本 (Basic): ユーザー名とパスワードが必要です。 ［ユーザー名 (Username)］はプロキシサーバーのユーザー名です。 ［パスワード (Password)］は空にすることができます。最大 256 文字を使用できます。

Amazon S3 資格情報ブローカーの詳細

図 2-2は Amazon GovCloud クラウドストレージの[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]の資格情報ブローカーパネルを示します。NetBackup でクラウドストレージサーバーを構成するときに資格情報ブローカーの詳細を追加します。

p.108 の「クラウドストレージのストレージサーバーの構成」を参照してください。

資格情報ブローカーの詳細は、その詳細を変更できる[クラウドストレージサーバーの構成 (Cloud Storage Server Configuration)]ダイアログボックスにも表示されます。

p.89 の「クラウドストレージホストプロパティの変更」を参照してください。

図 2-2 Amazon の[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]パネル

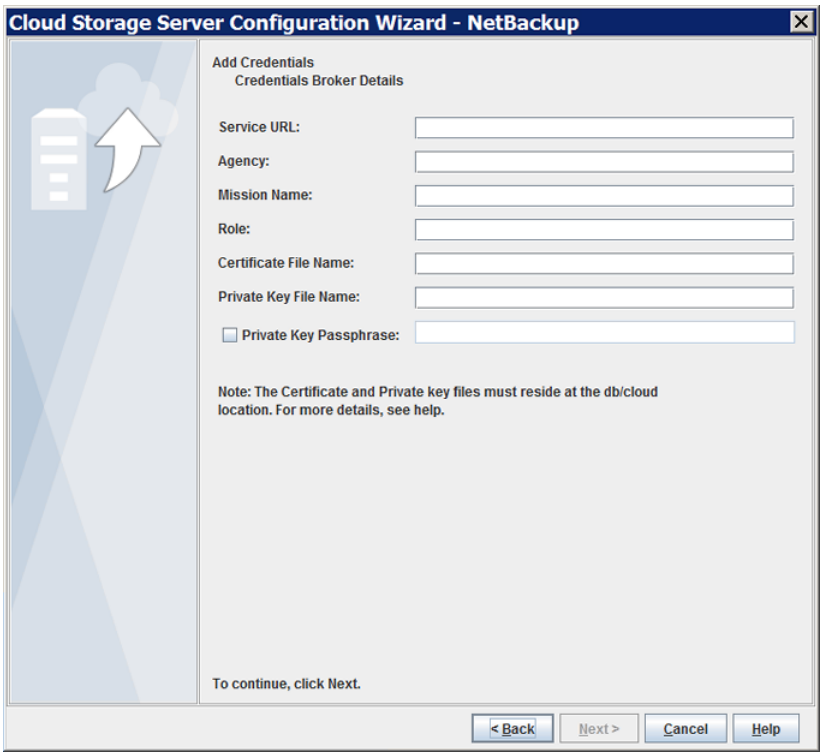


表 2-11では、Amazon GovCloud の資格情報ブローカーのオプションについて説明します。

表 2-11　資格情報ブローカーの詳細

フィールド	説明
サービス URL (Service URL)	サービス URL を入力します。 例: `https://hostname:port_number/service_path`
エージェンシー (Agency)	エージェンシー名を入力します。
ミッション名 (Mission Name)	ミッション名を入力します。
役割	ロールを入力します。
証明書のファイル名 (Certificate File Name)	証明書のファイル名を入力します。
秘密鍵のファイル名 (Private Key File Name)	秘密鍵のファイル名を入力します。
秘密鍵のパスフレーズ (Private Key Passphrase)	秘密鍵のパスフレーズを指定するにはこのチェックボックスにチェックマークを付けます。100 文字以下である必要があります。 [秘密鍵のパスフレーズ (Private Key Passphrase)]は省略可能です。

メモ: 証明書ファイルと秘密鍵ファイルは次の場所に存在する必要があります。

UNIX の場合: `/usr/openv/netbackup/db/cloud`

Windows の場合: *install_dir*¥NetBackup¥db¥cloud

メモ: クレデンシャルブローカーのパラメータについて詳しくは、Veritas テクニカルサポートチームに問い合わせてください。

Amazon S3 対応クラウドプロバイダのプライベートクラウドについて

NetBackup はプライベートクラウドまたは次の Amazon S3 対応クラウドプロバイダのクラウドインスタンスをサポートします。

- Amazon GovCloud
- Cloudian HyperStore
- Hitachi 社
- Verizon 社

プライベートクラウドを構成する前に、NetBackup を配備して利用可能にする必要があります。

［サーバーの詳細な構成 (Advanced Server Configuration)］ダイアログボックスを使用します。

［クラウドストレージ構成ウィザード (Cloud Storage Configuration Wizard)］のメディアサーバーの選択パネルで、［詳細設定 (Advanced Settings)］オプションをクリックします。次に、［サーバーの詳細な構成 (Advanced Server Configuration)］ダイアログボックスで、［SSL を使用する (Use SSL)］、［プロキシサーバーを使用する (Use Proxy Server)］、［HTTP ヘッダー (HTTP Headers)］などで関連オプションを選択します。

メモ: NetBackup は、SSL モードでのクラウドストレージとの通信時に、認証局（CA）によって署名された証明書のみをサポートします。クラウドサーバー (パブリックまたはプライベート) に CA による署名付き証明書があることを確認します。CA によって署名された証明書がない場合は、SSL モードでの NetBackup とクラウドプロバイダ間のデータ転送が失敗します。

メモ: Amazon GovCloud クラウドプロバイダの FIPS リージョン（s3-fips-us-gov-west-1.amazonaws.com）では、セキュアモードの通信のみがサポートされます。したがって、Amazon GovCloud を FIPS リージョンで設定するときに［SSL を使用する (Use SSL)］オプションを無効にすると、設定が失敗します。

ウィザードパネルの［サービスプロバイダでアカウントを作成する (Create an account with service provider)］リンクは、アカウントを作成できるクラウドプロバイダの Web ページを開きます。プライベートクラウドを設定した場合は、構成処理の値が Web ページからなくなります。

Amazon S3 ストレージクラスについて

NetBackup は Amazon S3 および AmazonGov ストレージクラスをサポートします。クラウドストレージを構成するときに、オブジェクトまたはデータバックアップに割り当てる特定のストレージクラスを選択できます。オブジェクトはストレージクラスに応じて格納されます。

NetBackup は、次の Amazon S3 ストレージクラスをサポートします。

- STANDARD
- STANDARD_IA (IA は頻度が低いアクセスを表します。)
- GLACIERp.39 の「長期保持のための Amazon Glacier のデータの保護」を参照してください。
- LIFECYCLEp.43 の「Amazon のクラウド階層化を使用したデータの保護 」を参照してください。

次のシナリオでは、NetBackup はデフォルトの STANDARD ストレージクラスをバックアップまたはオブジェクトに割り当てます。

- Amazon S3 クラウドストレージを構成しているときに特定のストレージクラスを選択しない場合
- バックアップが以前の NetBackup バージョンで構成されたものである場合

p.113 の「ストレージクラスの Amazon クラウドストレージへの割り当て」を参照してください。

長期保持のための Amazon Glacier のデータの保護

長期保持用にデータを保護するために、NetBackup を使用して Amazon (AWS) Glacier にデータをバックアップすることができます。NetBackup を使用することで、Glacier ストレージクラスを使用してストレージサーバーを作成できます。バックアッププロセス中に、NetBackup は Amazon のゼロデイライフサイクルポリシーを内部的に使用してデータを Glacier に移行します。AWS ライフサイクルポリシーは、作成後に 0 日でオブジェクトを Glacier ストレージクラスに移行するように定義されたライフサイクルルールです。次の図に構成プロセスを示します。

Amazon GLACIER ストレージクラスのクラウドストレージサーバーを構成する方法

1. Amazon GLACIER クラウドストレージサーバーを構成します。

   p.108 の「クラウドストレージのストレージサーバーの構成」を参照してください。

2. GLACIER ストレージ用の Amazon バケットを使用してディスクプールを作成します。

   p.129 の「クラウドストレージのディスクプールの構成」を参照してください。

3. バックアップポリシーを作成します。

   p.151 の「バックアップポリシーの作成」を参照してください。

ベストプラクティス

データを Amazon Glacier に移行するようにストレージサーバーを構成する場合は、次の点を考慮してください。

- バケットが属する地域で Amazon Glacier がサポートされていることを確認してください。
- 選択されたバケットに既存の Amazon ライフサイクルポリシーがないことを確認します。
- リストアは、取得保持期間を最短で 3 日に設定します。
- 時間を短縮してイメージのインポートのコストを削減するために、可能な場合には必ず True Image Recovery オプションを選択します。
  Glacier に送信されたデータを取得するために、バックアップイメージのフラグメントごとに約 4 時間の固有の時間遅延があります。イメージのインポートのフェーズ 2 の場合、この時間遅延は Glacier ストレージのイメージでは一般的です。ただし、ポリシーの True Image Recovery を有効にすると、フェーズ 2 のインポートに費やされる時間は、フラグメントごとに 4 時間から数分へと大幅に短縮されます。フェーズ 1 のインポートは、True Image Recovery がポリシーに対して有効になっているかどうかに関係なく、さらに高速です。
  True Image Recovery のサポート対象の作業負荷およびファイルシステムの詳細については、『NetBackup 管理者ガイド Vol. I』を参照してください。
  イメージのインポート時におけるフェーズの詳細については、『NetBackup 管理者ガイド Vol. I』を参照してください。
- 並列リストアでは、リストア時間を短縮できます。これについては、論理的な境界に複数のイメージを作成するマルチストリーミングを使用してバックアップを作成する必要があります。
- 作業負荷個別リカバリ (GRT) または VMware シングルファイルリストア (SFR) では、マスター、メディア、およびクライアントでのタイムアウトが 5 時間以上増えます。

制限事項

次の制限事項を考慮してください。

- NetBackup アクセラレータ機能は、Amazon Glacier 用に作成されたストレージユニットのポリシーではサポートされていません。[アクセラレータ]チェックボックスは選択しないでください。
- Glacier を使用する CloudCatalyst はサポートされません。

権限

次の権限が必要です。

- ライフサイクルポリシー関連の権限:
  - s3:PutLifecycleConfiguration

  - s3:GetLifecycleConfiguration
- オブジェクトタグ付け権限
  - s3:PutObjectTagging

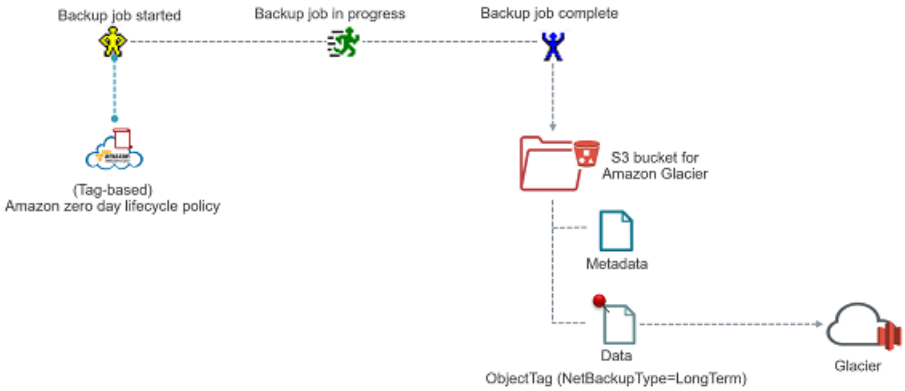
メモ: バケット所有者は、デフォルトでは、これらの権限を持ちます。バケットの所有者は、アクセスポリシーを作成して他のユーザーにこれらの権限を付与できます。

- 必要な IAM USER 権限があることも確認します。p.47 の「Amazon IAM ユーザーに必要な権限」を参照してください。

Amazon Glacier へのデータのバックアップ

NetBackup バックアップジョブを実行して Amazon Glacier にデータをバックアップする場合、NetBackup は Amazon のゼロデイライフサイクルポリシーを内部的に使用します。データオブジェクトが NetBackupType=LongTerm とタグ付けされます。データオブジェクトのみが Glacier ストレージにバックアップされ、メタデータオブジェクトは標準ストレージに格納されます。

次の図に、バックアッププロセスの概要を示します。



Amazon Glacier にテープデータを複製するには

`bpduplicate` コマンドを使用して、Amazon Glacier ストレージにテープデータを複製します。

コマンドについて詳しくは『Veritas NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

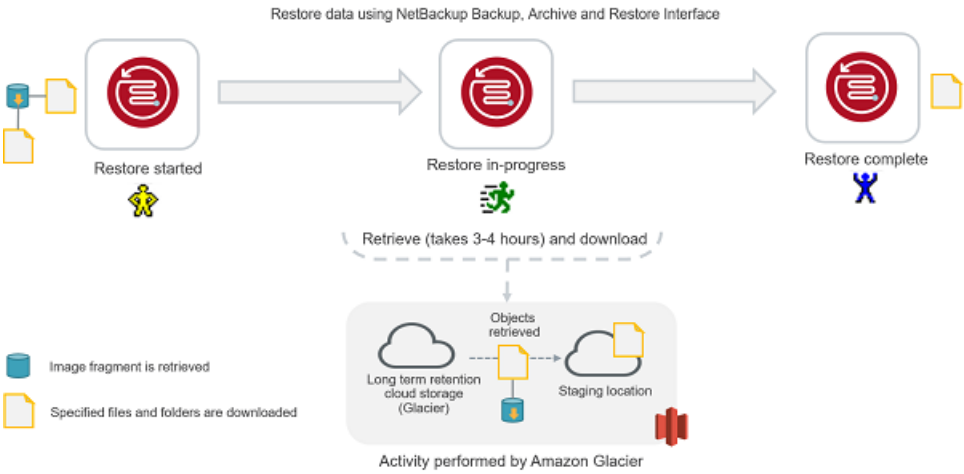
Amazon Glacier からのデータのリストア

NetBackup イメージは、指定されたストレージクラス (この場合は Glacier ストレージクラス) を持つオブジェクトのセットとして格納されます。Amazon Glacier からのリストアは 2 つの段階で行われます。オブジェクトは Amazon によって管理されている内部ステージング場所で最初に取得され、そこから宛先の場所にデータがリストアされます。リストア操作全体には最短で 3 時間から 5 時間かかります。オブジェクトは、指定した取得保持期間に応じて Amazon のステージング場所で利用できます。取得保持期間は最短で 3 日に設定することをお勧めします。取得保持期間が終了すると、データが Amazon Glacier に戻されます。

メモ: NetBackup は Amazon Standard の取得をサポートしており、最短で 3 時間から 5 時間で完了します。

リストアを実行すると、選択したオブジェクトのみがダウンロードされている間に、イメージフラグメント全体がリストアされます。

次の図に、リストアプロセスの概要を示します。

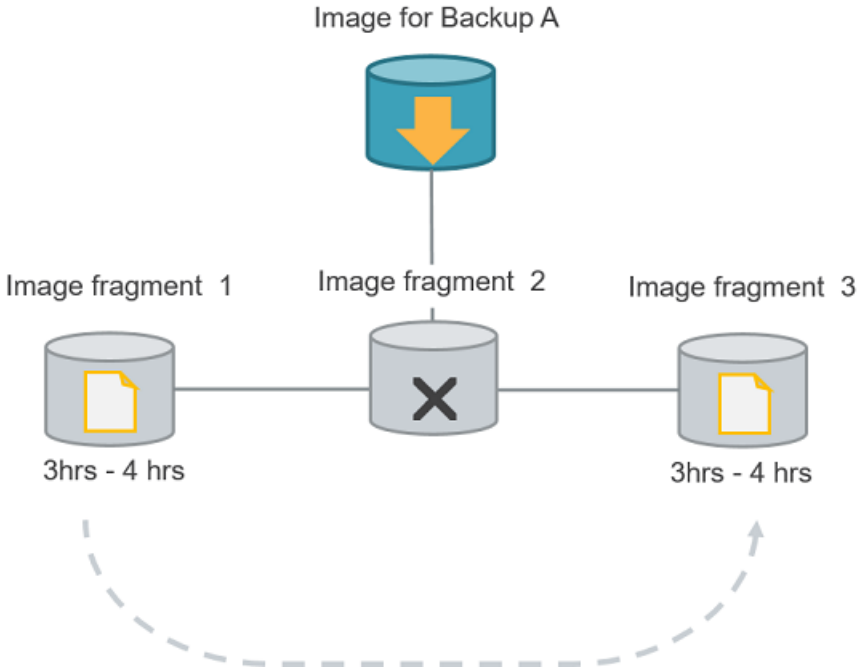


イメージフラグメントのリストアに関する考慮事項

複数のイメージフラグメントに属するファイルとフォルダをリストアする場合は、次の点を考慮してください。

- 一度に 1 つのイメージフラグメントが取得されます。最初のイメージフラグメントの選択したファイルとフォルダがダウンロードされた後に、初めて次のイメージフラグメントが取得されます。

- リストア時間は、イメージフラグメントの数に応じて考慮する必要があります。たとえば、リストアするファイルが 2 つのフラグメントの一部である場合、さらに 6 時間から 10 時間が合計リストア時間に追加されます。



メモ: リストアの取得が開始された後にジョブをキャンセルすると、キャンセルの時点までにステージング場所で取得されたすべてのオブジェクトに対して費用が発生します。

Amazon のクラウド階層化を使用したデータの保護

クラウド階層化を使用してデータを保護するには、LIFECYCLE ストレージクラスを使用します。クラウド階層化を使用すると、データを STANDARD ストレージクラスまたは STANDARD_IA ストレージクラスにバックアップしてから、STANDARD_IA ストレージクラスまたは GLACIER ストレージクラスにデータを移行できます。データが各ストレージクラスに存在する日数を決定するストレージサーバーのプロパティを構成できます。このように、短期的または長期的なデータ保護のためにストレージサーバーを構成できます。

Amazon LIFECYCLE ストレージクラスのクラウドストレージサーバーを構成する方法

1. Amazon LIFECYCLE クラウドストレージサーバーを構成します。

   p.108 の「クラウドストレージのストレージサーバーの構成」を参照してください。

2. 次のストレージサーバーのプロパティを構成します。

   - AMZ:UPLOAD_CLASS
   - AMZ:TRANSITION_TO_STANDARD_IA_AFTER
   - AMZ:TRANSITION_TO_GLACIER_AFTER

   p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。

3. LIFECYCLE ストレージクラスのディスクプールを作成します。

   p.129 の「クラウドストレージのディスクプールの構成」を参照してください。

4. バックアップポリシーを作成します。

   p.151 の「バックアップポリシーの作成」を参照してください。

ベストプラクティス

- 選択されたバケットに既存のライフサイクルポリシーがないことを確認します。
- データを GLACIER に移行するように設定されている場合は、次の点を考慮してください。
  - バケットが属する地域で Amazon Glacier がサポートされていることを確認してください。
  - 複数のイメージを論理的な境界で取得するには、マルチストリームを使用できます。

制限事項

次の制限事項を考慮してください。

- NetBackup アクセラレータ機能は、LIFECYCLE 用に作成されたストレージユニットのポリシーではサポートされていません。[アクセラレータ]チェックボックスは選択しないでください。
- LIFECYCLE を使用した CloudCatalyst はサポートされません。

権限

次の権限が必要です。

- ライフサイクルポリシー関連の権限:
  - s3:PutLifecycleConfiguration

  - s3:GetLifecycleConfiguration
- オブジェクトタグ付け権限
  - s3:PutObjectTagging

メモ: バケット所有者は、デフォルトでは、これらの権限を持ちます。バケットの所有者は、アクセスポリシーを作成して他のユーザーにこれらの権限を付与できます。

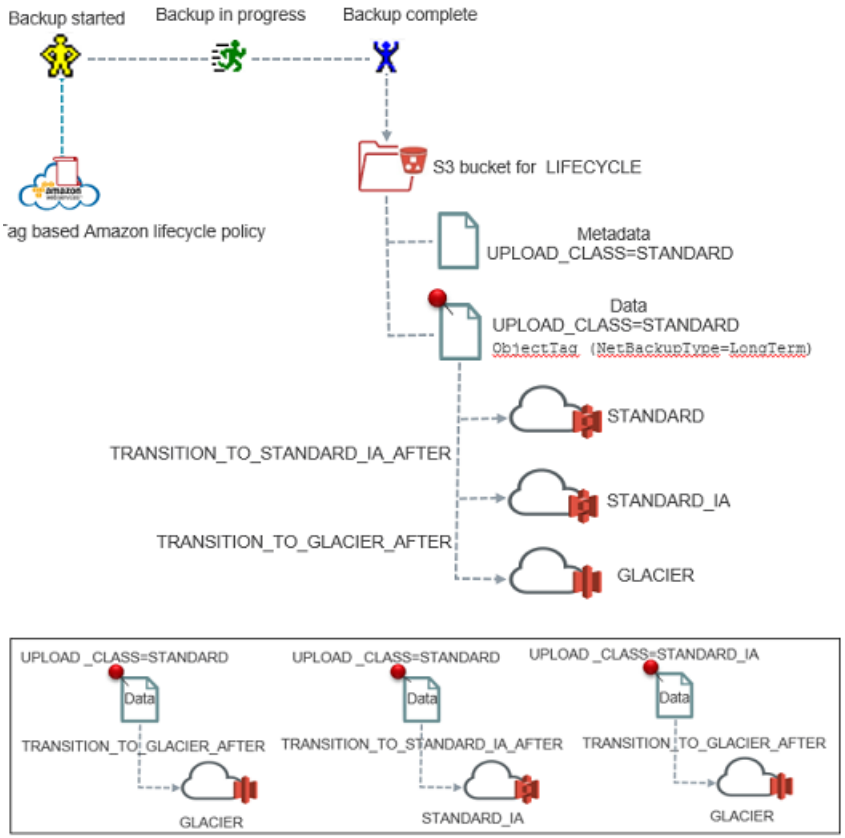
- 必要な IAM USER 権限があることも確認します。p.47 の「Amazon IAM ユーザーに必要な権限」を参照してください。

LIFECYCLE ストレージクラスを使用したデータのバックアップについて

初期時には、バックアップデータはストレージサーバーのプロパティダイアログボックスの設定 AMZ:UPLOAD_CLASS によって決定されたストレージクラスに存在します (デフォルトは STANDARD です)。ただし、データが他のストレージクラスに移行するまでの期間は、次のストレージサーバーのプロパティを変更することで構成できます。

- TRANSITION_TO_STANDARD_IA_AFTER
- TRANSITION_TO_GLACIER_AFTER

図 2-3　指定可能な構成の LIFECYCLE ストレージクラスのバックアッププロセス



ストレージサーバーのプロパティを変更した後、ストレージサーバーのディスクプールごとに新しいバックアップジョブが実行されると、新しいストレージサーバーのプロパティは、ディスクプールに関連付けられているバケットとそのバケットの古い非移行イメージに適用されます。

p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。

p.39 の「長期保持のための Amazon Glacier のデータの保護」を参照してください。

LIFECYCLE ストレージクラスからのデータのリストアについて

リストアするときに、データが STANDARD または STANDARD_IA ストレージクラスにあれば、そのデータは宛先の場所にリストアされます。ただし、データが GLACIER ストレージクラスに存在していれば、データはまず Amazon によって管理されている内部ステージング場所で取得されます。それからデータは宛先の場所にリストアされます。したがっ

て、STANDARD または STANDARD_IA ストレージクラスからデータをリストアするためにかかる時間は、GLACIER ストレージクラスからデータをリストアするためにかかる時間よりもかなり短くなります。

p.42 の「Amazon Glacier からのデータのリストア」を参照してください。

Amazon IAM ユーザーに必要な権限

Amazon (S3) クラウドベンダーで IAM ユーザーを設定している場合は、NetBackup と連携するために次の最小限の権限が必要です。

- s3:CreateBucket
- s3:ListAllMyBuckets
- s3:ListBucket
- s3:GetBucketLocation
- s3:GetObject
- s3:PutObject
- s3:DeleteObject
- s3:PutObjectTagging

詳しくは、『AWS の ID およびアクセス管理』マニュアルを参照してください。

Amazon Glacier の場合は、追加の権限が必要です。p.39 の「長期保持のための Amazon Glacier のデータの保護」を参照してください。

EMC Atmos クラウドストレージの API 形式について

NetBackup Cloud Storage では、Veritas NetBackup を使って EMC Atmos ストレージ API を使うベンダーに対してデータのバックアップとリストアを実行できます。EMC Atmos ストレージ API ベンダーの要件と構成オプションについて詳しくは、次を参照してください。

表 2-12 EMC Atmos ストレージの API 形式に関する情報とトピック

情報	トピック
認定されたベンダー	p.48 の「NetBackup 認定の EMC Atmos クラウドストレージベンダー」を参照してください。
要件	p.48 の「EMC Atmos ストレージ形式の要件」を参照してください。

情報	トピック
ストレージサーバーの構成オプション	p.49 の「EMC Atmos のクラウドストレージプロバイダのオプション」を参照してください。
ストレージサーバー名とネットワーク接続オプション	p.52 の「EMC Atmos のサーバーの詳細な構成オプション」を参照してください。

メモ: NetBackup は、Amazon S3 クラウドストレージの API を使用して EMC ATMOS からのクラウド提供もサポートします。

p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。

NetBackup 認定の EMC Atmos クラウドストレージベンダー

表 2-13 は、NetBackup 8.1.1 リリースの時点において、EMC Atmos ストレージ API を使う NetBackup クラウドストレージで認定されているベンダーを示します。ベンダーは Veritas Technology Partner Program (VTPP) に参加することで認定を受けることができます。NetBackup では、これらのベンダーが提供するストレージにバックアップを送信できます。

表 2-13 NetBackup の EMC Atmos ストレージ形式をサポートするベンダー

ベンダー (Vendor)	注意事項
AT&T	AT&T ではプライベートクラウドストレージも使うことができます。 p.53 の「AT&T のプライベートクラウドについて」を参照してください。

メモ: Veritas は NetBackup リリース間でベンダーを認定する場合があります。この表にリストされていないクラウドストレージベンダーについては、次の Web ページで対応クラウドベンダーの最新のリストを参照してください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.000115793

EMC Atmos ストレージ形式の要件

表 2-14 では、EMC Atmos ストレージ API を使うベンダーの詳細と要件について説明します。

表 2-14 AT&T Synaptic の要件

要件	詳細
ユーザーアカウント	ストレージサーバーを作成するには AT&T Synaptic のユーザー ID とパスワードが必要です。
ストレージ要件	次に、AT&T クラウドストレージの要件を示します。 ■ クラウドストレージの使用を可能にする NetBackup ライセンスが必要です。 ■ NetBackup バックアップのボリュームを作成するには NetBackup を使う必要があります。 NetBackup が作成するボリュームは、必要な Veritas パートナーキーを含んでいます。ボリュームを作成するために AT&T Synaptic インターフェースを使った場合、そのボリュームはパートナーキーを含んでいません。その結果、そのボリュームは NetBackup からのデータを受け入れることができません。 ■ 論理ストレージユニット (LSU) 名 (すなわち、ボリューム名) は、50 文字以下である必要があります。 ボリューム名には、次の文字を使うことができます。 ■ 国際標準化機構 (ISO) のラテン文字アルファベット 26 文字の大文字と小文字の両方。これらは英語のアルファベットと同じ文字です。 ■ 0 から 9 までの整数。 ■ 次のいずれかの文字: `#$_-', ■ AT&T Synaptic アカウントのユーザー名とパスワードが必要です。

NetBackup は、サポートされているクラウドプロバイダのプライベートクラウドをサポートします。

p.53 の「AT&T のプライベートクラウドについて」を参照してください。

EMC Atmos のクラウドストレージプロバイダのオプション

図 2-4 に、EMC Atmos ストレージ API を使うベンダー用の[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]パネルを示します。

図 2-4　AT&T の［クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)］パネル

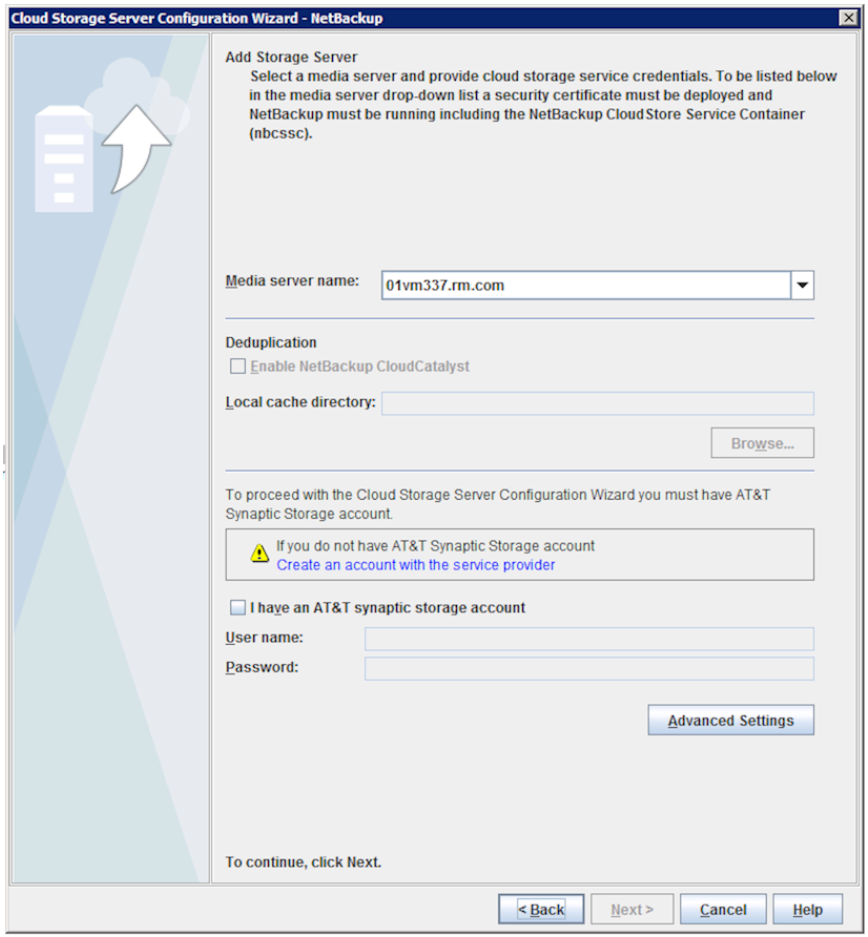


表 2-15では、EMC Atmos ストレージ API を使うベンダーのストレージサーバーの構成オプションについて説明します。

表 2-15 EMC Atmos ストレージ API の構成オプション

フィールド名	必要な内容
メディアサーバー名 (Media Server Name)	NetBackup メディアサーバーをドロップダウンリストから選択します。 クラウドストレージサーバーの必要条件に適合するメディアサーバーのみがドロップダウンリストに表示されます。次のトピックでは、構成の必要条件について説明します。 p.105 の「クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて」を参照してください。 選択したホストが、機能と使用可能なストレージについてストレージベンダーのネットワークに問い合わせます。メディアサーバーはバックアップおよびリストアのためのデータムーバーにもなります。
重複排除 (Deduplication)	このオプションを有効にすると、重複排除データをクラウドにアップロードできる、CloudCatalyst ストレージサーバーが作成されます。 次のいずれかに該当する場合、このオプションはグレー表示になります。 ■ 選択したメディアサーバーに NetBackup 8.1 以降がインストールされていない ■ CloudCatalyst がメディアサーバーオペレーティングシステムをサポートしていない ■ CloudCatalyst がクラウドベンダーをサポートしていない サポート情報については、NetBackup 互換性リストを参照してください。 http://www.netbackup.com/compatibility CloudCatalyst について詳しくは、『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。 http://www.veritas.com/docs/DOC5332
ローカルキャッシュディレクトリ	CloudCatalyst ストレージサーバー上のストレージのパスとして使用されるマウントパスを入力します。 例: `/space/mnt/esfs` 重複排除データは、クラウドにアップロードされる前に、このローカルキャッシュディレクトリに書き込まれます。キャッシュが大きくなるほど、NetBackup が要求をローカルで処理できる可能性が高くなり、読み取りと書き込みのためのクラウドアクセスが回避されます。 注意: ■ このパスは、CloudCatalyst キャッシュ専用のファイルシステムを指す必要があります。パスが他のデータやアプリケーションとストレージを共有していると、誤ったキャッシュ退去が発生します。 ■ NetBackup がローカルキャッシュディレクトリ内のファイルを管理します。ユーザーは、このディレクトリ内のファイルを手動で削除しないでください。

フィールド名	必要な内容
サービスプロバイダによるアカウントの作成	AT&T にアカウントがない場合は、[サービスプロバイダによるアカウントの作成 (Create an account with the service provider)]リンクをクリックします。AT&T のアカウントを作成できる Web ブラウザが開きます。
AT&T Synaptic Storage アカウントがあります (I have an AT&T Synaptic storage account)	[AT&T Synaptic Storage アカウントがあります (I have an AT&T Synaptic storage account)]を選択して、必要なアカウント情報を入力します。
ユーザー名 (User Name)	AT&T ユーザー名を入力します。 アカウントがない場合は、[サービスプロバイダによるアカウントの作成 (Create an account with the service provider)]リンクをクリックします。
パスワード (Password)	[ユーザー名 (User Name)]アカウントのパスワードを入力します。100 文字以下である必要があります。
詳細 (Advanced)	クラウドベンダーのデフォルトストレージサーバーを変更する、またはネットワーク接続の最大数を指定するには、[詳細 (Advanced)]をクリックします。 p.52 の「EMC Atmos のサーバーの詳細な構成オプション」を参照してください。 p.53 の「AT&T のプライベートクラウドについて」を参照してください。

EMC Atmos のサーバーの詳細な構成オプション

次の表で、ストレージサーバー名と設定可能なネットワーク接続の最大数について説明します。これらのオプションは[サーバーの詳細な構成 (Advanced Server Configuration)]ダイアログボックスに表示されます。

表 2-16 EMC Atmos ストレージ形式の詳細設定オプション

オプション	説明
ストレージサーバーを上書きする (Override storage server)	ストレージサーバーを変更するには、このオプションをクリックして、ストレージサーバー名を入力します。 このオプションは、プライベートクラウドの内部ホストを指定するために使用できます。 p.53 の「AT&T のプライベートクラウドについて」を参照してください。

オプション	説明
最大並列実行ジョブ数 (Maximum Concurrent Jobs)	ストレージサーバーへの同時ネットワーク接続数を制限するには、[最大並列実行ジョブ数 (Maximum Concurrent Jobs)]ボックスに値を入力します。ここで値を設定しない場合、NetBackup は[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]ホストプロパティのグローバル値を使います。 p.82 の「[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]プロパティ」を参照してください。

AT&T のプライベートクラウドについて

NetBackup では、AT&T クラウドストレージ用のプライベートクラウドをサポートします。NetBackup でプライベートクラウドを構成するときに、クラウドの内部ホストを指定します。内部ホストを指定する方法には、次の 2 つの種類があります。

[クラウドストレージ構成ウィザード (Cloud Storage Configuration Wizard)]で内部ホストを指定する

1. [クラウドストレージ構成ウィザード (Cloud Storage Configuration Wizard)]のメディアサーバーの選択パネルで、[詳細設定 (Advanced Settings)]をクリックします。
2. [サーバーの詳細な構成 (Advanced Server Configuration)]ダイアログボックスで、[ストレージサーバーを上書きする (Override storage server)]を選択し、ストレージサーバーとして使うホストの名前を入力します。

この方法では、ウィザードのメディアサーバーパネルに[サービスプロバイダでアカウントを作成する (Create an account with service provider)]リンクには、構成プロセスの値がありません。

構成ファイルで内部ホストを指定する

構成ファイルで内部ホストの名前を指定する場合は、[クラウドストレージ構成ウィザード (Cloud Storage Configuration Wizard)]はそのホストをクラウドストレージサーバーとして使います。

1 次の該当する構成ファイルを開きます。
   - UNIX の場合:
     `/usr/openv/java/cloudstorejava.conf`
   - Windows の場合:
     `C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup¥bin¥cloudstorewin.conf`

2 クラウドプロバイダタイプのファイルのセクションで、次のパラメータの値を内部ホストに変更します。

   `DEFAULT_STORAGE_SERVER_NAME`

   完全修飾のホスト名を使うか、ネットワーク環境でホスト名を解決して IP アドレスにできることを確認します。

3 ウィザードパネルの[サービスプロバイダでアカウントを作成する (Create an account with service provider)]リンクで別の Web ページを開く場合は、その URL を使うように次のパラメータを編集します。

   `CLOUD_PROVIDER_URL`

メモ: ベンダからパブリッククラウドを構成するには、構成ファイルを元の内容に変更するか、[クラウドストレージ構成ウィザード (Cloud Storage Configuration Wizard)]で内部ホストを指定する必要があります。

プライベートクラウドを設定する前に、NetBackup をセットアップして利用可能にする必要があります。

p.108 の「クラウドストレージのストレージサーバーの構成」を参照してください。

Microsoft Azure クラウドストレージ API 形式について

NetBackup は、ストレージに Microsoft Azure ストレージ API を使うベンダーのクラウドストレージをサポートします。Microsoft Azure ストレージ API ベンダーの要件と構成オプションについての情報を次に示します。

表 2-17 Microsoft Azure ストレージ API 形式の情報とトピック

情報	トピック
認定されたベンダー	p.55 の「NetBackup 認定の Microsoft Azure クラウドストレージベンダー」を参照してください。

情報	トピック
要件	p.55 の「Microsoft Azure ストレージ形式の要件」を参照してください。
ストレージサーバーの構成オプション	p.56 の「Microsoft Azure クラウドストレージプロバイダのオプション」を参照してください。
SSL とプロキシオプション	p.60 の「Microsoft Azure のサーバーの詳細な構成オプション」を参照してください。

NetBackup 認定の Microsoft Azure クラウドストレージベンダー

表 2-18 は、NetBackup 8.1.1 リリースの時点において、Microsoft Azure ストレージ API を使う NetBackup クラウドストレージで認定されているベンダーを示します。ベンダーは Veritas Technology Partner Program (VTPP) に参加することで認定を受けることができます。

表 2-18 NetBackup の Microsoft Azure ストレージ形式をサポートするベンダー

ベンダー (Vendor)	注意事項
Microsoft	なし。
Microsoft Azure Government	なし。

メモ: Veritas は NetBackup リリース間でベンダーを認定する場合があります。この表にリストされていないクラウドストレージベンダーについては、次の Web ページで対応クラウドベンダーの最新のリストを参照してください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.000115793

Microsoft Azure ストレージ形式の要件

表 2-19 に、NetBackup における Microsoft Azure クラウドストレージの詳細と要件を示します。

表 2-19 Microsoft Azure クラウドストレージの要件

要件	詳細
ライセンス要件	クラウドストレージの使用を可能にする NetBackup ライセンスが必要です。

要件	詳細
Microsoft Azure アカウント要件	Microsoft Azure ストレージアカウントと、少なくとも 1 つのストレージアクセスキー (一次アクセスキーまたは二次アクセスキー) を取得する必要があります。
コンテナ名	Veritas は、NetBackup を使用して、NetBackup で使用するコンテナを作成することを推奨します。 NetBackup の、コンテナ名に関する要件を次に示します。 ■ コンテナ名は 3 文字から 63 文字の長さにする必要があります。 ■ コンテナ名は文字または数値で開始する必要があり、文字、数値、およびダッシュ記号 (-) のみを含めることができます。 ■ ダッシュ記号 (-) の直前または直後に文字または数値が置かれる必要があります。また、連続するダッシュ記号をコンテナ名に含めることはできません。 ■ コンテナ名に含める文字はすべて小文字である必要があります。 次のリンクを参照できます。 https://msdn.microsoft.com/en-us/library/azure/dd135715.aspx

Microsoft Azure クラウドストレージプロバイダのオプション

図 2-5 では、Microsoft Azure クラウドストレージの[クラウドストレージの構成ウィザード (Cloud Storage Configuration Wizard)]パネルについて説明します。

図 2-5 Microsoft Azure の［クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)］パネル

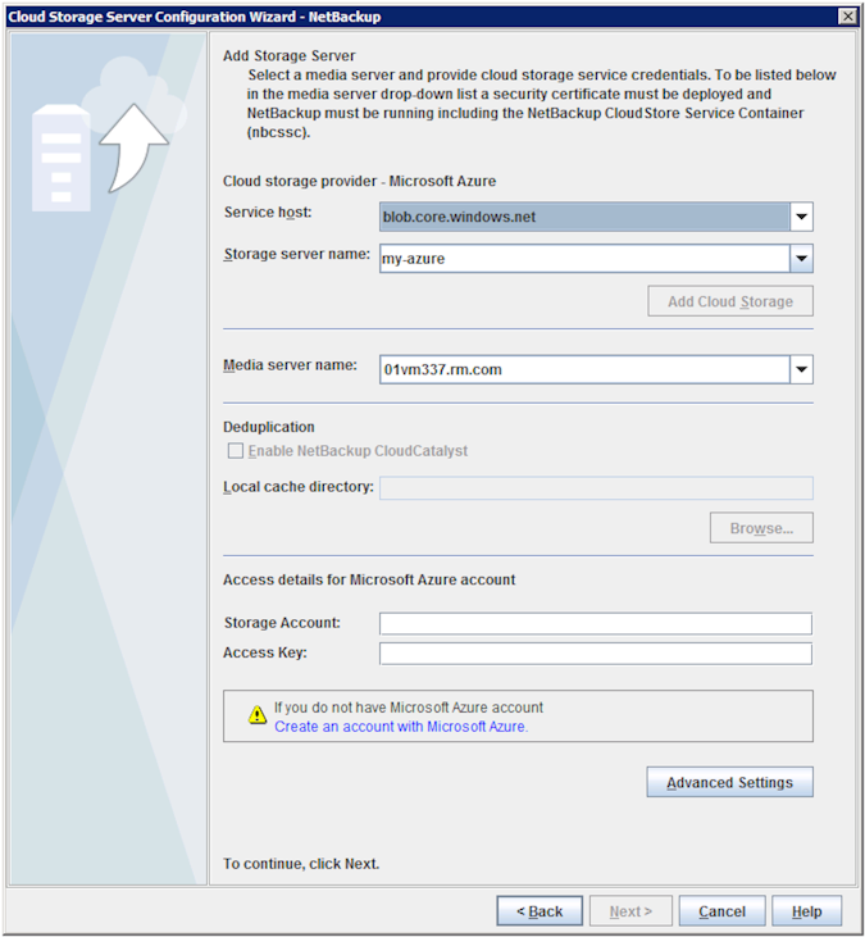


表 2-20 では、Microsoft Azure のストレージサーバー構成オプションについて説明します。

表 2-20 Microsoft Azure ストレージサーバーの構成オプション

フィールド名	必要な内容
サービスホスト (Service host)	サービスホストは、Microsoft Azure のクラウドサービスエンドポイントのホスト名です。 [サービスホスト (Service host)]ドロップダウンリストは、[ストレージアカウント (Storage Account)]も包含する、サービスホストの URL の一部を表示します。 サービスホストの URL の例: *storage_account*.blob.core.windows.net **メモ:** ストレージアカウントを作成した地域 (デフォルトまたは中国) に基づいて、ドロップダウンリストからサービスホストを選択する必要があります。
ストレージサーバー名 (Storage server name)	デフォルトの Azure ストレージサーバー (my-azure) を表示します。デフォルト以外のストレージサーバーも選択できます。 ドロップダウンリストには、使うことのできる名前のみが表示されます。 ドロップダウンリストには、クラウドストレージの論理名を使って別のストレージサーバー名を入力できます。 Azure の同一の物理サービスホストを参照する、異なる複数の名前を使って、複数のストレージサーバーを作成できます。利用できる名前がリストにない場合は、ドロップダウンリストに新しいストレージサーバー名を入力して作成できます。 **メモ:** Veritas は、Azure クラウドストレージを構成するときに追加するストレージサーバー名を論理名にし、物理ホスト名と一致しないようにすることをお勧めします。例: Azure ストレージサーバーを追加するときに、「azure.com」や「azure123.com」などの名前を使わないようにします。これらのサーバーは、クラウドストレージ構成時に失敗を引き起こす可能性のある物理ホストであることがあります。その代わりに、「azure1」や「azureserver1」などのストレージサーバー名を使います。

フィールド名	必要な内容
重複排除 (Deduplication)	このオプションを有効にすると、重複排除データをクラウドにアップロードできる、CloudCatalyst ストレージサーバーが作成されます。 次のいずれかに該当する場合、このオプションはグレー表示になります。 ■ 選択したメディアサーバーに NetBackup 8.1 以降がインストールされていない ■ CloudCatalyst がメディアサーバーオペレーティングシステムをサポートしていない ■ CloudCatalyst がクラウドベンダーをサポートしていない サポート情報については、NetBackup 互換性リストを参照してください。 http://www.netbackup.com/compatibility CloudCatalyst について詳しくは、『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。 http://www.veritas.com/docs/DOC5332
ローカルキャッシュディレクトリ	CloudCatalyst ストレージサーバー上のストレージのパスとして使用されるマウントパスを入力します。 例: `/space/mnt/esfs` 重複排除データは、クラウドにアップロードされる前に、このローカルキャッシュディレクトリに書き込まれます。キャッシュが大きくなるほど、NetBackup が要求をローカルで処理できる可能性が高くなり、読み取りと書き込みのためのクラウドアクセスが回避されます。 注意: ■ このパスは、CloudCatalyst キャッシュ専用のファイルシステムを指す必要があります。パスが他のデータやアプリケーションとストレージを共有していると、誤ったキャッシュ退去が発生します。 ■ NetBackup がローカルキャッシュディレクトリ内のファイルを管理します。ユーザーは、このディレクトリ内のファイルを手動で削除しないでください。
メディアサーバー名 (Media server name)	NetBackup メディアサーバーをドロップダウンリストから選択します。 クラウドストレージサーバーの必要条件に適合するメディアサーバーのみがドロップダウンリストに表示されます。次のトピックでは、構成の必要条件について説明します。 p.105 の「クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて」を参照してください。 選択したホストが、機能と使用可能なストレージについてストレージベンダーのネットワークに問い合わせます。メディアサーバーはバックアップおよびリストアのためのデータムーバーにもなります。

フィールド名	必要な内容
ストレージアカウント (Storage Account)	クラウドバックアップのために使うストレージアカウントを入力します。 Microsoft Azure ストレージサービスについて詳しくは、Microsoft Azure のドキュメントを参照してください。 http://azure.microsoft.com 次の URL を使用してストレージアカウントを作成します。 https://portal.azure.com
アクセスキー (Access key)	Azure のアクセスキーを入力します。プライマリアクセスキーまたはセカンダリアクセスキーを入力できます。100 文字以下である必要があります。 アクセスキーについては次の URL を参照してください。 https://portal.azure.com
詳細設定 (Advanced Settings)	Azure の SSL またはプロキシ設定を変更するには、[詳細設定 (Advanced Settings)]をクリックします。 p.60 の「Microsoft Azure のサーバーの詳細な構成オプション」を参照してください。

Microsoft Azure のサーバーの詳細な構成オプション

次の表で、すべての Microsoft Azure 互換クラウドプロバイダに固有の SSL とプロキシオプションについて説明します。これらのオプションは[サーバーの詳細な構成 (Advanced Server Configuration)]ダイアログボックスに表示されます。

表 2-21 ［全般 (General)］設定オプション

オプション	説明
SSL を使用する	ユーザー認証、または NetBackup とクラウドストレージプロバイダ間のデータ転送に SSL (Secure Sockets Layer) プロトコルを使う場合は、このオプションを選択します。 ■ ［認証のみ (Authentication only)］ - クラウドストレージにアクセスするときのユーザーの認証で SSL のみを使う場合は、このオプションを選択します。 ■ ［データ転送 (Data Transfer)］ - SSL を使ってユーザーを認証し、NetBackup からクラウドストレージにデータを転送するには、このオプションを選択します。 **メモ:** NetBackup は、SSL モードでのクラウドストレージとの通信時に、認証局（CA）によって署名された証明書のみをサポートします。クラウドサーバー (パブリックまたはプライベート) に CA による署名付き証明書があることを確認します。CA によって署名された証明書がない場合は、SSL モードでの NetBackup とクラウドプロバイダ間のデータ転送が失敗します。

表 2-22 ［プロキシ設定 (Proxy Settings)］タブのオプション

オプション	説明
プロキシサーバーを使用する	プロキシサーバーを使用しプロキシサーバーの設定を指定する場合は、［プロキシサーバーを使用する (Use Proxy Server)］オプションを選択します。［プロキシサーバーを使用する (Use Proxy Server)］オプションを選択すると、次の詳細を指定できます。 ■ プロキシホスト (Proxy Host): プロキシサーバーの IP アドレスまたは名前を指定します。 ■ プロキシポート (Proxy Port): プロキシサーバーのポート番号を指定します。 ■ プロキシタイプ (Proxy Type): 次のいずれか 1 つのプロキシタイプを選択できます。 　■ HTTP 　　**メモ:** HTTP プロキシタイプのプロキシの資格情報を提供する必要があります。 　■ SOCKS 　■ SOCKS4 　■ SOCKS5 　■ SOCKS4A

オプション	説明
プロキシのトンネリングを使用 (Use Proxy Tunneling)	HTTP プロキシタイプのプロキシのトンネリングを有効にすることができます。 [プロキシのトンネリングを使用 (Use Proxy Tunneling)]を有効にすると、HTTP CONNECT 要求がクラウドメディアサーバーから HTTP プロキシサーバーに送信され、TCP 接続がクラウドバックエンドストレージに直接転送されます。 データは、接続からヘッダーまたはデータを読み取ることがなくプロキシサーバーを通過します。
認証形式 (Authentication Type)	HTTP プロキシタイプを使用している場合は、次のいずれかの認証形式を選択できます。 ■ なし (None): 認証が有効になりません。ユーザー名とパスワードは要求されません。 ■ NTLM: ユーザー名とパスワードが必要です。 ■ 基本 (Basic): ユーザー名とパスワードが必要です。 [ユーザー名 (Username)]はプロキシサーバーのユーザー名です。 [パスワード (Password)]は空にすることができます。最大 256 文字を使用できます。

OpenStack Swift クラウドストレージの API 形式について

NetBackup は、ストレージに OpenStack Swift のストレージ API を使用するベンダーのクラウドストレージをサポートします。OpenStack Swift のストレージ API ベンダー向けの要件と構成オプションに関する情報は、次のとおりです。

表 2-23 OpenStack Swift ストレージ API 形式の情報とトピック

情報	トピック
認定されたベンダー	p.63 の「NetBackup 認定の OpenStack Swift クラウドストレージベンダー」を参照してください。
要件	p.64 の「OpenStack Swift のストレージ形式の要件」を参照してください。
ストレージサーバーの構成オプション	p.65 の「OpenStack Swift のクラウドストレージプロバイダのオプション」を参照してください。
領域とホスト構成オプション	p.68 の「OpenStack Swift のストレージ領域のオプション」を参照してください。

情報	トピック
クラウドインスタンスの構成オプション	p.71 の「OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション」を参照してください。
プロキシの接続オプション	p.71 の「OpenStack Swift プロキシ設定」を参照してください。

Rackspace Cloud Files は特別なケースであり、次のトピックで説明しています。

- p.73 の「Rackspace Cloud Files ストレージの要件について」を参照してください。
- p.73 の「Rackspace ストレージサーバーの構成オプション」を参照してください。
- p.76 の「Rackspace のプライベートクラウドについて」を参照してください。

NetBackup 認定の OpenStack Swift クラウドストレージベンダー

表 2-24 は、NetBackup 8.1.1 リリースの時点で NetBackup で認定されている OpenStack Swift 互換クラウドベンダーを示します。クラウドベンダーは Veritas Technology Partner Program (VTPP) に参加することで認定を受けることができます。

表 2-24 NetBackup がサポートする OpenStack Swift 互換クラウドベンダー

クラウドベンダー	注意事項
Oracle	本リリースの時点では、NetBackup は認証 V1 のみをサポートします。
Rackspace Cloud Files	Rackspace Cloud Files は特別なケースであり、次のトピックで説明しています。 ■ p.73 の「Rackspace Cloud Files ストレージの要件について」を参照してください。 ■ p.73 の「Rackspace ストレージサーバーの構成オプション」を参照してください。 ■ p.76 の「Rackspace のプライベートクラウドについて」を参照してください。
SwiftStack	OpenStack Swift に関する注意事項はありません。NetBackup は Amazon S3 ストレージ API 形式を使う SwiftStack もサポートします。 p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。
IBM Softlayer	注意事項はありません。
FUJITSU クラウド サービス K5	注意事項はありません。

メモ: Veritasは NetBackup リリースの更新前にベンダーを認定する場合があります。この表にリストされていないクラウドストレージベンダーについては、次の Web ページで対応クラウドベンダーの最新のリストを参照してください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.000115793

OpenStack Swift のストレージ形式の要件

次の表に、OpenStack Swift と互換性のあるクラウドに関する詳細と要件へのリンクを示します。

表 2-25 OpenStack Swift と互換性のあるクラウドストレージの要件

要件	詳細
ライセンス要件	クラウドストレージを許可する NetBackup ライセンスを保有している必要があります。
ストレージアカウントの要件	クラウドストレージアカウントにアクセスするために必要なクレデンシャルを取得する必要があります。 認証 V1 を使用する場合、クラウドストレージにアクセスするユーザーの検証に、ユーザー名とパスワードのみが必要になります。 認証バージョン Identity V2 を使用する場合、クラウドストレージにアクセスするユーザーの検証に、ユーザー名、パスワード、テナント ID またはテナント名が必要になります。
コンテナ	OpenStack Swift 準拠のクラウドプロバイダのコンテナは、NetBackup に作成できません。ネイティブクラウドツールを使用してコンテナを作成する必要があります。 コンテナ名は、次の必要条件に従う必要があります。 ■ コンテナ名は 3 文字から 255 文字である必要があります。 ■ 国際標準化機構 (ISO) のラテン文字アルファベットの 26 文字の小文字。これらは英語のアルファベットと同じ小文字です。 ■ 0 から 9 までの整数。 ■ 次の文字 (コンテナ名の一文字目には使用できません): ピリオド (.)、下線 (_)、ダッシュ (-)。 例外: 通信に SSL を使用する場合は、ピリオドを使用できません。デフォルトでは、NetBackup は通信に SSL を使用します。 p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。 **メモ:** これらの命名規則に従ったコンテナのみが、NetBackup にリストされます。

OpenStack Swift のクラウドストレージプロバイダのオプション

図 2-6は、OpenStack Swift 互換クラウドストレージ用の[クラウドストレージプロバイダウィザード (cloud storage provider wizard)]パネルを示します。このパネルには、クラウドプロバイダとアクセスに関する情報が含まれます。

図 2-6 [クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]パネル

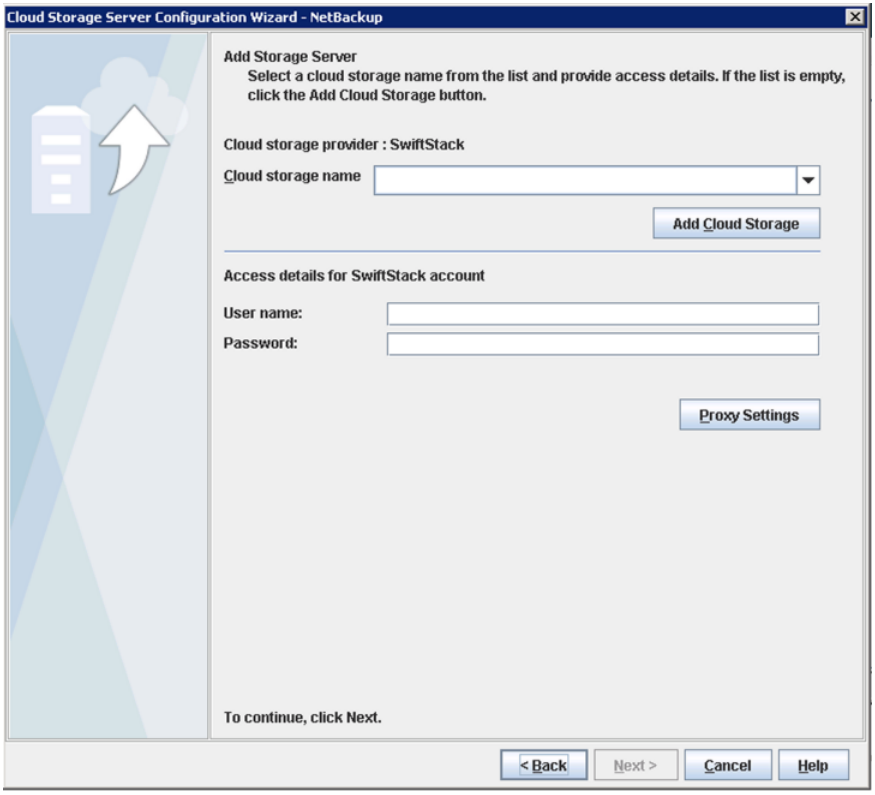


表 2-26では、OpenStack Swift クラウドストレージの構成オプションについて説明します。

表 2-26 OpenStack Swift プロバイダとアクセスの詳細

フィールド名	必要な内容
クラウドストレージプロバイダ (Cloud storage provider)	選択したクラウドプロバイダの名前を表示します。

フィールド名	必要な内容
クラウドストレージ名 (Cloud storage name)	リストからクラウドストレージの名前を選択します。リストが空白の場合は、クラウドストレージインスタンスを追加する必要があります。[クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)]オプションの説明を参照してください。
クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)	クラウドストレージの追加オプションをクリックして、必要な情報を追加、選択、入力します。 p.71 の「OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション」を参照してください。
テナント ID (Tenant ID) / テナント名 (Tenant Name)	選択内容に基づき、クラウドストレージのクレデンシャルに関連付けられているテナント ID またはテナント名を入力します。 **メモ:** このフィールドは、[クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)]ダイアログボックスで Identity v2 認証バージョンを選択した場合のみに表示されます。 p.71 の「OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション」を参照してください。
ユーザー名 (User name)	クラウドストレージにアクセスするために必要なユーザー名を入力します。
パスワード (Password)	クラウドストレージにアクセスするために必要なパスワードを入力します。100 文字以下である必要があります。
プロキシ設定 (Proxy Settings)	クラウドベンダーのデフォルトストレージサーバーを変更するか、またはネットワーク接続の最大数を指定するには[詳細設定 (Advanced Settings)]をクリックします。
ユーザー ID (User ID)	選択内容に基づき、クラウドストレージのクレデンシャルに関連付けられているユーザー ID またはユーザー名を入力します。ユーザー ID を指定するときにユーザー名とドメインの情報は必要ありません。 **メモ:** このフィールドは、[認証バージョン]ダイアログボックスで Identity v3 認証バージョンを選択した場合のみに表示されます。 p.71 の「OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション」を参照してください。
ドメイン ID/ドメイン名 (ユーザーの詳細)	選択内容に基づき、クラウドストレージのクレデンシャルに関連付けられているユーザーのドメイン ID またはドメイン名を入力します。 **メモ:** このフィールドは、[認証バージョン]ダイアログボックスで Identity v3 認証バージョンを選択した場合のみに表示されます。 p.71 の「OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション」を参照してください。

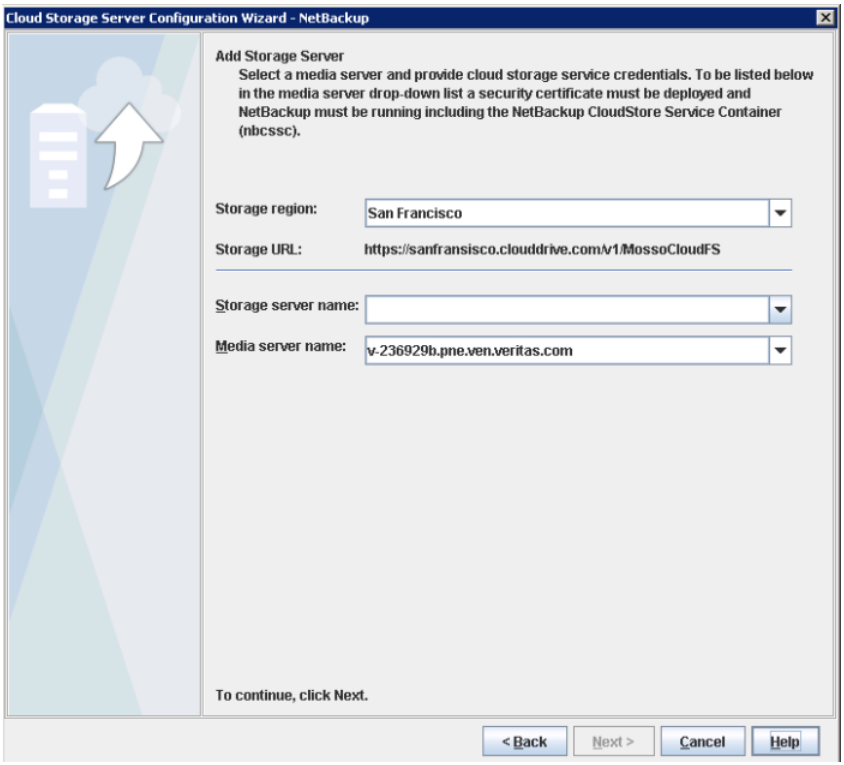
フィールド名	必要な内容
プロジェクト ID/プロジェクト名	選択内容に基づき、クラウドストレージのクレデンシャルに関連付けられているプロジェクト ID またはプロジェクト名を入力します。プロジェクト ID を指定するときにプロジェクト名とドメインの情報は必要ありません。 **メモ:** このフィールドは、[認証バージョン]ダイアログボックスで Identity v3 認証バージョンを選択した場合のみに表示されます。 p.71 の「OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション」を参照してください。
ドメイン ID/ドメイン名 (Domain ID / Domain name) (プロジェクトの詳細)	選択内容に基づき、クラウドストレージのクレデンシャルに関連付けられているプロジェクトのドメイン ID またはドメイン名を入力します。 **メモ:** このフィールドは、[認証バージョン]ダイアログボックスで Identity v3 認証バージョンを選択した場合のみに表示されます。 p.71 の「OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション」を参照してください。
重複排除 (Deduplication)	このオプションを有効にすると、重複排除データをクラウドにアップロードできる、CloudCatalyst ストレージサーバーが作成されます。 次のいずれかに該当する場合、このオプションはグレー表示になります。 ■ 選択したメディアサーバーに NetBackup 8.1 以降がインストールされていない ■ CloudCatalyst がメディアサーバーオペレーティングシステムをサポートしていない ■ CloudCatalyst がクラウドベンダーをサポートしていない サポート情報については、NetBackup 互換性リストを参照してください。 http://www.netbackup.com/compatibility CloudCatalyst について詳しくは、『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。 http://www.veritas.com/docs/DOC5332

フィールド名	必要な内容
ローカルキャッシュディレクトリ	CloudCatalyst ストレージサーバー上のストレージのパスとして使用されるマウントパスを入力します。 例: `/space/mnt/esfs` 重複排除データは、クラウドにアップロードされる前に、このローカルキャッシュディレクトリに書き込まれます。キャッシュが大きくなるほど、NetBackup が要求をローカルで処理できる可能性が高くなり、読み取りと書き込みのためのクラウドアクセスが回避されます。 注意: ■ このパスは、CloudCatalyst キャッシュ専用のファイルシステムを指す必要があります。パスが他のデータやアプリケーションとストレージを共有していると、誤ったキャッシュ退去が発生します。 ■ NetBackup がローカルキャッシュディレクトリ内のファイルを管理します。ユーザーは、このディレクトリ内のファイルを手動で削除しないでください。

OpenStack Swift のストレージ領域のオプション

図 2-7は、OpenStack Swift 互換クラウドストレージ用の［ストレージ領域ウィザード (storage region wizard)］パネルを示します。このパネルには、ストレージ領域とストレージホストに関する情報が含まれます。

図 2-7 ［クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)］パネル



プロバイダとアクセスの詳細が、クラウドストレージ設定を NetBackup ストレージ設定にマッピングするために使われます。クラウドストレージ領域が NetBackup ストレージサーバーにマッピングされます。NetBackup ストレージサーバーに対するすべてのバックアップでは、マッピング先となるクラウドストレージ領域を使います。

メモ: 1 つの NetBackup ストレージサーバーに対して 1 つのクラウドストレージ領域がマッピングされます。

表 2-27では、OpenStack Swift クラウドストレージの構成オプションについて説明します。

表 2-27 OpenStack Swift 領域とホストの詳細

フィールド名	説明
ストレージ領域 (Storage region)	クラウドストレージ領域を選択します。 バックアップをクラウドに送信する NetBackup メディアサーバーに地理的に最も近いクラウドストレージ領域を使うことができます。詳しくは、ストレージ管理者にお問い合わせください。 **メモ:** このフィールドは、[クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)]ダイアログボックスで Identity v2 認証バージョンを選択した場合のみに表示されます。 p.71 の「OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション」を参照してください。
ストレージの URL (Storage URL)	クラウドストレージ URL は、ストレージ領域の選択に基づいて自動的に分布されます。このフィールドは参照専用です。編集できません。 **メモ:** このフィールドは、[クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)]ダイアログボックスで Identity v2 認証バージョンを選択した場合のみに表示されます。 p.71 の「OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション」を参照してください。
ストレージサーバー名 (Storage server name)	ストレージサーバーの一意の名前を入力します。 **メモ:** Veritasは、OpenStack Swift 対応クラウドプロバイダを構成するときに追加するストレージサーバー名を論理名にし、物理ホスト名と一致しないようにすることをお勧めします。例: Oracle ストレージサーバーを追加するときに、「oracle.com」や「oracle123.com」などの名前を使わないようにします。これらのサーバーは、クラウドストレージ構成時に失敗を引き起こす可能性のある物理ホストであることがあります。代わりに、「oracle1」または「oracleserver1」などのストレージサーバー名を使います。
メディアサーバー名 (Media server name)	NetBackup メディアサーバーをドロップダウンリストから選択します。ドロップダウンリストには、NetBackup 8.1.1 以降のメディアサーバーのみが表示されます。また、クラウドストレージサーバーの必要条件に適合するメディアサーバーのみがドロップダウンリストに表示されます。次のトピックでは、構成の必要条件について説明します。 p.105 の「クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて」を参照してください。 選択したホストが、機能と使用可能なストレージについてストレージベンダーのネットワークに問い合わせます。メディアサーバーはバックアップおよびリストアのためのデータムーバーにもなります。

OpenStack Swift のクラウドストレージの追加の構成オプション

次の表に、[クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)]ダイアログボックスの構成オプションについて説明します。このダイアログボックスは、OpenStack プロバイダ用のウィザードパネルで[クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)]をクリックすると表示されます。

表 2-28 クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)

フィールド	説明
クラウドストレージプロバイダ (Cloud storage provider)	前のウィザード パネルからのクラウドストレージプロバイダが表示されます。
クラウドストレージ名 (Cloud storage name)	認証サービスエンドポイントを識別する一意の名前を入力します。 別のストレージサーバーに対して、同じ認証サービスエンドポイントを再利用できます。
認証場所 (Authentication location)	このフィールドは、カスタムの認証 URL を持つクラウドプロバイダには表示されません。 クラウドストレージの認証場所を選択します。または、[その他 (Other)]を選択します。 **メモ:** [その他 (Other)]を選択する場合は、認証 URL を入力する必要があります。
認証バージョン (Authentication version)	使う認証バージョンを選択します。 OpenStack の Identity API を使って認証を行わない場合は、[identity サービスを使わない (Do not use identity service)]を選択します。
認証 URL (Authentication URL)	お使いのクラウドベンダーが提供した認証 URL を入力します。 認証 URL は、HTTP または HTTPS とポート番号で構成されます。例: http://mycloud.example.com:5000/v2.0/tokens カスタムインスタンスの場合、IPv6 エンドポイントを使用するには、IPv6 と同等の認証 URL を使用してインスタンスを更新または新規作成する必要があります。

OpenStack Swift プロキシ設定

セキュリティの目的から、プロキシサーバーを使ってクラウドストレージとの通信を確立することができます。

次の表で、[プロキシ設定 (Proxy Settings)]ダイアログボックスのオプションについて説明します。

表 2-29 OpenStack Swift のプロキシ設定

オプション	説明
プロキシサーバーを使用する	プロキシサーバーを使用しプロキシサーバーの設定を指定する場合は、[プロキシサーバーを使用する (Use Proxy Server)]オプションを選択します。[プロキシサーバーを使用する (Use Proxy Server)]オプションを選択すると、次の詳細を指定できます。 ■ プロキシホスト (Proxy Host): プロキシサーバーの IP アドレスまたは名前を指定します。 ■ プロキシポート (Proxy Port): プロキシサーバーのポート番号を指定します。有効値: 1 ～ 65535 ■ プロキシタイプ (Proxy Type): 次のいずれか 1 つのプロキシタイプを選択できます。 ■ HTTP **メモ:** HTTP プロキシタイプのプロキシの資格情報を提供する必要があります。 ■ SOCKS ■ SOCKS4 ■ SOCKS5 ■ SOCKS4A
プロキシのトンネリングを使用 (Use Proxy Tunneling)	HTTP プロキシタイプのプロキシのトンネリングを有効にすることができます。 [プロキシのトンネリングを使用 (Use Proxy Tunneling)]を有効にすると、HTTP CONNECT 要求がクラウドメディアサーバーから HTTP プロキシサーバーに送信され、TCP 接続がクラウドバックエンドストレージに直接転送されます。 データは、接続からヘッダーまたはデータを読み取ることがなくプロキシサーバーを通過します。
認証形式 (Authentication Type)	HTTP プロキシタイプを使用している場合は、次のいずれかの認証形式を選択できます。 ■ なし (None): 認証が有効になりません。ユーザー名とパスワードは要求されません。 ■ NTLM: ユーザー名とパスワードが必要です。 ■ 基本 (Basic): ユーザー名とパスワードが必要です。 [ユーザー名 (Username)]はプロキシサーバーのユーザー名です。 [パスワード (Password)]は空にすることができます。最大 256 文字を使用できます。

Rackspace Cloud Files ストレージの要件について

NetBackup Cloud Storage を使うと、Veritas NetBackup は Rackspace Cloud Files™ とのデータのバックアップとリストアを実施できます。

表 2-30 に、Rackspace CloudFiles の詳細および要件の概要を示します。

表 2-30 Rackspace Cloud Files の要件

要件	詳細
Rackspace Cloud Files アカウント	Rackspace アカウントを取得する必要があります。アカウントにはユーザー名とパスワードがあります。Rackspace 処理に従ってアクセスキーを生成する必要があります。ユーザー名とアクセスキーはストレージサーバーを構成する際に必要になります。
ストレージ要件	次に、Rackspace CloudFiles の要件を示します。 ■ クラウドストレージを許可する NetBackup ライセンスを保有している必要があります。 ■ Rackspace Cloud Files アカウントのユーザー名とパスワードが必要です。 ■ NetBackup バックアップ用のクラウドストレージボリュームを作成するには NetBackup を使う必要があります。 NetBackup が作成するボリュームには、必要な Veritas パートナーキーが含まれています。ボリュームを作成するために Cloud Files インターフェースを使った場合、そのボリュームはパートナーキーを含んでいません。その結果、そのボリュームは NetBackup からのデータを受け入れることができません。 ■ ボリューム名には、次の文字を使うことができます。 　■ 国際標準化機構 (ISO) のラテン文字アルファベット 26 文字の大文字と小文字の両方。これらは英語のアルファベットと同じ文字です。 　■ 0 から 9 までの整数。 　■ 次のいずれかの文字: 　`~!@#$%^&*()- _+=|¥¥[]{}':;?><.,

p.73 の「Rackspace ストレージサーバーの構成オプション」を参照してください。

NetBackup は、サポートされているクラウドプロバイダのプライベートクラウドをサポートします。

p.76 の「Rackspace のプライベートクラウドについて」を参照してください。

Rackspace ストレージサーバーの構成オプション

図 2-8は Rackspace クラウドストレージの[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]パネルを示します。

図 2-8　Rackspace の［クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)］パネル

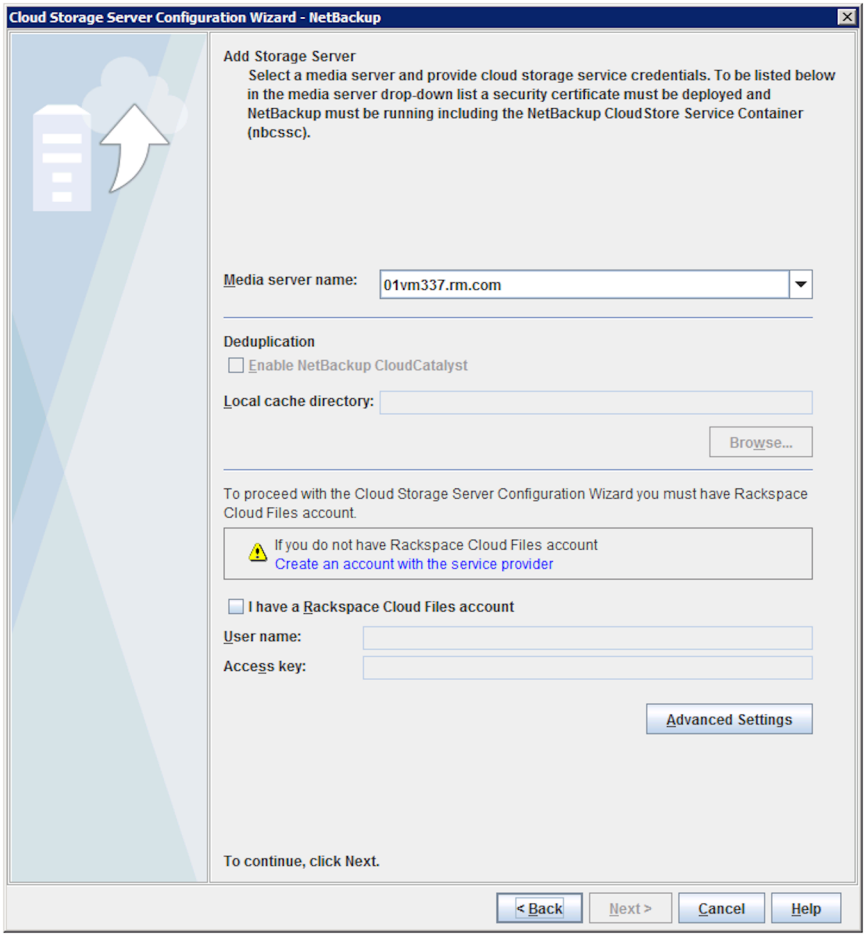


表 2-31 では、Rackspace クラウドストレージの構成オプションについて説明します。

表 2-31 Rackspace ストレージサーバーの構成オプション

フィールド名	必要な内容
メディアサーバー名	NetBackup メディアサーバーをドロップダウンリストから選択します。 クラウドストレージサーバーの必要条件に適合するメディアサーバーのみがドロップダウンリストに表示されます。次のトピックでは、構成の必要条件について説明します。 p.105 の「クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて」を参照してください。 選択したホストが、機能と使用可能なストレージについてストレージベンダーのネットワークに問い合わせます。メディアサーバーはバックアップおよびリストアのためのデータムーバーにもなります。
重複排除 (Deduplication)	このオプションを有効にすると、重複排除データをクラウドにアップロードできる、CloudCatalyst ストレージサーバーが作成されます。 次のいずれかに該当する場合、このオプションはグレー表示になります。 ■ 選択したメディアサーバーに NetBackup 8.1 以降がインストールされていない ■ CloudCatalyst がメディアサーバーオペレーティングシステムをサポートしていない ■ CloudCatalyst がクラウドベンダーをサポートしていない サポート情報については、NetBackup 互換性リストを参照してください。 http://www.netbackup.com/compatibility CloudCatalyst について詳しくは、『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。 http://www.veritas.com/docs/DOC5332
ローカルキャッシュディレクトリ	CloudCatalyst ストレージサーバー上のストレージのパスとして使用されるマウントパスを入力します。 例: `/space/mnt/esfs` 重複排除データは、クラウドにアップロードされる前に、このローカルキャッシュディレクトリに書き込まれます。キャッシュが大きくなるほど、NetBackup が要求をローカルで処理できる可能性が高くなり、読み取りと書き込みのためのクラウドアクセスが回避されます。 注意: ■ このパスは、CloudCatalyst キャッシュ専用のファイルシステムを指す必要があります。パスが他のデータやアプリケーションとストレージを共有していると、誤ったキャッシュ退去が発生します。 ■ NetBackup がローカルキャッシュディレクトリ内のファイルを管理します。ユーザーは、このディレクトリ内のファイルを手動で削除しないでください。
サービスプロバイダによるアカウントの作成	Rackspace にアカウントがない場合は、[サービスプロバイダによるアカウントの作成 (Create an account with the service provider)]リンクをクリックします。Rackspace のアカウントを作成できる Web ブラウザが開きます。

フィールド名	必要な内容
Rackspace Cloud Files アカウントがあります (I have a Rackspace Cloud Files account)	[Rackspace Cloud Files アカウントがあります (I have a Rackspace Cloud Files account)]を選択して、必要なアカウント情報を入力します。
ユーザー名 (User Name)	Rackspace Cloud Files アカウントのユーザー名を入力します。 アカウントがない場合は、[サービスプロバイダによるアカウントの作成 (Create an account with the service provider)]リンクをクリックします。
アクセスキー (Access key)	Rackspace Cloud Files アカウントのアクセスキーを入力します。100 文字以下である必要があります。
詳細設定 (Advanced Settings)	クラウドベンダーのデフォルトストレージサーバーを変更するか、またはネットワーク接続の最大数を指定するには[詳細設定 (Advanced Settings)]をクリックします。 p.76 の「Rackspace のプライベートクラウドについて」を参照してください。

Rackspace のプライベートクラウドについて

NetBackup は、Rackspaces のプライベートクラウドをサポートします。NetBackup でプライベートクラウドを構成するときに、クラウドの内部ホストを指定します。内部ホストを指定する方法には、次の 2 つの種類があります。

[クラウドストレージ構成ウィザード (Cloud Storage Configuration Wizard)]で内部ホストを指定する

1. [クラウドストレージ構成ウィザード (Cloud Storage Configuration Wizard)]のメディアサーバーの選択パネルで、[詳細設定 (Advanced Settings)]をクリックします。
2. [サーバーの詳細な構成 (Advanced Server Configuration)]ダイアログボックスで、[ストレージサーバーを上書きする (Override storage server)]を選択し、ストレージサーバーとして使うホストの名前を入力します。

この方法では、ウィザードのメディアサーバーパネルに[サービスプロバイダでアカウントを作成する (Create an account with service provider)]リンクには、構成プロセスの値がありません。

構成ファイルで内部ホストを指定する

構成ファイルで内部ホストの名前を指定する場合は、[クラウドストレージ構成ウィザード (Cloud Storage Configuration Wizard)]はそのホストをクラウドストレージサーバーとして使います。

1 次の該当する構成ファイルを開きます。
   - UNIX の場合:
     `/usr/openv/java/cloudstorejava.conf`
   - Windows の場合:
     `C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup¥bin¥cloudstorewin.conf`

2 クラウドプロバイダタイプのファイルのセクションで、次のパラメータの値を内部ホストに変更します。

   `DEFAULT_STORAGE_SERVER_NAME`

   完全修飾のホスト名を使うか、ネットワーク環境でホスト名を解決して IP アドレスにできることを確認します。

3 ウィザードパネルの[サービスプロバイダでアカウントを作成する (Create an account with service provider)]リンクで別の Web ページを開く場合は、その URL を使うように次のパラメータを編集します。

   `CLOUD_PROVIDER_URL`

メモ: ベンダからパブリッククラウドを構成するには、構成ファイルを元の内容に変更するか、[クラウドストレージ構成ウィザード (Cloud Storage Configuration Wizard)]で内部ホストを指定する必要があります。

プライベートクラウドを設定する前に、NetBackup をセットアップして利用可能にする必要があります。

p.108 の「クラウドストレージのストレージサーバーの構成」を参照してください。

3

NetBackup のクラウドストレージの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup でクラウドストレージの構成を開始する前に
- NetBackup のクラウドストレージの構成
- Cloud のインストール要件
- ［拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)］プロパティ
- ［クラウドストレージ (Cloud Storage)］プロパティ
- NetBackup CloudStore サービスコンテナについて
- ホスト名ベースの証明書の配備
- ホスト ID ベースの証明書の配備
- クラウドバックアップ用のデータ圧縮について
- クラウドストレージのデータ暗号化について
- NetBackup クラウドストレージの暗号化のキー管理について
- クラウドストレージサーバーについて
- クラウドストレージのオブジェクトのサイズについて
- クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて
- クラウドストレージのストレージサーバーの構成
- クラウドストレージサーバープロパティの変更

- NetBackup クラウドストレージサーバーのプロパティ
- クラウドストレージのディスクプールについて
- クラウドストレージのディスクプールの構成
- NetBackup クラウドストレージ暗号化の KMS キー名のレコードの保存
- クラウド環境へのバックアップメディアサーバーの追加
- クラウドストレージ用のストレージユニットの構成
- NetBackup アクセラレータバックアップと NetBackup 最適化合成バックアップについて
- NetBackup アクセラレータをクラウドストレージで有効にする
- 最適化合成バックアップをクラウドストレージで有効にする
- バックアップポリシーの作成
- クラウドストレージディスクプールプロパティの変更
- NetBackup クラウドの認証局 (CA) の管理

NetBackup でクラウドストレージの構成を開始する前に

Veritasは、NetBackup でクラウドストレージの構成を開始する前に次の操作を実行することを推奨します。

- お使いのクラウドストレージベンダー用の NetBackup 構成オプションを確認します。
  NetBackup では、ストレージ API 形式に基づいてクラウドストレージがサポートされます。Veritasはクラウドストレージの構成に必要な情報を API 形式別に組織化しています。次の項に、API 形式、各 API 形式を使うベンダー、必要な設定情報へのリンクが記載されています。
  p.14 の「NetBackup のクラウドストレージベンダーについて」を参照してください。

メモ: Veritasは NetBackup リリース間でベンダーを認定する場合があります。お使いのクラウドストレージベンダーが NetBackup 製品マニュアルに記載されていない場合は、次の Web ページでサポート対象クラウドベンダーの最新のリストを参照してください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.000115793

- NetBackup でクラウドストレージを構成するために必要な情報を収集します。NetBackup 構成オプション別に組織化された必要な情報を得ることで、構成プロセスをより簡単に進めることができます。

NetBackup のクラウドストレージの構成

このトピックでは、NetBackup のクラウドストレージを構成する方法について説明します。表 3-1 にクラウドストレージを構成するための作業の概要を示します。表の手順に順番に従ってください。

『NetBackup 管理者ガイド Vol. I』では、基本の NetBackup 環境を構成する方法を説明しています。『NetBackup 管理者ガイド Vol. I』は、次の URL で利用可能です。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

表 3-1 NetBackup のクラウド構成プロセスの概要

手順	作業	詳細情報
手順 1	マスターサーバーとメディアサーバーでの NetBackup ログファイルディレクトリの作成	p.173 の「NetBackup クラウドストレージログファイル」を参照してください。 p.173 の「クラウドストレージ用の NetBackup ログファイルディレクトリの作成」を参照してください。
手順 2	クラウドのインストール要件を確認します	p.82 の「Cloud のインストール要件」を参照してください。
手順 3	NetBackup のクラウドストレージプロバイダのプロビジョニングと構成の要件を決定します	p.14 の「NetBackup のクラウドストレージベンダーについて」を参照してください。
手順 4	必要に応じてクラウドストレージホスト全体のプロパティを構成します	p.82 の「[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]プロパティ」を参照してください。
手順 5	クラウドストレージのプロパティを設定します	必要に応じて、NetBackup ホストプロパティを使用してクラウドストレージサービスのホストを追加します。 p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。
手順 6	CloudStore サービスコンテナのロールの理解	p.92 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナについて」を参照してください。
手順 7	メディアサーバーでの認証用のセキュリティ証明書のプロビジョニング	p.93 の「NetBackup CloudStore Service Container のセキュリティ証明書」を参照してください。 p.97 の「ホスト名ベースの証明書の配備」を参照してください。

手順	作業	詳細情報
手順 8	暗号化のキー管理について理解しておきます	暗号化は、必要に応じて行います。 p.101 の「クラウドストレージのデータ暗号化について」を参照してください。 p.101 の「NetBackup クラウドストレージの暗号化のキー管理について」を参照してください。
手順 9	ストレージサーバーを構成します	p.103 の「クラウドストレージサーバーについて」を参照してください。 p.88 の「クラウドストレージインスタンスの追加」を参照してください。 p.108 の「クラウドストレージのストレージサーバーの構成」を参照してください。
手順 10	ディスクプールを構成します	p.128 の「クラウドストレージのディスクプールについて」を参照してください。 p.129 の「クラウドストレージのディスクプールの構成」を参照してください。
手順 11	ストレージサーバーの追加のプロパティを構成します	p.116 の「NetBackup クラウドストレージサーバーのプロパティ」を参照してください。 p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。
手順 12	追加のメディアサーバーを追加します	追加メディアサーバーの追加はオプションです。 p.105 の「クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて」を参照してください。 p.140 の「クラウド環境へのバックアップメディアサーバーの追加」を参照してください。
手順 13	ストレージユニットを構成します	p.142 の「クラウドストレージ用のストレージユニットの構成」を参照してください。
手順 14	NetBackup アクセラレータと最適化された合成バックアップを構成します	アクセラレータと最適化された合成バックアップは、必要に応じて行います。 p.147 の「NetBackup アクセラレータバックアップと NetBackup 最適化合成バックアップについて」を参照してください。 p.147 の「NetBackup アクセラレータをクラウドストレージで有効にする」を参照してください。 p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。
手順 15	バックアップポリシーの構成	p.151 の「バックアップポリシーの作成」を参照してください。

Cloud のインストール要件

NetBackup Cloud ソリューションの実装計画を作成する際には、表 3-2 を使用して計画に役立ててください。

表 3-2　Cloud のインストール要件

要件	詳細
NetBackup メディアサーバープラットフォームのサポート	NetBackup がクラウドストレージでサポートするオペレーティングシステムについては、NetBackup オペレーティングシステム互換性一覧を参照してください。次の URL から入手できます。 http://www.netbackup.com/compatibility NetBackup メディアサーバーソフトウェアをホストにインストールするときに、必ず NetBackup サーバー名の完全修飾ドメインを指定してください。
クラウドストレージプロバイダのアカウント	NetBackup Cloud Storage を構成する前に、希望するクラウドストレージプロバイダにアカウントを作成する必要があります。利用可能な NetBackup のクラウドストレージプロバイダのリストを参照してください。 このアカウントはクラウドストレージ構成ウィザードで作成できます。 p.14 の「NetBackup のクラウドストレージベンダーについて」を参照してください。
NetBackup Cloud Storage のライセンス	NetBackup クラウドストレージは、基本の NetBackup とは別ライセンスです。 ライセンスによって NetBackup ポリシーの［属性 (Attributes)］タブの［アクセラレータを使用する (Use accelerator)］機能も有効になります。アクセラレータはファイルシステムの完全バックアップの速度を増加させます。

［拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)］プロパティ

［拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)］の［クラウドの設定 (Cloud Settings)］プロパティには、暗号化、測定、帯域幅の調整、NetBackup ホストとクラウドストレージプロバイダの間のネットワーク接続に関する情報が含まれます。

［拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)］のプロパティは、ホストがクラウドストレージでサポートされている場合にのみ表示されます。該当リリースの NetBackup ハードウェア互換性リストについては、次の URL を参照してください。

http://www.netbackup.com/compatibility

[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]プロパティは、現在選択されているメディアサーバーに適用されます。

図 3-1 [拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]の[クラウドの設定 (Cloud Settings)]ホストプロパティ

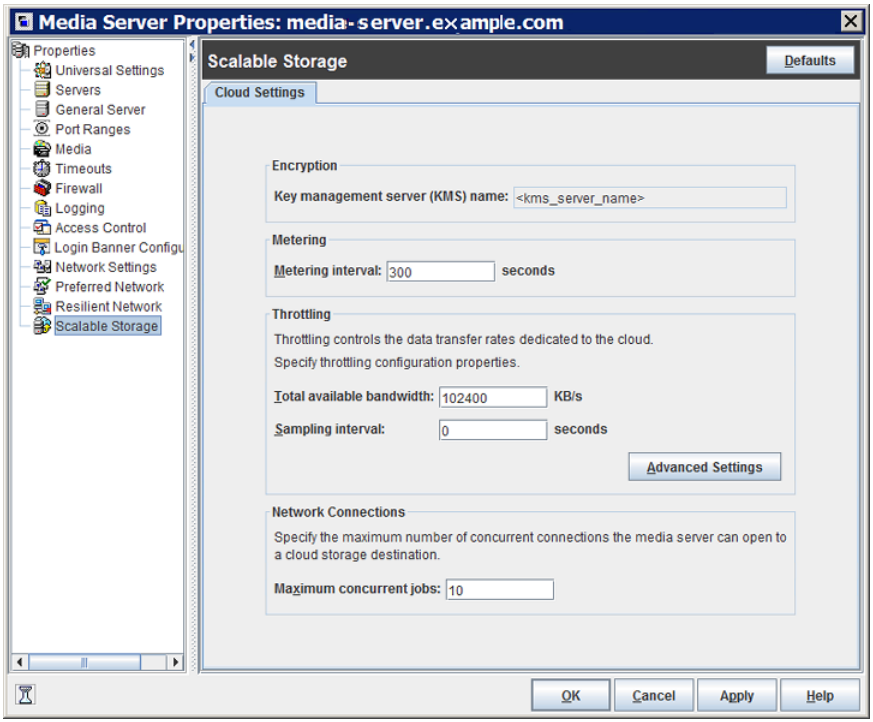


表 3-3 は、プロパティについて説明します。

表 3-3 [拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]の[クラウドの設定 (Cloud Settings)]ホストプロパティ

プロパティ	説明
Key Management Server (KMS) 名 (Key Management Server (KMS) Name)	NetBackup キーマネージメントサービス (KMS) を構成した場合は、KMS サーバーの名前です。
測定間隔 (Metering Interval)	NetBackup がレポート用に接続情報を収集する頻度を決めます。NetBackup OpsCenter は、レポートを作成するために収集された情報を使います。値は秒単位で設定されます。デフォルト設定は 300 秒 (5 分) です。この値を 0 に設定すると、測定は無効になります。

プロパティ	説明
合計利用可能帯域幅 (Total Available Bandwidth)	この値は、クラウドへの接続の速度を指定するために使用します。値は、KB/秒で指定されます。デフォルト値は 102400 KB/秒です。
サンプリング間隔 (Sampling interval)	帯域幅使用状況の測定間隔 (秒)。この値を大きくするほど、NetBackup が使用帯域幅を調べる頻度が少なくなります。
詳細設定 (Advanced Settings)	[詳細設定 (Advanced Settings)]をクリックして、スロットル調整の追加設定を指定します。 p.84 の「帯域幅スロットルの詳細設定」を参照してください。 p.85 の「帯域幅スロットルの詳細設定」を参照してください。
最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)	メディアサーバーがクラウドストレージサーバーで実行できるデフォルトの最大並行実行ジョブ数。 この値は、クラウドストレージサーバーではなくメディアサーバーに適用されます。クラウドストレージサーバーに接続できるメディアサーバーが複数ある場合、各メディアサーバーで異なる値を持つ場合があります。したがって、クラウドストレージサーバーへの接続の合計数を判断するには、各メディアサーバーからの値を追加してください。 NetBackup が接続数よりも多いジョブ数を許可するように設定されている場合、NetBackup は接続の最大数に達した後で開始されたジョブでは失敗します。ジョブにはバックアップジョブとリストアジョブの両方が含まれています。 ジョブ数の制限は、バックアップポリシーごと、ストレージユニットごとに設定できます。 **メモ:** NetBackup はジョブを開始するときに、同時並行ジョブの数、メディアサーバーごとの接続の数、メディアサーバーの数、ジョブの負荷分散ロジックなどの多くの要因を明らかにする必要があります。したがって、NetBackup は正確な最大接続数でジョブを失敗しない場合もあります。 NetBackup は、接続数が最大数よりもわずかに少ない場合、正確に最大数の場合、最大数よりわずかに多い場合にジョブを失敗することがあります。

帯域幅スロットルの詳細設定

帯域幅スロットルの詳細設定では、NetBackup のホストとクラウドストレージプロバイダ間の接続のさまざまな面を制御できます。

総帯域幅および帯域幅のサンプリング間隔は、[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]ホストプロパティ画面の[クラウド設定 (Cloud Settings)]タブで設定します。

p.82 の「[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]プロパティ」を参照してください。

帯域幅スロットルの詳細設定を行うには

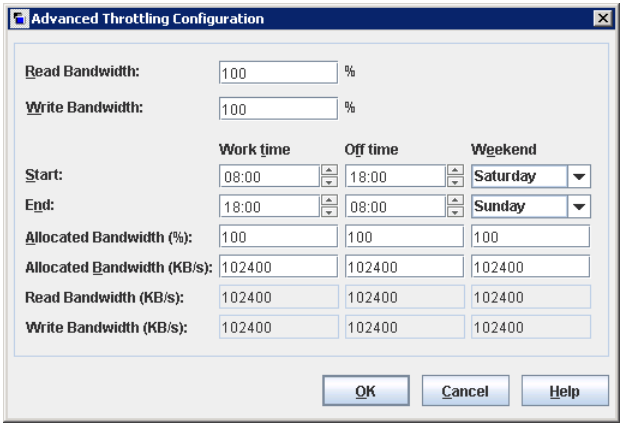
1. [NetBackup 管理コンソール (NetBackup Administration Console)]の左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]>[ホストプロパティ (Host Properties)]>[メディアサーバー (Media Servers)]を展開します。
2. 右ペインで、プロパティを指定するホストを選択します。

3 [処理 (Actions)]の[プロパティ (Properties)]をクリックします。

4 左ペインの[プロパティ (properties)]ダイアログボックスで、[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]を選択します。

5 右ペインで、[詳細設定 (Advanced Settings)]をクリックします。[スロットルの詳細設定 (Advanced Throttling Configuration)]ダイアログボックスが表示されます。

次に、ダイアログボックスの例を示します。



6 設定を構成したら、[OK]をクリックします。

p.85 の「帯域幅スロットルの詳細設定」を参照してください。

帯域幅スロットルの詳細設定

次の表で、帯域幅スロットルの詳細設定を説明します。

表 3-4　スロットルの詳細設定

プロパティ	説明
読み取り帯域幅 (Read Bandwidth)	このフィールドを使用して、読み取り操作が使うことができる総帯域幅の割合を指定します。0 から 100 までの値を指定します。不正な値を入力すると、エラーが生成されます。 数分内に指定された量のデータを伝送するために帯域幅が不足する場合、タイムアウトによりリストアエラーまたはレプリケーションエラーが発生することがあります。 必要な帯域幅を計算するときに複数のメディアサーバーの同時ジョブの合計負荷を考慮してください。 デフォルト値: 100 指定可能な値: 0 - 100

プロパティ	説明
書き込み帯域幅 (Write Bandwidth)	このフィールドを使用して、書き込み操作が使うことができる総帯域幅の割合を指定します。0 から 100 までの値を指定します。不正な値を入力すると、エラーが生成されます。 数分内に指定された量のデータを伝送するために帯域幅が不足する場合、タイムアウトによりバックアップエラーが発生することがあります。 必要な帯域幅を計算するときに複数のメディアサーバーの同時ジョブの合計負荷を考慮してください。 デフォルト値: 100 指定可能な値: 0 - 100
作業時間 (Work time)	クラウド接続の作業時間とみなされる時間間隔を指定します。 24 時間形式で開始時刻と終了時刻を指定してください。たとえば、2:00 P.M. は 14:00 です。 クラウド接続で使用できる帯域幅を［割り当て帯域幅 (Allocated bandwidth)］フィールドに示します。この値によって、利用可能な帯域幅のうちどのくらいがこの時間帯のクラウド操作に使用されるかが決まります。値はパーセントまたは KB/秒で表示されます。
オフ時間 (Off time)	クラウド接続のオフ時間とみなされる時間間隔を指定します。 24 時間形式で開始時刻と終了時刻を指定してください。たとえば、2:00 P.M. は 14:00 です。 クラウド接続で使用できる帯域幅を［割り当て帯域幅 (Allocated bandwidth)］フィールドに示します。この値によって、利用可能な帯域幅のうちどのくらいがこの時間帯のクラウド操作に使用されるかが決まります。値はパーセントまたは KB/秒で表示されます。
週末 (Weekend)	週末の開始時間と終了時間を指定します。 クラウド接続で使用できる帯域幅を［割り当て帯域幅 (Allocated bandwidth)］フィールドに示します。この値によって、利用可能な帯域幅のうちどのくらいがこの時間帯のクラウド操作に使用されるかが決まります。値はパーセントまたは KB/秒で表示されます。
読み取り帯域幅 (KB/秒) (Read Bandwidth (KB/s))	このフィールドには、それぞれのリストアジョブでクラウドのストレージサーバーから NetBackup のメディアサーバーに転送するのに、どのくらいの帯域幅が利用可能かが示されます。 値は、KB/秒で表示されます。
書き込み帯域幅 (KB/秒) (Write Bandwidth (KB/s))	このフィールドには、それぞれのバックアップジョブで NetBackup のメディアサーバーからクラウドのストレージサーバーに転送するのに、どのくらいの帯域幅が利用可能かが示されます。 値は、KB/秒で表示されます。

[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ

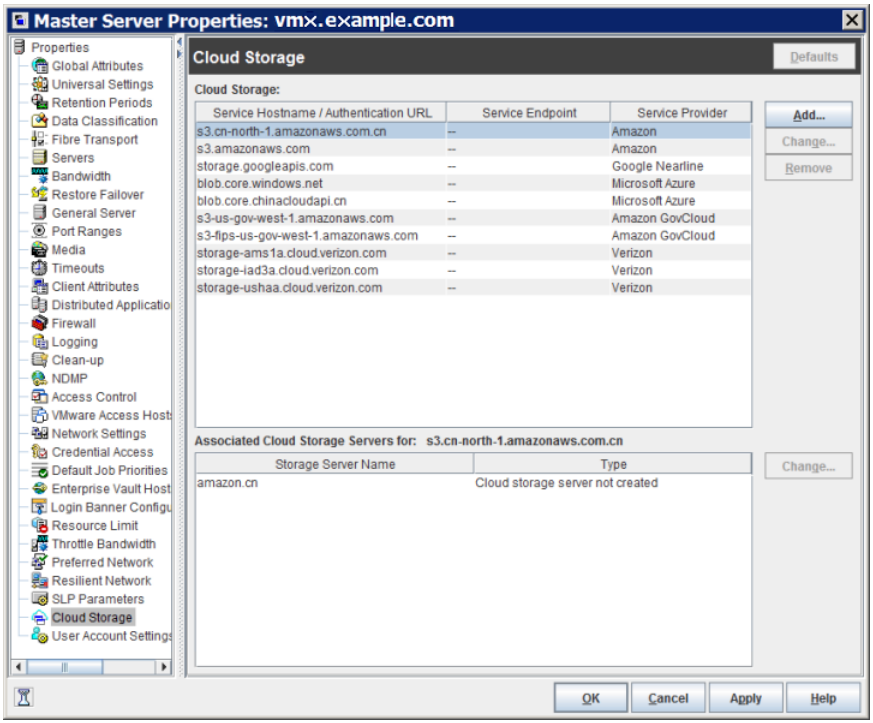
[NetBackup 管理コンソール (NetBackup Administration Console)]の NetBackup の[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティは、現在選択されているマスターサーバーに適用されます。

この[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストに表示されるホストは、ストレージサーバーを構成するときに選択できます。[サービスプロバイダ (Service Provider)]タイプのクラウドベンダーは、サービスホストが利用可能または必要かどうかを判断します。

NetBackup は、一部のクラウドストレージプロバイダのサービスホストを備えています。サービスプロバイダの種類により可能であれば、新規ホストを[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストに追加できます。ホストを追加する場合は、ホストのプロパティを変更するかまたはホストを[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストから削除できます(NetBackup に含まれている情報を削除することはできません)。

この[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストにサービスホストを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときにサービスホストを追加できます。[サービスプロバイダ (Service Provider)]タイプのクラウドベンダーは、[サービスのホスト名 (Service Hostname)]が利用可能または必要かどうかを判断します。

図 3-2 クラウドストレージホストのプロパティ



[クラウドストレージ (Cloud Storage)]ホストのプロパティには以下のプロパティが含まれます。

表 3-5　クラウドストレージ

プロパティ	説明
クラウドストレージ	NetBackup がサポートするさまざまなクラウドサービスプロバイダに対応するクラウドストレージが、ここに一覧表示されます。 p.88 の「クラウドストレージインスタンスの追加」を参照してください。 p.89 の「クラウドストレージホストプロパティの変更」を参照してください。 p.91 の「クラウドストレージホストのインスタンスの削除」を参照してください。
関連付けられたストレージサーバー (Associated Storage Servers for)	選択したクラウドストレージに対応するクラウドストレージサーバーが表示されます。 p.89 の「クラウドストレージホストプロパティの変更」を参照してください。

メモ: [クラウドストレージ (Cloud Storage)]ダイアログボックスで加えた変更は、[ホストプロパティ (Host Properties)]ダイアログボックスで[OK]をクリックする前に適用されます。

クラウドストレージインスタンスの追加

NetBackup クラウドストレージサーバーを構成する前にカスタムクラウドストレージインスタンスを追加する必要がある場合があります。カスタムクラウドストレージでは、別のサービスホストや別のプロパティを使ったカスタマイズが可能です。カスタムクラウドストレージインスタンスは、ストレージサーバーを構成するときに[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]に表示されます。

クラウドストレージプロバイダの種類により、カスタムクラウドストレージインスタンスを追加する必要があるかが決まります。

p.14 の「NetBackup のクラウドストレージベンダーについて」を参照してください。

次のようにして、カスタムクラウドストレージインスタンスを追加できます。

NetBackup の[マスターサーバープロパティ (Master Server Properties)]を使用する	この方法では、NetBackup でストレージサーバーを構成する前にクラウドストレージインスタンスを追加します。インスタンスを追加すると、ストレージを構成するウィザードに、インスタンスの詳細が自動的に入力されます。ストレージサーバーを構成するときにインスタンスを選択します。 p.89 の「クラウドストレージインスタンスを[クラウドストレージ (Cloud Storage)]ホストプロパティに追加するには」を参照してください。
[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]を使用する	この方法では、NetBackup でストレージサーバーを構成すると同時にインスタンスを同時に追加します。ストレージを構成するウィザードに、インスタンスの詳細はユーザー自身で追加するまで入力されません。 p.108 の「クラウドストレージのストレージサーバーの構成」を参照してください。

クラウドストレージインスタンスを[クラウドストレージ (Cloud Storage)]ホストプロパティに追加するには

1. NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]、[マスターサーバー (Master Servers)]の順に左ペインで展開します。
2. 右ペインで、クラウドストレージインスタンスを追加するマスターサーバーを選択します。
3. [処理 (Actions)]メニューから[プロパティ (Properties)]を選択します。
4. プロパティダイアログボックスの左ペインで、[クラウドストレージ (Cloud Storage)]を選択します。
5. 右ペインで、[追加 (Add)]をクリックします。
6. [クラウドストレージの追加 (Add Cloud Storage)]ダイアログボックスで、設定を更新します。

   p.31 の「Amazon S3 のクラウドストレージのオプション」を参照してください。
7. 設定を構成した後、[OK]をクリックします。

クラウドストレージホストプロパティの変更

[クラウドストレージ (Cloud Storage)]、[マスターサーバープロパティ (Master Server Properties)]から、次のプロパティを変更できます。

[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ	追加するホストのプロパティを変更できます。(NetBackup に含まれているクラウドストレージプロバイダのプロパティを変更または削除することはできません。) p.90 の「クラウドストレージホストのプロパティを変更するには」を参照してください。
関連付けられたクラウドストレージサーバーのプロパティ	p.90 の「関連付けられたクラウドストレージサーバーホストのプロパティを変更する方法」を参照してください。

クラウドストレージサーバーのプロパティを変更する方法は、別の項で説明します。

p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。

クラウドストレージホストのプロパティを変更するには

1. NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]、[マスターサーバー (Master Servers)]の順に左ペインで展開します。
2. 右ペインで、プロパティを指定するマスターサーバーを選択します。
3. [処理 (Actions)]メニューから[プロパティ (Properties)]を選択します。
4. [マスターサーバープロパティ (Master Server Properties)]ダイアログボックスで[クラウドストレージ (Cloud Storage)]を選択します。
5. 右ペインの[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストで、目的のクラウドストレージを選択します。
6. [クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストの隣の[変更 (Change)]をクリックします。
7. [クラウドストレージの変更 (Change Cloud Storage)]ダイアログボックスで、プロパティを変更します。

   p.31 の「Amazon S3 のクラウドストレージのオプション」を参照してください。
8. [クラウドストレージの変更 (Change Cloud Storage)]ダイアログボックスで[OK]をクリックします。
9. [OK]をクリックして[マスターサーバープロパティ (Master Server Properties)]ダイアログボックスを閉じます。

関連付けられたクラウドストレージサーバーホストのプロパティを変更する方法

1. NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]、[マスターサーバー (Master Servers)]の順に左ペインで展開します。
2. 右ペインで、プロパティを指定するマスターサーバーを選択します。
3. [処理 (Actions)]メニューから[プロパティ (Properties)]を選択します。

4 [マスターサーバープロパティ (Master Server Properties)]ダイアログボックスで[クラウドストレージ (Cloud Storage)]を選択します。

5 右ペインの[次の関連付けられたクラウドストレージサーバー (Associated Cloud Storage Servers for)]リストで、目的のストレージサーバーを選択します。

6 [次の関連付けられたクラウドストレージサーバー (Associated Cloud Storage Servers for)]リストの隣の[変更 (Change)]をクリックします。

7 [クラウドストレージサーバーの構成 (Cloud Storage Server Configuration)]ダイアログボックスで、プロパティを変更します。

p.33 の「Amazon S3 のサーバーの詳細な構成オプション」を参照してください。

p.36 の「Amazon S3 資格情報ブローカーの詳細」を参照してください。

8 [クラウドストレージの変更 (Change Cloud Storage)]ダイアログボックスで[OK]をクリックします。

9 [OK]をクリックして[マスターサーバープロパティ (Master Server Properties)]ダイアログボックスを閉じます。

クラウドストレージホストのインスタンスの削除

[クラウドストレージ (Cloud Storage)]、[マスターサーバープロパティ (Master Server Properties)]を使用して、カスタムクラウドストレージ (クラウドインスタンス) を削除できます。NetBackup で提供されたクラウドストレージインスタンスを削除できません。

p.87 の「[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ」を参照してください。

クラウドストレージホストのインスタンスを削除する方法

1 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]、[マスターサーバー (Master Servers)]の順に左ペインで展開します。

2 右ペインで、プロパティを指定するマスターサーバーを選択します。

3 [処理 (Actions)]メニューから[プロパティ (Properties)]を選択します。

4 [マスターサーバープロパティ (Master Server Properties)]ダイアログボックスで[クラウドストレージ (Cloud Storage)]を選択します。

5 右ペインの[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストで、目的のクラウドストレージを選択します。

6 [削除]をクリックします。

7 [クラウドストレージの削除 (Remove the Cloud Storage)]ダイアログボックスで、[はい (Yes)]をクリックします。

8 [OK]をクリックして[マスターサーバープロパティ (Master Server Properties)]ダイアログボックスを閉じます。

NetBackup CloudStore サービスコンテナについて

NetBackup CloudStore サービスコンテナ (nbcssc) は、次の NetBackup ホストで実行される Web ベースのサービスコンテナです。

- NetBackup マスターサーバー
  NetBackup マスターサーバークラスタ環境では、NetBackup CloudStore Service Container は可用性の高いサービスです。NetBackup リソースグループのフェールオーバーの場合、このサービスは別のノードにフェールオーバーします。
- クラウドストレージ用に構成されている NetBackup メディアサーバー。

このコンテナでは、構成サービス、スロットルサービス、測定データコレクタサービスなど、異なるサービスをホストします。NetBackup OpsCenter は監視と報告の目的で測定データを使います。

[NetBackup 管理コンソール (NetBackup Administration Console)] で [拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)] ホストプロパティを使って NetBackup CloudStore Service Container の動作を構成できます。

p.82 の「[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)] プロパティ」を参照してください。

NetBackup CloudStore サービスコンテナサービスのデフォルトのポート番号は 5637 です。

NetBackup は、NetBackup CloudStore サービスコンテナの複数のセキュリティの方法を次のように使います。

セキュリティ証明書
: NetBackup CloudStore Service Container を実行する NetBackup ホストは、セキュリティ証明書または証明書を使ってプロビジョニングする必要があります。

  p.93 の「NetBackup CloudStore Service Container のセキュリティ証明書」を参照してください。

  メモ: クラウドストレージを構成する前にすでに生成済みの場合は、セキュリティ証明書を生成する必要はありません。

セキュリティモード
: NetBackup CloudStore サービスコンテナはさまざまなセキュリティモードで実行できます。

  p.94 の「NetBackup CloudStore Service Container のセキュリティモード」を参照してください。

p.105 の「クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて」を参照してください。

NetBackup CloudStore Service Container のセキュリティ証明書

NetBackup CloudStore Service Container を開始して実行するためには、デジタルセキュリティ証明書が必要です。セキュリティ証明書がどのようにプロビジョニングされるかは、次に示すように、NetBackup のリリースレベルによって決まります。

NetBackup 8.0 以降

CloudStore Service Container を実行する NetBackup ホストには、ホスト ID ベースの証明書とホスト名ベースの証明書の両方が必要です。それらのホストに証明書をインストールする必要がある場合があります。

p.97 の「ホスト名ベースの証明書の配備」を参照してください。

p.98 の「ホスト ID ベースの証明書の配備」を参照してください。

NetBackup マスターサーバーがクラスタ化されている場合、アクティブノードとパッシブノードにホスト名ベースの証明書とホスト ID ベースの証明書の両方があることを確認する必要があります。NetBackup 8.0 以降については、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

NetBackup 7.7 および 7.7.*x*

CloudStore Service Container を実行する NetBackup ホストには、ホスト名ベースの証明書が必要です。コマンドを使って、メディアサーバーにこれをインストールする必要があります。

p.97 の「ホスト名ベースの証明書の配備」を参照してください。

メモ: クラウドストレージを構成する前にすでに生成済みの場合は、セキュリティ証明書を生成する必要はありません。

ホスト名ベースのセキュリティ証明書は 1 年後に期限切れになります。NetBackup は、必要に応じて、既存の証明書を自動的に新しいものに置き換えます。

メモ: NetBackup の他の機能または目的のためにプロビジョニングされたセキュリティ証明書は、NetBackup CloudStore Service Container の証明書要件を満たします。NetBackup アクセス制御機能がセキュリティ証明書を使用し、NetBackup 管理コンソールは、ホスト間通信用にセキュリティ証明書を必要とします。

NetBackup マスターサーバーがクラスタ化されている場合、アクティブノードとパッシブノードにホスト名ベースの証明書があることを確認する必要があります。バージョン 7.7.*x* の『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

メディアサーバーのセキュリティ証明書がどこに配置されるかは、次のように NetBackup のリリースレベルによって決まります。

NetBackup 7.7 以降　証明書名は、ホストで NetBackup メディアサーバーソフトウェアを設定したときに使ったホスト名です。証明書のパスは、オペレーティングシステムに応じて、次のようになります。

- UNIX/Linux: `/usr/openv/var/vxss/credentials`
- Windows: *install_dir*¥Veritas¥NetBackup¥var¥VxSS¥credentials

p.92 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナについて」を参照してください。

NetBackup CloudStore Service Container のセキュリティモード

NetBackup CloudStore Service Container は、2 つの異なるモードのいずれかで実行できます。次に示すように、セキュリティモードによってクライアントとサービスの通信方法が決定します。

セキュアモード　デフォルトのセキュアモードでは、クライアントコンポーネントを CloudStore Service Container で認証する必要があります。認証の後で、セキュリティ保護された HTTPS チャネルを介して通信が行われます。

非セキュアモード　CloudStore Service Container では、非セキュア通信を使います。クライアントは認証を必要とせずに HTTP 経由でサーバーと通信します。

セキュリティモードの設定に、`cloudstore.conf` ファイルの `CSSC_IS_SECURE` 属性を使うことができます。デフォルト値は 64 (セキュリティ保護された通信) です。

p.94 の「NetBackup cloudstore.conf 設定ファイル」を参照してください。

p.92 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナについて」を参照してください。

NetBackup cloudstore.conf 設定ファイル

表 3-6で、`cloudstore.conf` 設定ファイルのパラメータについて説明しています。

`cloudstore.conf` ファイルは、NetBackup クラウドがサポートするプラットフォームにインストールされるマスターサーバーとすべてのメディアサーバーで利用可能です。

メモ: `cloudstore.conf` ファイルでパラメータを変更する前に、`nbcssc` サービスを停止する必要があります。パラメータを変更したら、`nbcssc` サービスを再起動してください。

`cloudstore.conf` ファイルは、次のディレクトリに存在します。

- UNIX または Linux: `/usr/openv/netbackup/db/cloud`
- Windows: *install_path*¥Netbackup¥db¥cloud

表 3-6 cloudstore.conf 設定ファイルのパラメータと説明

パラメータ	説明
CSSC_VERSION	この値は変更しないことをお勧めします。 cloudstore.conf ファイルのバージョンを指定します。デフォルトは 2 です。
CSSC_PLUGIN_PATH	この値は変更しないことをお勧めします。 NetBackup クラウドストレージプラグインのインストールパスを指定します。デフォルトのパスは次のとおりです。 Windows の場合: *install_path*¥Veritas¥NetBackup¥bin¥ost-plugins UNIX の場合: /usr/openv/lib/ost-plugins
CSSC_PORT	CloudStore サービスコンテナ (nbcssc) のポート番号を指定します。デフォルトの値は 5637 です。
CSSC_LOG_DIR	nbcssc がログファイルを生成するディレクトリパスを指定します。デフォルトのパスは次のとおりです。 Windows の場合: *install_path*¥Veritas¥NetBackup¥logs¥nbcssc UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/logs/nbcssc
CSSC_LOG_FILE	nbcssc サービスがログに書き込むのに使うファイル名を指定します。デフォルト値は空です。これは、NetBackup のログ記録機構によってログのファイル名が決められることを意味します。
CSSC_IS_SECURE	nbcssc サービスを、セキュアモード (値 64) または非セキュアモード (値 0) のどちらで実行するかを指定します。デフォルトの値は 64 です。

パラメータ	説明
CSSC_CIPHER_LIST	NetBackup が次の目的で使用する暗号リストを指定します。 ■ クラウドマスターホストの暗号は、nbcssc サービスとの通信およびクラウドサービスプロバイダとの通信に使用されます。 ■ メディアサーバーの暗号は、クラウドマスターホストの nbcssc サービスとの通信に使用されます。 この値は変更しないことをお勧めします。ただし、暗号リストを目的に応じてカスタマイズする場合は、マスターサーバーとメディアサーバーの cloudstore.conf の暗号リストを変更する必要があります。 **メモ:** 暗号リストが無効な場合、カスタマイズされた暗号リストはデフォルトの暗号リストに置き換えられます。 デフォルト値は AES:!aNULL:@STRENGTH です。
CSSC_LOG_LEVEL	nbcssc ログ記録のログレベルを指定します。値 0 はログ記録が無効になることを示し、0 以外の値はログ記録が有効になることを示します。デフォルトの値は 0 です。
CSSC_MASTER_PORT	nbcssc サービスが動作する NetBackup マスターサーバーのホストのポート番号を指定します。デフォルトの値は 5637 です。
CSSC_MASTER_NAME	NetBackup マスターサーバー名を指定します。このエントリは nbcssc サービスがこのホストで動作することを示します。ここでは、次の場所に存在する CloudProvider.xml ファイルと CloudInstance.xml ファイルに基づいて、クラウドプロバイダ固有のすべての要求が処理されます。 Windows の場合: *install_path*¥Netbackup¥db¥cloud UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/db/cloud
CSSC_MASTER_IS_SECURE	nbcssc サービスを、NetBackup マスターサーバーで、セキュアモード (値 64) または非セキュアモード (値 0) のどちらで実行するかを指定します。デフォルトの値は 64 です。

パラメータ	説明
CSSC_LEGACY_AUTH_ENABLED	nbcssc サービスでレガシー認証が有効であるか (値 1) 無効であるか (値 0) を指定します。デフォルトの値は 0 です。 **メモ:** NetBackup 8.1 以降では、CSSC_LEGACY_AUTH_ENABLED オプションは推奨されません。レガシーのメディアサーバーと通信するには、NetBackup マスターサーバーで[8.0 以前のホストとの安全でない通信を有効にする (Enable insecure communication with 8.0 and earlier hosts)]オプションを使用します。このオプションは、NetBackup 管理コンソールの[セキュリティ管理 (Security Management)]>[グローバルセキュリティ設定 (Global Security Settings)]>[安全な通信 (Secure Communication)]タブで利用できます。

ホスト名ベースの証明書の配備

クラウドストレージに使用する NetBackup メディアサーバーに、必要なホスト名ベースのセキュリティ証明書を配備できます。クラウドストレージのために使用する各メディアサーバーは、NetBackup CloudStore Service Container を実行します。

p.92 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナについて」を参照してください。

証明書を個別のメディアサーバーまたはすべてのメディアサーバーに対して配備できます。クラウドストレージのために使用するメディアサーバーには、ホスト名ベースのセキュリティ証明書が必要です。

メモ: ホスト名ベースの証明書の配備は 1 つのホストごとに行う 1 回のみの操作です。ホスト名ベースの証明書が以前のリリースまたは修正プログラムで配備された場合は、再び配備を行う必要はありません。

ホスト名ベースの証明書を配備する前に、次のことを確認します。

- クラスタのすべてのノードにホスト ID ベースの証明書がある
- クラスタ ノードのすべての完全修飾ドメイン名 (FQHN) と短縮名は、それぞれのホスト ID にマッマッピングされます。

メディアサーバーにホスト名ベースの証明書を配備する

この手順は、同時に多数のホストにホスト名ベースのセキュリティ証明書を配備する場合に適しています。NetBackup 配備と同様に通常、この方法はネットワークが安全であることを前提とします。

メディアサーバーのホスト名ベースのセキュリティ証明書を配備する方法

1. 環境に応じて、マスターサーバーで次のコマンドを実行します。個別のメディアサーバーの名前を指定または -AllMediaServers を指定します。

   Windows の場合: *install_path*¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpnbaz -ProvisionCert *host_name*|-AllMediaServers

   UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/bin/admincmd/bpnbaz -ProvisionCert *host_name*|-AllMediaServers

   NetBackup アプライアンス (NetBackupCLI ユーザーとして): bpnbaz -ProvisionCert *Media_server_name*

2. メディアサーバーで NetBackup Service Layer (nbsl) サービスを再起動します。

メモ: ホスト (DHCP) 上で動的 IP を使用する場合は、ホスト名と IP アドレスがマスターサーバーで正しく一覧表示されていることを確認します。これを実行するには、マスターサーバーで次の NetBackup bpclient コマンドを実行します。

Windows の場合: *Install_path*¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpclient -L -All

UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/bin/admincmd/bpclient -L -All

ホスト ID ベースの証明書の配備

証明書配備のセキュリティレベルに応じて、マスター以外のホストは、認証局 (マスターサーバー) からホスト ID ベースの証明書を取得できるようになるために、認証トークンが必要になる場合があります。証明書が自動的に配備されない場合は、管理者が nbcertcmd コマンドを使って NetBackup ホストに手動で証明書を配備する必要があります。

次の項で、配備レベルと、各レベルで認証トークンが必要かどうかについて説明します。

トークンが不要の場合の配備

ホスト管理者が、認証トークンを必要とせずに、証明書をマスター以外のホストに配備できるセキュリティレベルでは、次の手順を実行します。

トークンが不要の場合にホスト ID ベースの証明書を生成して配備する方法

1. ホスト管理者が、マスターサーバーが信頼できる状態を確立するためにマスター以外のホストで次のコマンドを実行します。

   ```
   nbcertcmd -getCACertificate
   ```

2 マスター以外のホストで次のコマンドを実行します。

```
nbcertcmd -getCertificate
```

メモ: 複数の NetBackup ドメインと通信するには、そのホストの管理者が -server オプションを使って各マスターサーバーから証明書を要求する必要があります。

特定のマスターサーバーから証明書を取得するには、次のコマンドを実行します。

```
nbcertcmd -getCertificate -server master_server_name
```

3 証明書がホストに配備されていることを検証するには、次のコマンドを実行します。

```
nbcertcmd -listCertDetails
```

トークンが必要な場合の配備

CA からホスト ID ベースの証明書を配備するために認証トークンがホストで必要となるセキュリティレベルでは、次の手順を実行します。

トークンが必要な場合にホスト ID ベースの証明書を生成して配備するには

1 操作を続行する前に、ホスト管理者が認証トークン値を CA から取得している必要があります。トークンは各環境のさまざまなセキュリティガイドラインに応じて、電子メール、ファイル、または口頭で管理者に伝えられます。

2 マスターサーバーが信頼できる状態を確立するためにマスター以外のホストで次のコマンドを実行します。

```
nbcertcmd -getCACertificate
```

3 マスター以外のホストで次のコマンドを実行して、メッセージが表示されたらトークンを入力します。

```
nbcertcmd -getCertificate -token
```

メモ: 複数の NetBackup ドメインと通信するには、そのホストの管理者が -server オプションを使って各マスターサーバーから証明書を要求する必要があります。

管理者がトークンをファイルで取得した場合、次を入力します。

```
nbcertcmd -getCertificate -file authorization_token_file
```

4 証明書がホストに配備されていることを検証するには、次のコマンドを実行します。

```
nbcertcmd -listCertDetails
```

クラスタの証明書を表示するには、-cluster オプションを使用します。

クラウドバックアップ用のデータ圧縮について

NetBackup では、クラウドストレージサーバーに送信する前にデータを圧縮できます。

クラウドストレージサーバーの構成中にクラウドストレージサーバーの構成ウィザードを使用して、NetBackup メディアサーバー上でデータ圧縮を有効化できます。

p.108 の「クラウドストレージのストレージサーバーの構成」を参照してください。

メモ: クラウドストレージ構成中にデータ圧縮を有効化した後に、データ圧縮を無効化することはできません。

NetBackup でのデータ圧縮に関する注意

- 7.7.3 よりも前のバージョンの NetBackup メディアサーバーでは、データ圧縮はサポートされません。そのため、クラウドストレージサーバーの構成中に古いバージョンのメディアサーバーを選択した場合は、クラウドストレージサーバーの構成ウィザードに圧縮オプションが表示されません。
- NetBackup は、圧縮レベル 3 で、LZO Pro というサードパーティ製ライブラリを使用します。`bptm` ログには、クラウドストレージでバックアップを作成した後のデータ圧縮率の情報が含まれています。
  p.161 の「圧縮率の表示」を参照してください。
- NetBackup は、256 KB のチャンクでデータを圧縮します。
- NetBackup アクセラレータおよび移動検出機能を備えた True Image Restore (TIR) は、圧縮でサポートされます。
- バックアップデータは、クラウドストレージサーバーへの転送前に圧縮されます。圧縮オプションと暗号化オプションの両方が選択された場合、データは暗号化前に圧縮されます。
- データ圧縮では、圧縮可能なデータの量に応じてバックアップ時間が短縮されデータサイズが削減されます。しかしながら、圧縮しない場合のデータと比較すると、帯域幅使用率が削減されていることが分かります。
- 圧縮できないデータの場合は、データ圧縮のパフォーマンスが低下します。そのため、Veritas は、ポリシーデータなどの圧縮不能なデータのバックアップに対して圧縮を有効化しないことを推奨します。
- Veritas は、別の種類のストレージサーバーで同じバケットを使用しないことを推奨します。
- ストレージサーバー側の圧縮と一緒にクライアント側の圧縮を使用しないでください。
- ストレージサーバーの作成後に、圧縮構成の設定 (有効または無効) を変更することはできません。

クラウドストレージのデータ暗号化について

クラウドに送信する前にデータを暗号化できます。NetBackup の［クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)］および［ディスクプールの構成ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)］には、キー管理および暗号化を構成する手順が含まれています。

NetBackup はキーマネージメントサービス (KMS) を使って、クラウドディスクストレージのデータ暗号化用のキーを管理します。KMS は NetBackup マスターサーバーベースの対称キー管理サービスです。サービスは、NetBackup マスターサーバー上で実行されます。KMS 機能を使うために追加のライセンスは必要ありません。

p.101 の「NetBackup クラウドストレージの暗号化のキー管理について」を参照してください。

格納データの暗号化とセキュリティについての詳細情報が利用可能です。

『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

NetBackup クラウドストレージの暗号化のキー管理について

NetBackup はキーマネージメントサービス (KMS) を使って、ディスクストレージのデータ暗号化用のキーを管理します。KMS は NetBackup マスターサーバーベースの対称キー管理サービスです。サービスは、NetBackup マスターサーバー上で実行されます。KMS 機能を使うために追加のライセンスは必要ありません。

NetBackup は、クラウドストレージの暗号化キーを管理するのに KMS を使います。

p.101 の「クラウドストレージのデータ暗号化について」を参照してください。

KMS データベースに必要となるキーを次の表で説明します。［クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)］を使うときに、これらのキーのパスフレーズを入力できます。

表 3-7 KMS データベースに必要な暗号化キー

キー	説明
ホストマスターキー (Host Master Key)	ホストマスターキーはキーデータベースを保護します。ホストマスターキーはパスフレーズと ID を必要とします。KMS はキーを生成するのにパスフレーズを使います。
キーの保護キー (Key Protection Key)	キーの保護キーは、キーデータベースの個別のレコードを保護します。キーの保護キーはパスフレーズと ID を必要とします。KMS はキーを生成するのにパスフレーズを使います。

ストレージサーバーとボリューム組み合わせのそれぞれに必要となる暗号化キーを次の表で説明します。クラウドストレージサーバーを構成したときに暗号化を指定すると、ストレージボリュームのキーグループに対してパスフレーズを設定する必要があります。[ディスクプールの構成ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)]を使うときに、これらのキーのパスフレーズを入力します。

表 3-8　ストレージサーバーとボリュームの各組み合わせの暗号化キーとキーレコード

項目	説明
キーグループのキー	キーグループのキーはそのキーグループを保護します。ストレージサーバーとボリュームの組み合わせごとにキーグループが必要になり、各キーグループのキーにはパスフレーズが必要です。キーグループ名は、次のとおりに記述されるストレージ形式を使用する必要があります。 クラウドストレージの場合の形式は次のとおりです。 `storage_server_name:volume_name` 次の項目では、クラウドストレージに関するキーグループ名のコンポーネントの必要条件について説明します。 ■ `storage_server_name`: ストレージサーバーに使った名前と同じ名前を使う必要があります。名前は完全修飾ドメイン名か省略名にできますが、ストレージサーバーと同じものにする必要があります。 ■ コロン (:) は *storage_server_name* の後に必要です。 ■ `volume_name`: ストレージベンダーが NetBackup に公開している LSU 名を指定する必要があります。 [ディスクプールの構成ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)]は、キーグループを作成するときにこの形式に準拠します。
キーレコード (Key record)	作成する各キーグループはキーレコードを必要とします。キーレコードはストレージサーバーとボリュームのデータを保護する実際のキーを格納します。 キーレコードの名前はオプションです。キー名を使う場合は、どんな名前でも使えます。ベリタス社は、ボリューム名と同じ名前を使うことを推奨します。[ディスクプールの構成ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)]ではキーレコードのキーは要求されません。このウィザードでは、ボリューム名がキー名として使われます。

KMS について詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

クラウドストレージサーバーについて

ストレージサーバーは、ストレージに対してデータの書き込みと読み込みを実行するエンティティです。クラウドストレージに対する、NetBackup ホストではありません。通常、これはご利用のクラウドストレージベンダーがインターネットに開示し、バックアップデータの送信先となるホストです。ストレージベンダーからストレージサーバーの名前が提供されます。NetBackup でクラウドストレージを構成するときは、その名前を使ってください。

クラウドストレージサーバーを構成するとき、NetBackup の[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]プロパティが継承されます。

p.82 の「[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]プロパティ」を参照してください。

ストレージサーバーを構成した後、ストレージサーバーのプロパティを変更できます。

p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。

特定のストレージベンダーの NetBackup ドメインには、ストレージサーバーが 1 つだけあります。

NetBackup メディアサーバーは、クライアントをバックアップし、ストレージサーバーにデータを送信します。

p.105 の「クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて」を参照してください。

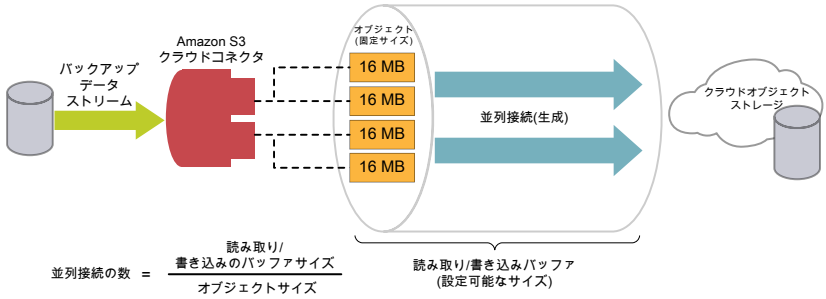
クラウドストレージのオブジェクトのサイズについて

概要

クラウド内の NetBackup のパフォーマンスはオブジェクトのサイズ、並列接続の数、読み取りまたは書き込みバッファのサイズの組み合わせによって決まります。

これらの決定要因の関連を次の図に示します。

図 3-3 NetBackup クラウドのパフォーマンスの注意事項



パラメータを以下に示します。

- オブジェクトのサイズ: バックアップデータストリームは固定サイズのチャンクに分割されます。これらのチャンクはクラウドオブジェクトストレージにオブジェクトとして格納されます。バックアップに関連するメタデータはさまざまなサイズで書き込まれます。
- 読み取りまたは書き込みバッファのサイズ: バックアップおよびリストア操作のパフォーマンスをチューニングするために、読み取りまたは書き込みバッファのサイズを設定することができます。

  メモ: 読み取りまたは書き込みバッファのサイズを大きくすると、並列接続数が増加します。同様に、並列接続数を少なくしたい場合は、読み取りまたは書き込みバッファのサイズを小さくします。ただし、ネットワーク帯域幅と使用可能なシステムメモリを考慮する必要があります。

- 並列接続 (算出): バックアップおよびリストア操作のパフォーマンスを改善するため、NetBackup ではクラウドストレージへの複数の並列接続を使います。NetBackup のパフォーマンスは並列接続数によって異なります。

  並列接続数は読み取りまたは書き込みバッファのサイズとオブジェクトのサイズから算出されます。

  並列接続数 = 読み取りまたは書き込みバッファのサイズ / オブジェクトのサイズ

  並列接続数を決定する際は、以下の要因を考慮します。

  - クラウドストレージプロバイダによって許可される並列接続の最大数
  - NetBackup とクラウドストレージ環境の間のネットワークで使用可能な帯域幅
  - NetBackup ホストで使用可能なシステムメモリ

現在のデフォルト設定

デフォルト設定は以下のとおりです。

表 3-9 現在のデフォルト設定

クラウドストレージプロバイダ	CloudCatalyst ストレージ		従来のクラウドストレージ	
	オブジェクトのサイズ	デフォルトの読み取り/書き込みバッファのサイズ	オブジェクトのサイズ	デフォルトの読み取り/書き込みバッファのサイズ
Amazon S3 と Amazon GovCloud	64 MB (固定)	64 MB (固定)	16 MB (固定)	400 MB (16 MB から 1 GB に設定可能)
Azure	64 MB (固定)	64 MB (固定)	4 MB (固定)	400 MB (4 MB から 1 GB に設定可能)

注意事項

ネットワーク上のデータ転送で一時的なエラーが発生した場合、NetBackup はエラーが発生したオブジェクトを転送するため、複数回再試行します。このような場合、エラーが続くと、完全なオブジェクトが再び転送されます。また、レイテンシとパケット損失が大きい場合は、パフォーマンスが低下することがあります。レイテンシとパケット損失の問題は並列接続数を大きくすると解決することがあります。

NetBackup には、クライアント側でいくつかのタイムアウトが設定されています。アップロード操作が算出された最低の NetBackup データ転送速度より (オブジェクトのサイズが大きいために) 遅くなる場合は、NetBackup でエラーが発生している可能性があります。

重複排除をサポートしないレガシー環境については、次のことを考慮してください。

旧バージョン (8.0 以前) のイメージからリストアする場合にオブジェクトのサイズが 1 MB のときは、(1 つの接続につき) 16 MB のバッファは完全には使用されず、メモリは消費されます。オブジェクトのサイズを大きくした場合でも、接続数には使用可能なメモリによる制限があります。

接続数が少なくなる場合は、並列で行われるダウンロードの数は以前の接続数の場合より少なくなります。

クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて

クラウドストレージで使う NetBackup メディアサーバーは、NetBackup クライアントをバックアップしてバックアップデータをクラウドストレージサーバーに送信します。その後、データはストレージサーバーからストレージに書き込まれます。

p.103 の「クラウドストレージサーバーについて」を参照してください。

また、NetBackup メディアサーバーはリストア時にプライマリストレージ (クライアント) にデータを移動し、複製時にセカンダリストレージから三次ストレージにデータを移動することもできます。メディアサーバーはデータムーバーとしても知られています。これらは、ストレージの実装時にストレージとの通信に使うソフトウェアプラグインをホストします。

クラウドストレージサーバーを構成するときに、ウィザードまたはコマンドラインで指定するメディアサーバーがクラウドストレージのデータムーバーになります。

p.108 の「クラウドストレージのストレージサーバーの構成」を参照してください。

クライアントのバックアップのために追加のメディアサーバーを追加できます。メディアサーバーは、クラウドストレージに送信するバックアップの負荷を分散するのに役立ちます。

p.140 の「クラウド環境へのバックアップメディアサーバーの追加」を参照してください。

NetBackup ストレージユニットを構成するときに、バックアップと複製に使うデータムーバーを制御できます。

p.142 の「クラウドストレージ用のストレージユニットの構成」を参照してください。

クラウドメディアサーバーをクラウドマスターホストとして構成できます。

p.106 の「NetBackup クラウドのマスターホストとしてのメディアサーバーの使用」を参照してください。

クラウドストレージをサポートするには、メディアサーバーが次の項目に適合している必要があります。

- クラウドストレージでオペレーティングシステムがサポートされている必要があります。NetBackup がクラウドストレージでサポートするオペレーティングシステムについては、NetBackup オペレーティングシステム互換性一覧を参照してください。次の URL から入手できます。
  http://www.netbackup.com/compatibility
- NetBackup クラウドストレージサービスコンテナ (`nbcssc`) を実行している必要があります。
  p.92 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナについて」を参照してください。
- クラウドストレージに使用する NetBackup メディアサーバーは、マスターサーバーのバージョンと同じ NetBackup バージョンにする必要があります。

NetBackup クラウドのマスターホストとしてのメディアサーバーの使用

NetBackup クラウドでサポートされていないすべてのオペレーティングシステムでこの手順を実行する必要があります。

該当リリースの NetBackup ハードウェア互換性リストについては、次の URL を参照してください。

http://www.netbackup.com/compatibility

ディザスタリカバリの場合は、NetBackup クラウドのマスターホストとして構成したメディアサーバーから、次のファイルを手動でバックアップする必要があります。

- `CloudProvider.xml`
- `CloudInstance.xml`

NetBackup クラウドのマスターホストとしてメディアサーバーを使用するには

1. いずれかの NetBackup クラウドのメディアサーバーを、クラウドのマスターホストとして指定します。

   NetBackup マスターサーバーとバージョンが同一のメディアサーバーを選択します。バージョンの異なるメディアサーバーは使用しないでください。

   メモ: クラウドストレージの構成や、バックアップやリストアなどの操作を行うときにすべてのメディアサーバーで必要となる `CloudProvider.xml` ファイルのマスターコピーは、メディアサーバーに保持されません。

   ---

2. クラウドのマスターホストとして選択されているサーバーを含む、すべての NetBackup クラウドのメディアサーバーで次のコマンドを実行します。

   ```
   nbcssc -t -a NetBackup
   ```

   ```
   nbcssc -s -a NetBackup -m cloud_master_host -f
   ```

   コマンドについて詳しくは『Veritas NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

3. クラウドのマスターホストの `cloudstore.conf` ファイルで述べられているように、CSSC_PORT と CSSC_IS_SECURE の値が CSSC_MASTER_PORT と CSSC_MASTER_IS_SECURE として、他のすべての NetBackup クラウドのメディアサーバーの `cloudstore.conf` ファイルにコピーされていることを確認します。

クラウドのマスターホストを選択した後は、別のメディアサーバーを指すように名前を再度変更しないでください。変更する必要が生じた場合は、ベリタスのテクニカルサポートに問い合わせてください。

ディザスタリカバリ後の追加タスク

プロキシサーバーを使用するクラウドストレージサーバーの場合は、プロキシのクレデンシャルを更新する必要があります。

- NetBackup 管理者コンソールを使用してこのタスクを実行するには、p.89 の「クラウドストレージホストプロパティの変更」を参照してください。を参照してください。
- コマンドを使用してこのタスクを実行するには、次のコマンドを実行します。

  ```
  csconfig cldinstance -us -in instance_name -sts storage_server_name
  -pxtype proxy_type -pxhost proxy_host -pxport proxy_port
  -pxautth_type proxy_auth_type -pxtunnel proxytunnel_usage
  ```

  コマンドについて詳しくは『Veritas NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

クラウドストレージのストレージサーバーの構成

このコンテキストでの構成とは、クラウドストレージに対して読み書きできるストレージサーバーとしてホストを構成することをいいます。NetBackup の[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]では、クラウドストレージベンダーのサービスエンドポイントと通信してストレージサーバーに適切なホストを選択します。

p.103 の「クラウドストレージサーバーについて」を参照してください。

ウィザードでは暗号化を有効にして、NetBackup Key Management Service の対応するパラメータを構成することもできます。

p.101 の「クラウドストレージのデータ暗号化について」を参照してください。

暗号化を構成する場合、Veritas はキー名のレコードを保存することをお勧めします。

p.138 の「NetBackup クラウドストレージ暗号化の KMS キー名のレコードの保存」を参照してください。

CLI を使用してストレージサーバーを構成する場合、`nbdevconfig` および `tpconfig` コマンドを実行する前に `csconfig` コマンドを実行する必要があります。

これらのコマンドについて詳しくは『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。このガイドは、次の場所から入手できます。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

構成プロセス中に選択した NetBackup メディアサーバーは、クラウドストレージの必要条件に適合している必要があります。

p.105 の「クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて」を参照してください。

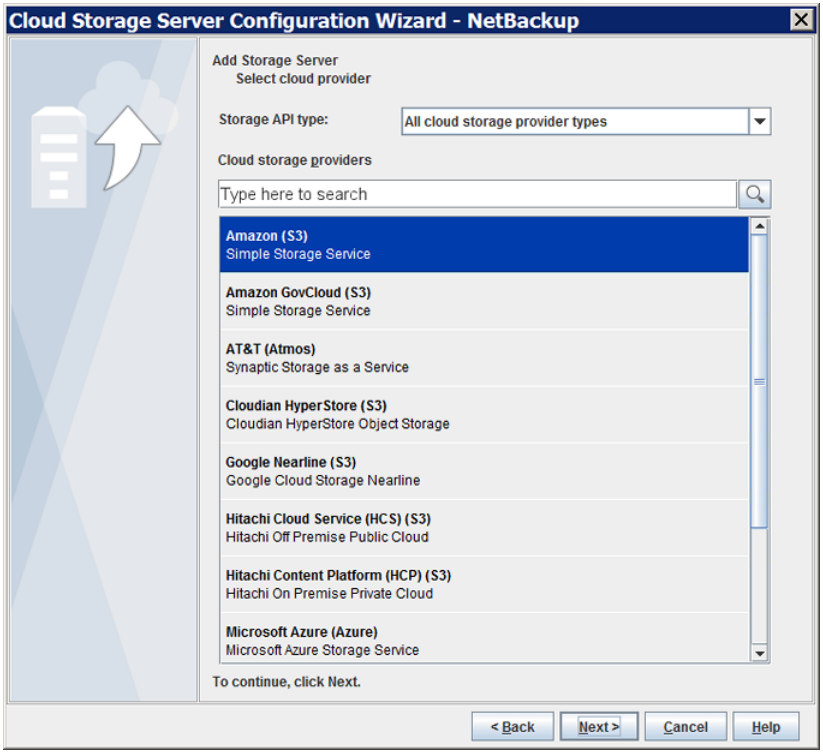
ウィザードを使ってクラウドストレージサーバーを構成する方法

1. NetBackup マスターサーバーに接続した NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]または[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]のどちらかを選択します。
2. 右ペインで、[クラウドストレージサーバーの構成 (Configure Cloud Storage Servers)]を選択します。

3 ［ようこそ (Welcome)］パネルで［次へ (Next)］をクリックします。

［クラウドプロバイダの選択 (Select cloud provider)］パネルが表示されます。

このパネルの例を次に示します。



4 ［Select cloud provider (クラウドプロバイダの選択)］パネルで、次のいずれかを実行します。

- クラウドプロバイダの［クラウドストレージプロバイダ (Cloud storage providers)］リストから、クラウドプロバイダを選択します。
- API 形式のクラウドストレージを［ストレージ API 形式 (Storage API type)］ドロップダウンリストから選択し、クラウドプロバイダを選択することによって、クラウドプロバイダのリストをソートします。
- ［クラウドストレージプロバイダ (Cloud storage providers)］検索ボックスに、選択するクラウドプロバイダ名を入力します。クラウドプロバイダによっては、複数のクラウドストレージ API 形式をサポートする場合があります。適切なプロバイダを選択します。

5 ［次へ (Next)］をクリックします。選択したクラウドプロバイダのウィザードパネルが表示されます。

6 クラウドプロバイダ用のウィザードパネルで、適切な情報を選択するか、または入力します。

必要な情報はクラウドベンダーによって異なります。各プロバイダに必要な情報については、ストレージ形式の API 別に他のトピックで説明します。それらのトピックには、ウィザードパネルの例も含まれます。

p.17 の「Amazon S3 クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。

p.47 の「EMC Atmos クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。

p.54 の「Microsoft Azure クラウドストレージ API 形式について」を参照してください。

p.62 の「OpenStack Swift クラウドストレージの API 形式について」を参照してください。

Rackspace Cloud Files は例外であり、次のトピックで説明します。

p.73 の「Rackspace Cloud Files ストレージの要件について」を参照してください。

メモ: プロバイダ情報のトピックには、注意または警告が含まれる場合があります。ウィザードパネルのフィールドの入力を完了する前に必ずトピックを見直してください。

---

7 優先ストレージクラスを選択し、［次へ (Next)］クリックします。

メモ: このオプションは、Amazon と Amazon GovCloud のクラウドプロバイダに対してのみ利用可能です。p.38 の「Amazon S3 ストレージクラスについて」を参照してください。

---

8 ［圧縮および暗号設定の指定 (Specify compression and encryption settings)］パネルで次の設定を指定します。

メモ: 7.7.3 よりも前のバージョンの NetBackup メディアサーバーでは、データ圧縮はサポートされません。そのため、以前のバージョンのメディアサーバーを選択した場合、圧縮オプションはパネルに表示されません。

注意: NetBackup コマンドを使用して、圧縮を使うクラウドストレージ環境に NetBackup 7.7.3 より前のメディアサーバーを追加するとクラウドバックアップに失敗する場合があります。圧縮を使用するクラウドストレージ構成に追加するメディアサーバーがすべて NetBackup 7.7.3 以降であることを確認してください。

- バックアップデータを圧縮するには、[クラウドストレージに書き込む前にデータを圧縮する (Compress data before writing to cloud storage)]を選択します。
  p.100 の「クラウドバックアップ用のデータ圧縮について」を参照してください。
- クラウドストレージに送信されるデータを暗号化するには、[クラウドストレージに書き込む前に AES-256 を使用して暗号化する (Encrypt data using AES-256 before writing to cloud storage)]を選択します。次に、情報を入力して KMS データベースを保護します。
  p.111 の「KMS データベース暗号化の設定」を参照してください。

[次へ (Next)]をクリックします。圧縮情報と暗号化情報を入力すると、構成後に設定を変更できないことを説明するダイアログボックスが表示されます。[はい (Yes)]をクリックして続行するか、[キャンセル (Cancel)]をクリックしてキャンセルします。[はい (Yes)]をクリックすると、[クラウドストレージサーバーの構成の概略 (Cloud Storage Server Configuration Summary)]パネルが表示されます。

9 [クラウドストレージサーバーの構成の概略 (Cloud Storage Server Configuration Summary)]パネルで、選択した項目を確認します。

訂正する必要がある場合は、訂正する必要があるパネルまで[戻る (Back)]をクリックします。

選択項目が正しければ、[次へ (Next)]をクリックします。ウィザードでストレージサーバーを作成すると、[ストレージサーバー作成の確認 (Storage Server Creation Confirmation)]パネルが表示されます。

10 [ストレージサーバー作成の確認 (Storage Server Creation Confirmation)]パネルで、次のいずれかを実行します。

- [ディスクプールの構成ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)]を続行するには、[次へ (Next)]をクリックします。
  p.129 の「クラウドストレージのディスクプールの構成」を参照してください。
- ウィザードを終了するには、[完了 (Finish)]をクリックします。
  終了しても、ディスクプールを作成できます。
  p.129 の「クラウドストレージのディスクプールの構成」を参照してください。

KMS データベース暗号化の設定

表 3-10 はNetBackup キーマネージメントサービスデータベースとクラウドストレージのデータ暗号化を構成するための設定について説明します。この情報は、NetBackup でデータの暗号化に使用するキーを含むデータベースを保護します。キーグループおよび

キーレコードも暗号化に必要です。［クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)］と［ディスクプールの構成ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)］で暗号化を設定します。

表 3-10　暗号化データベースに必要な情報

フィールド名	必要な情報
KMS サーバー名 (KMS Server Name)	このフィールドは NetBackup マスターサーバーの名前を表示します。マスターサーバーでは KMS のみを構成できます。このフィールドは変更できません。 KMS が構成されていない場合は、このフィールドは <kms_server_name> を表示します。
ホストマスターキー (HMK) のパスフレーズ (Host Master Key (HMK) Passphrase)	データベースを保護するキーを入力します。KMS の用語では、キーはパスフレーズと呼ばれています。
HMK パスフレーズの再入力 (Re-enter HMK Passphrase)	ホストのマスターキーを再入力します。
ホストマスターキー ID (Host Master Key ID)	ID はマスターキーに割り当てるラベルです。特定のホストのマスターキーを ID で識別できるようにします。このフィールドは 255 文字に制限されています。 キーストアファイルの内容を複合化するためには、正しいキーの保護キーとホストのマスターキーを識別する必要があります。これらの ID はキーストアファイルヘッダーに暗号化されずに保存されています。キーストアファイルへのアクセスしかなくても正しい ID を選択できます。ディザスタリカバリを実行するには、ファイルと関連付けられる正しい ID とパスフレーズを覚える必要があります。
キーの保護キー (KPK) パスフレーズ (Key Protection Key (KPK) Passphrase)	KMS データベース内の個別のレコードを保護するパスワードを入力します。KMS の用語では、キーはパスフレーズと呼ばれています。
KPK パスフレーズの再入力 (Re-enter KPK Passphrase)	キーの保護パスワードを再入力します。
キーの保護キー ID (Key Protection Key ID)	ID はキーに割り当てるラベルです。特定のキーの保護キーを ID で識別できるようにします。このフィールドは 255 文字に制限されています。 キーストアファイルの内容を複合化するためには、正しいキーの保護キーとホストのマスターキーを識別する必要があります。これらの ID はキーストアファイルヘッダーに暗号化されずに保存されています。キーストアファイルへのアクセスしかなくても正しい ID を選択できます。ディザスタリカバリを実行するには、ファイルと関連付けられる正しい ID とパスフレーズを覚える必要があります。

Veritas では、ストレージサーバーとディスクプールを設定した後にキー名のレコードを保存することをお勧めしています。

p.138 の「NetBackup クラウドストレージ暗号化の KMS キー名のレコードの保存」を参照してください。

ストレージクラスの Amazon クラウドストレージへの割り当て

NetBackup では、新しいストレージサーバーを構成するときに、ストレージクラスをクラウドストレージに割り当てることができます。

p.38 の「Amazon S3 ストレージクラスについて」を参照してください。

p.108 の「クラウドストレージのストレージサーバーの構成」を参照してください。

ストレージクラスを割り当てる方法

1. NetBackup 管理コンソール、[クラウドストレージの構成 (Cloud Storage Configuration)]ウィザードで、[Amazon]を選択します。
2. [ストレージサーバーの追加 (Add Storage Server)]画面で、サービスホスト、ストレージサーバー名、アクセスの詳細などの Amazon S3 の構成の詳細を指定します。
3. 優先ストレージクラスを選択し、[次へ (Next)]クリックします。Veritas は、クラウドストレージサーバーのストレージクラスを割り当てた後、それを変更しないことをお勧めします。

   p.38 の「Amazon S3 ストレージクラスについて」を参照してください。

   メモ: NetBackup 8.1.1 より前には、[サーバーの詳細な構成 (Advanced Server Configuration)]画面で、x-amz-storage-class ヘッダーに NetBackup がサポートする Amazon S3 ストレージクラスが表示されました。

   メモ: AMZ:STORAGE_CLASS では、ストレージサーバーのプロパティダイアログボックスにストレージクラスがリストされます。

4. 新しいディスクプールを構成します。

   p.129 の「クラウドストレージのディスクプールの構成」を参照してください。

   メモ: Veritas は別のストレージクラスには異なるバケットを使用することを推奨します。

5 NetBackup 管理コンソール、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]、[ストレージ (Storage)]、[ストレージユニット (Storage Units)]に順にアクセスして新しいストレージユニットを構成します。

6 次の各ユーザーインターフェースにアクセスすることによって、新しいストレージユニットを使用するために、既存のポリシーまたは SLP を変更 (または新しいポリシーまたは SLP を作成) します。

- ポリシーにアクセスするには、次を実行します。NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup 管理 (NetBackup Management)]を展開して[ポリシー (Policies)]をクリックします。
- SLP にアクセスするには、次を実行します。NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup 管理 (NetBackup Management)]を展開し、[ストレージ (Storage)]を展開して[ストレージライフサイクルポリシー (Storage Life Cycle Policies)]をクリックします。

クラウドストレージサーバープロパティの変更

[ストレージサーバーの変更 (Change Storage Server)]ダイアログボックスはすべてのストレージサーバーのプロパティをリストします。必要に応じてこれらのプロパティを変更できます。

p.80 の「NetBackup のクラウドストレージの構成」を参照してください。

クラウドストレージホストのプロパティを変更する方法については、別の項で説明します。

p.89 の「クラウドストレージホストプロパティの変更」を参照してください。

クラウドストレージサーバーのプロパティを変更する方法

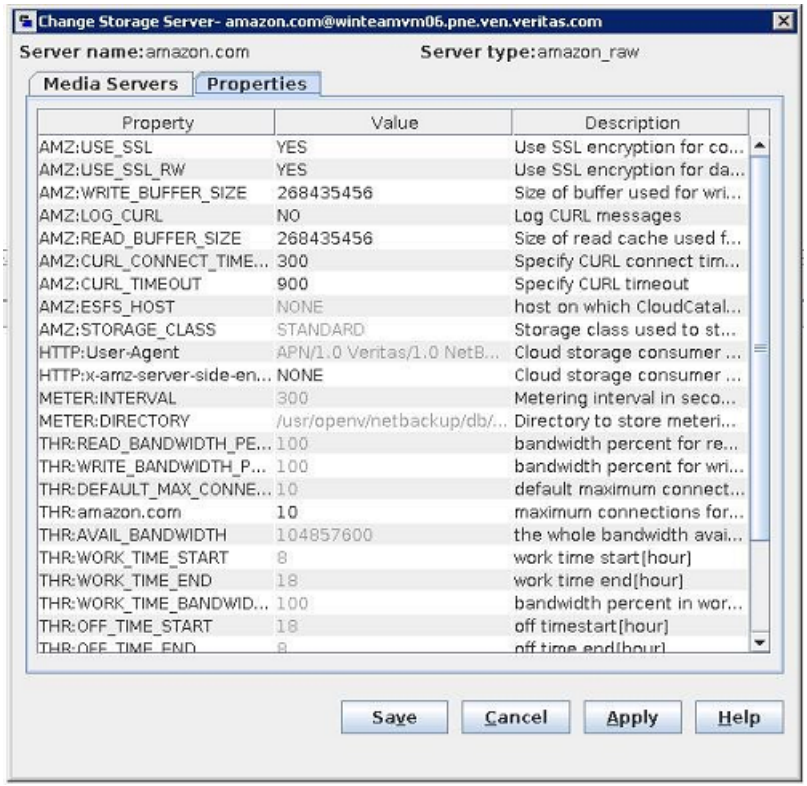
1 NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[クレデンシャル (Credentials)]>[ストレージサーバー (Storage Server)]を展開します。

2 ストレージサーバーを選択します。

3 [編集 (Edit)]メニューで、[変更 (Change)]を選択します。

4 ［ストレージサーバーの変更 (Change Storage Server)］ダイアログボックスで、［プロパティ (Properties)］タブを選択します。

次に、形式が `amazon_raw` である Amazon S3 ストレージサーバーの［プロパティ (Properties)］の例を示します。



5 プロパティを変更するには、［値 (Value)］列で値を選択し、次に値を変更します。

p.116 の「NetBackup クラウドストレージサーバーのプロパティ」を参照してください。

p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。

p.127 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの暗号化プロパティ」を参照してください。

6 すべてのプロパティを変更し終わるまで、手順 5 を繰り返します。

7 ［OK］をクリックします。

8 ［NetBackup 管理コンソール］［アクティビティモニター (Activity Monitor)］を使って NetBackup Remote Manager と Monitor Service (nbrmms) を再起動します。

NetBackup クラウドストレージサーバーのプロパティ

［ストレージサーバーの変更 (Change Storage Server)］ダイアログボックスの［プロパティ (Properties)］タブを使用すると、NetBackup とクラウドストレージの対話に影響するいくつかのプロパティを変更できます。次の表は、NetBackup がプロパティを分類するために使用する接頭辞について説明しています。

すべてのプロパティがすべてのストレージベンダーに適用されるわけではありません。

表 3-11　接頭辞の定義

接頭辞	定義	詳細情報
AMZ	Amazon	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
AMZGOV	Amazon GovCloud	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
ATT	AT&T	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
AZR	Microsoft Azure	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
CLD	Cloudian Hyperstore	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
CRYPT	暗号化	p.127 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの暗号化プロパティ」を参照してください。
GOOG	Google Nearline	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
HT	Hitachi 社	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
HTTP	HTTP ヘッダー	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。 **メモ:** このフィールドは、Amazon S3 対応クラウドプロバイダに適用されます。

接頭辞	定義	詳細情報
METER	測定 (Metering)	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
MSDPCLD	CloudCatalyst クラウドに対する重複排除	p.126 の「NetBackup CloudCatalyst ストレージサーバーのプロパティ」を参照してください。
ORAC	Oracle クラウド	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
RACKS	Rackspace	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
SWSTK-SWIFT	SwiftStack (Swift)	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。
THR	スロットル(Throttling)	p.117 の「NetBackup クラウドストレージサーバー帯域幅スロットルのプロパティ」を参照してください。
の場合は VER	Verizon 社	p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。

p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。

NetBackup クラウドストレージサーバー帯域幅スロットルのプロパティ

次のストレージサーバーのプロパティは、帯域幅スロットルに適用されます。THR の接頭辞はスロットル調整のプロパティを指定します。目的のクラウドベンダーに対して適切なクラウドプロバイダの URL を使用します。

これらのプロパティを変更するには、[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]ホストプロパティの[クラウド設定 (Cloud Settings)]タブを使ってください。

p.82 の「[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]プロパティ」を参照してください。

表 3-12 クラウドストレージサーバー帯域幅スロットルのプロパティ

プロパティ	説明
THR:*storage_server*	特定のクラウドストレージサーバーのために実行可能な同時並行ジョブの最大数を示します。 CloudCatalyst クラウドストレージサーバーであるメディアサーバーのスロットル調整を設定する場合: ■ この値を 160 以上に変更します。 ■ この値は、[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)] のホストプロパティ内の [最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] メディアサーバープロパティと同じである必要があります。 p.82 の「[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)] プロパティ」を参照してください。 デフォルト値: なし 指定可能な値: [説明 (Description)] 列を参照
THR:AVAIL_BANDWIDTH	この読み取り専用フィールドには、クラウド機能で利用可能な帯域幅の合計値が表示されます。値はバイト / 秒の単位で表示されます。0 (ゼロ) より大きい数字を指定する必要があります。ゼロを入力すると、エラーが生成されます。 デフォルト値: 104857600 有効値: 正の整数

プロパティ	説明
THR:DEFAULT_MAX_CONNECTIONS	メディアサーバーがクラウドストレージサーバーのために実行可能な同時並行ジョブのデフォルトの最大数。 THR:*storage_server* が設定されている場合は、NetBackup は THR:DEFAULT_MAX_CONNECTIONS の代わりに THR:*storage_server* を使います。 これは読み取り専用フィールドです。 この値は、クラウドストレージサーバーではなくメディアサーバーに適用されます。クラウドストレージサーバーに接続できるメディアサーバーが複数ある場合、各メディアサーバーで異なる値を持つ場合があります。したがって、クラウドストレージサーバーで実行可能なジョブの合計数を判断するには、各メディアサーバーからの値を追加してください。 NetBackup が THR:DEFAULT_MAX_CONNECTIONS よりも多いジョブ数を許可するように設定されている場合は、NetBackup では最大ジョブ数に達した後に開始されたジョブがすべて失敗します。ジョブにはバックアップジョブとリストアジョブの両方が含まれています。 ジョブ数の制限は、バックアップポリシーごと、ストレージユニットごとに設定できます。 『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。 http://www.veritas.com/docs/DOC5332 **メモ:** NetBackup はジョブを開始するときに、並列実行ジョブの数、メディアサーバーごとの THR:DEFAULT_MAX_CONNECTIONS の数、メディアサーバーの数、ジョブの負荷分散ロジックなどの多くの要素を把握する必要があります。したがって、NetBackup は正確な最大接続数でジョブを失敗しない場合もあります。NetBackup は、接続数が最大数よりもわずかに少ない場合、正確に最大数の場合、最大数よりわずかに多い場合にジョブを失敗することがあります。 実際には、この値を 100 より大きく設定する必要はありません。 デフォルト値: 10 指定可能な値: 1 - 2147483647
THR:OFF_TIME_BANDWIDTH_PERCENT	この読み取り専用フィールドには、業務外時間に使用される帯域幅の割合が表示されます。 デフォルト値: 100 指定可能な値: 0 - 100

プロパティ	説明
THR:OFF_TIME_END	この読み取り専用フィールドには、業務外時間の終了時刻が表示されます。24 時間形式で時間を指定します。たとえば、午前 8 時は 8、午後 6 時 30 分は 1830 です。 デフォルト値: 8 指定可能な値: 0 - 2359
THR:OFF_TIME_START	この読み取り専用フィールドには、業務外時間の開始時刻が表示されます。24 時間形式で時間を指定します。たとえば、午前 8 時は 8、午後 6 時 30 分は 1830 です。 デフォルト値: 18 指定可能な値: 0 - 2359
THR: READ_BANDWIDTH_PERCENT	この読み取り専用フィールドには、クラウド機能が使う読み取り帯域幅の割合が表示されます。0 から 100 までの値を指定します。不正な値を入力すると、エラーが生成されます。 デフォルト値: 100 指定可能な値: 0 - 100
THR:SAMPLE_INTERVAL	この読み取り専用フィールドには、バックアップストリームが利用率をサンプリングし、帯域幅の使用を調整する頻度が表示されます。値は、秒単位で指定されます。この値を 0 に設定すると、スロットル調整は無効になります。 デフォルト値: 0 指定可能な値: 1 - 2147483647
THR:WEEKEND_BANDWIDTH_PERCENT	この読み取り専用フィールドには、週末に使用される帯域幅の割合が表示されます。 デフォルト値: 100 指定可能な値: 0 - 100
THR:WEEKEND_END	この読み取り専用フィールドには、週末の終了時刻が表示されます。曜日の値は、月曜日は 1、火曜日は 2、のように番号で指定されます。 デフォルト値: 7 指定可能な値: 1 - 7
THR:WEEKEND_START	この読み取り専用フィールドには、週末の開始時刻が表示されます。曜日の値は、月曜日は 1、火曜日は 2、のように番号で指定されます。 デフォルト値: 6 指定可能な値: 1 - 7

プロパティ	説明
THR:WORK_TIME_BANDWIDTH_PERCENT	この読み取り専用フィールドには、作業時間に使用される帯域幅の割合が表示されます。 デフォルト値: 100 指定可能な値: 0 - 100
THR:WORK_TIME_END	この読み取り専用フィールドには、作業時間の終了時刻が表示されます。24 時間形式で時間を指定します。たとえば、午前 8 時は 8、午後 6 時 30 分は 1830 です。 デフォルト値: 18 指定可能な値: 0 - 2359
THR:WORK_TIME_START	この読み取り専用フィールドには、作業時間の開始時刻が表示されます。24 時間形式で時間を指定します。たとえば、午前 8 時は 8、午後 6 時 30 分は 1830 です。 デフォルト値: 8 指定可能な値: 0 - 2359
THR: WRITE_BANDWIDTH_PERCENT	この読み取り専用フィールドには、クラウド機能が使う書き込み帯域幅の割合が表示されます。0 から 100 までの値を指定します。不正な値を入力すると、エラーが生成されます。 デフォルト値: 100 指定可能な値: 0 - 100

p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。

p.116 の「NetBackup クラウドストレージサーバーのプロパティ」を参照してください。

NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ

クラウドストレージサーバーのすべてまたはほとんどは、表 3-13のストレージサーバーのプロパティを使います。現在サポートされるクラウドベンダーの接頭辞を以下に示します。

- Amazon: AMZ
- Amazon GovCloud: AMZGOV
- AT&T: ATT
- Cloudian: CLD
- Google Nearline: GOOG
- 日立: HT

- Microsoft Azure: AZR
- Rackspace: RACKS
- Verizon: VER

表 3-13　ストレージサーバーのクラウド接続プロパティ

プロパティ	説明
METER:DIRECTORY	この読み取り専用フィールドには、データストリームの測定情報を格納するためディレクトリが表示されます。 デフォルト値: /usr/openv/netbackup/db/cloud (UNIX) または *install_path*¥VERITAS¥NetBackup¥db¥cloud¥ (Windows)
METER:INTERVAL	NetBackup がレポート用に接続情報を収集する間隔です。 NetBackup OpsCenter は、レポートを作成するために収集された情報を使います。値は秒単位で設定されます。デフォルト設定は 300 秒 (5 分) です。この値を 0 に設定すると、測定は無効になります。 このプロパティを変更するには、[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]ホストプロパティの[クラウド設定 (Cloud Settings)]タブを使ってください。 p.82 の「[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]プロパティ」を参照してください。 デフォルト値: 300 指定可能な値: 1 - 10000
PREFIX: CURL_CONNECT_TIMEOUT	クラウドストレージサーバーに接続するためにメディアサーバーに割り当てられている時間。この値は秒単位で指定されます。デフォルトは 300 秒 (5 分) です。 この設定は接続時間のみを制限し、セッション時間は制限しません。指定された時間内にメディアサーバーがクラウドストレージサーバーに接続できなければ、ジョブは失敗します。 この値は無効にできません。無効な番号が入力されると、CURL_CONNECT_TIMEOUT はデフォルト値の 300 に戻ります。 デフォルト値: 300 指定可能な値: 1 - 10000
PREFIX: CURL_TIMEOUT	データ操作の完了までに許容される最大時間 (秒単位)。この値は秒単位で指定されます。操作が指定された時間内に完了しない場合、操作は失敗します。デフォルトは 900 秒 (15 分) です。このタイムアウトを無効にするには、値を 0 (ゼロ) に設定します。 デフォルト値: 900 指定可能な値: 1 - 10000

プロパティ	説明
PREFIX:ESFS_HOST	ESFS キャッシュを搭載しているホストを指定します。ESFS キャッシュは CloudCatalyst ストレージサーバーによってクラウドに対する重複排除に使用されます。 このプロパティは内部的に設定され、ユーザーが変更することはできません。
PREFIX:LOG_CURL	cURL アクティビティがログに記録されるかどうかを判断します。デフォルトは NO です。この場合、ログアクティビティは無効になります。 デフォルト値: NO 有効値: NO (無効) および YES (有効)
PREFIX:PROXY_IP	プロキシサーバーの TCP/IP アドレス。プロキシサーバーを使用しない場合は、このフィールドを空白にします。 デフォルト値: デフォルトなし 有効値: 有効な TCP/IP アドレス このパラメータは EMC Atmos と Rackspace にのみ適用可能です。
PREFIX:PROXY_PORT	プロキシサーバーの接続に使用されているポート番号。デフォルトは 70000 です。この場合、プロキシサーバーは使用されません。 デフォルト値: 70000 有効値: 有効なポート番号 このパラメータは EMC Atmos と Rackspace にのみ適用可能です。
PREFIX:PROXY_TYPE	プロキシサーバーの形式を定義するために使用します。ファイアウォールによってクラウドベンダーへのアクセスが阻止される場合は、この値を使用してプロキシサーバーの形式を定義します。プロキシサーバーを使用しない場合は、このフィールドを空白にします。 デフォルト値: なし 有効値: NONE、HTTP、SOCKS、SOCKS4、SOCKS5、SOCKS4A このパラメータは EMC Atmos と Rackspace にのみ適用可能です。

プロパティ	説明
PREFIX: READ_BUFFER_SIZE	読み込み操作に使用するバッファのサイズ。READ_BUFFER_SIZE はバイト単位で指定されます。 バッファの使用を有効にするには、この値を 0 (ゼロ) 以外の数字に設定します。 READ_BUFFER_SIZE は、各リストアジョブ中にストレージサーバーから送信されるデータパケットのサイズを決定します。値を増加すると、大量の連続的なデータにアクセスされる際のパフォーマンスが向上する場合があります。数分内に指定された量のデータを伝送するために帯域幅が不足する場合、タイムアウトによりリストアエラーが発生することがあります。必要な帯域幅を計算する際には、複数のメディアサーバーで同時にバックアップジョブとリストアジョブを行う総負荷を考慮してください。 p.103 の「クラウドストレージのオブジェクトのサイズについて」を参照してください。
PREFIX:USE_SSL	制御 API に Secure Sockets Layer による暗号化を使用するかどうかを判断します。デフォルト値は YES です。この場合、SSL は有効になります。 デフォルト値: YES 有効値: YES または NO
PREFIX:USE_SSL_RW	読み込み操作および書き込み操作に Secure Sockets Layer による暗号化を使用するかどうかを判断します。デフォルト値は YES です。この場合、SSL は有効になります。 デフォルト値: YES 有効値: YES または NO
PREFIX: WRITE_BUFFER_NUM	このパラメータは Amazon S3 と互換性のあるクラウドプロバイダに適用されません。 この読み取り専用フィールドには、プラグインによって使われた書き込みバッファの合計数が表示されます。WRITE_BUFFER_SIZE 値はバッファのサイズを定義します。値は 1 に設定され、変更できません。 デフォルト値: 1 有効値: 1

プロパティ	説明
PREFIX: WRITE_BUFFER_SIZE	書き込み操作に使用するバッファのサイズ。WRITE_BUFFER_SIZE はバイト単位で指定されます。 バッファの使用を無効にするには、この値を 0 (ゼロ) に設定します。 WRITE_BUFFER_SIZE の値は、バックアップ中にデータムーバーからストレージサーバーに送信されるデータパックのサイズを決定します。値を増加すると、大量の連続的なデータにアクセスされる際のパフォーマンスが向上する場合があります。数分内に指定された量のデータを伝送するために帯域幅が不足する場合、タイムアウトによりバックアップエラーが発生することがあります。必要な帯域幅を計算する際には、複数のメディアサーバーで同時にバックアップジョブとリストアジョブを行う総負荷を考慮してください。 p.103 の「クラウドストレージのオブジェクトのサイズについて」を参照してください。
HTTP:User-Agent	これは、Amazon S3 と互換性のあるクラウドプロバイダに対してのみ適用可能です。 このプロパティは内部的に設定され、ユーザーが変更することはできません。
HTTP:x-amz-server-side-encryption	これが適用可能なクラウドプロバイダは、Amazon S3 と Amazon GovCloud のみです クラウドストレージに転送する必要があるデータについてサーバー側の暗号化を有効にするにはこのプロパティを使います。 AES-256 はサーバー側の暗号化標準です。 クラウドプロバイダのサーバー側の暗号化を無効にするにはこのプロパティを設定します。 **メモ:** NetBackup 管理コンソールを使用してクラウドストレージサーバーを設定しているときに、すでにメディアサーバー側の暗号化オプションが有効な場合には、このプロパティを有効にしないでください。
AMZ:UPLOAD_CLASS	これは、LIFECYCLE ストレージクラスに対してのみ適用可能です。 データをバックアップするためのストレージクラスを指定するには、このプロパティを使用します。 デフォルト値: STANDARD 有効値: STANDARD または STANDARD_IA
AMZ:RETRIEVAL RETENTION PERIOD	これは、Amazon Glacier に対してのみ適用可能です。 取得保持期間を日数で指定するには、このプロパティを使用します。

プロパティ	説明
AMZ:TRANSITION_TO_STANDARD_IA_AFTER	これは、LIFECYCLE ストレージクラスに対してのみ適用可能です。 STANDARD として UPLOAD_CLASS を設定した場合、TRANSITION_TO_STANDARD_IA_AFTER は NONE または 30 ～ 2147483617 の範囲のいずれかに設定する必要があります。 STANDARD_IA として UPLOAD_CLASS を設定した場合、TRANSITION_TO_STANDARD_IA_AFTER を NONE に設定する必要があります。
AMZ:TRANSITION_TO_GLACIER_AFTER	これは、LIFECYCLE ストレージクラスに対してのみ適用可能です。 STANDARD として UPLOAD_CLASS を設定した場合および TRANSITION_TO_STANDARD_IA_AFTER が 30 ～ 2147483617 の範囲に設定されている場合、TRANSITION_TO_GLACIER_AFTER を NONE または 60 ～ 2147483647 の範囲に設定する必要があります。STANDARD_IA ストレージクラスのデータの場合、この値には最低 30 日の保持期間が含まれます。 STANDARD として UPLOAD_CLASS を設定した場合および TRANSITION_TO_STANDARD_IA_AFTER が NONE に設定されている場合、TRANSITION_TO_GLACIER_AFTER を 1 ～ 2147483647 の範囲に設定する必要があります。 STANDARD_IA として UPLOAD_CLASS を設定した場合および TRANSITION_TO_STANDARD_IA_AFTER が NONE に設定されている場合、TRANSITION_TO_GLACIER_AFTER を 30 ～ 2147483647 の範囲に設定する必要があります。
AMZ:STORAGE_CLASS	これは、Amazon S3 クラウドプロバイダに対してのみ適用可能です。 クラウドストレージサーバーによって使用されるストレージクラスが表示されます。 このプロパティは内部的に設定され、ユーザーが変更することはできません。

p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。

p.116 の「NetBackup クラウドストレージサーバーのプロパティ」を参照してください。

NetBackup CloudCatalyst ストレージサーバーのプロパティ

MSDPCLD 接頭辞は、[ストレージサーバーの変更 (Change Storage Server)]ダイアログボックスの[プロパティ (Properties)]タブ内の重複排除ストレージプロパティを指定します。次の表に、プロパティを示します。

表 3-14 CloudCatalyst ストレージサーバーのプロパティ

プロパティ	説明
MSDPCLD:storagepath	ストレージのパス

プロパティ	説明
MSDPCLD:spalogpath	ストレージプールのログのパス
MSDPCLD:dbpath	データベースパス
MSDPCLD:required_interface	必要なインターフェース
MSDPCLD:spalogretention	ストレージプールのログの保持
MSDPCLD:verboselevel	ストレージプールの詳細レベル (0 から 5 の範囲)
MSDPCLD:replication_target(s)	レプリケーションターゲット
MSDPCLD:dedupetocloud	重複排除してクラウドに送信
MSDPCLD:Storage Pool Raw Size	ストレージプールの最大物理容量
MSDPCLD:Storage Pool Reserved Space	ストレージプールの予約された領域
MSDPCLD:Storage Pool Size	ストレージプールのサイズ
MSDPCLD:Storage Pool Used Space	ストレージプールの使用領域
MSDPCLD:Storage Pool Available Space	ストレージプールの利用可能な領域
MSDPCLD:Catalog Logical Size	カタログの論理サイズ
MSDPCLD:Catalog files Count	カタログのファイル数
MSDPCLD:Deduplication Ratio	重複排除率

p.116 の「NetBackup クラウドストレージサーバーのプロパティ」を参照してください。

p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。

NetBackup クラウドストレージサーバーの暗号化プロパティ

次の暗号化固有のストレージサーバープロパティは、ストレージベンダーの全員またはほとんどの人が使っています。CRYPT 接頭辞は、暗号化のプロパティを指定します。これらの値は表示専用であり、変更できません。

表 3-15　暗号化クラウドストレージサーバーのプロパティ

プロパティ	説明
CRYPT:KMS_SERVER	この読み取り専用フィールドには、KMS サービスをホストする NetBackup サーバーが表示されます。ストレージサーバーのプロパティを設定する際には、KMS サーバーホストの名前を入力します。デフォルトでは、このフィールドには NetBackup マスターサーバーの名前が含まれています。この値は変更できません。 デフォルト値: NetBackup のマスターサーバー名 有効値: 適用なし
CRYPT:KMS_VERSION	この読み取り専用フィールドには、NetBackup のキーマネージメントサービスのバージョンが表示されます。この値は変更できません。 デフォルト値: 16 有効値: 適用なし
CRYPT:LOG_VERBOSE	この読み取り専用フィールドには、暗号化アクティビティのログが有効かどうかが表示されます。値は、ログを有効にする場合は YES、無効にする場合は NO のいずれかを指定します。 デフォルト値: NO 有効値: YES および NO
CRYPT:VERSION	この読み取り専用フィールドには、暗号化のバージョンが表示されます。この値は変更できません。 デフォルト値: 13107 有効値: 適用なし

p.116 の「NetBackup クラウドストレージサーバーのプロパティ」を参照してください。
p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。

クラウドストレージのディスクプールについて

ディスクプールは、基礎となるディスクストレージ上のディスクボリュームを表します。ディスクプールは、NetBackup ストレージユニットの宛先ストレージです。クラウドストレージでは、1 つのディスクプールに対してボリュームを 1 つだけ指定してください。

ディスクプールとディスクボリュームの名前は、クラウドストレージプロバイダの環境内で一意である必要があります。

p.129 の「クラウドストレージのディスクプールの構成」を参照してください。

クラウドストレージのディスクプールがストレージライフサイクルポリシーのストレージ先である場合、NetBackup 容量管理が適用されます。

『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

クラウドストレージのディスクプールの構成

NetBackup の［ディスクプールの設定ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)］を使用してディスクプールのボリュームを作成します。暗号化されたストレージを作成する場合には、選択した暗号化を使用する各ボリュームのパスフレーズを入力する必要があります。パスフレーズによって、そのボリュームの暗号化キーが作成されます。

ウィザードを使ってクラウドストレージのディスクプールを構成する方法

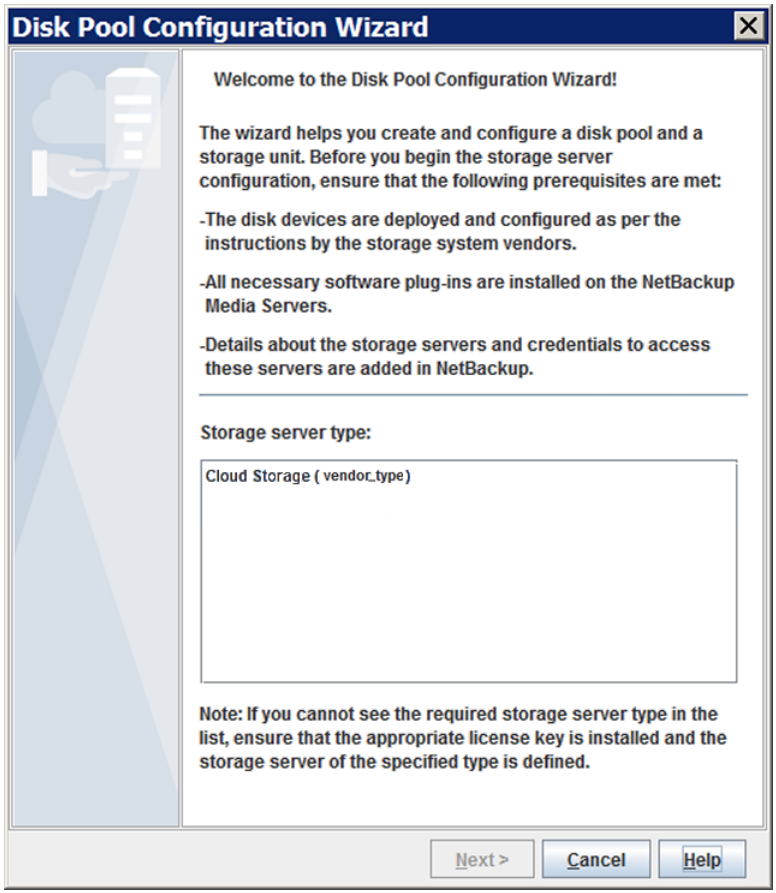
1. ［ディスクプールの構成ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)］が［ストレージサーバーの構成ウィザード (Storage Server Configuration Wizard)］から起動された場合は、手順 5 に進みます。

   それ以外の場合は、NetBackup 管理コンソールで、［NetBackup の管理 (NetBackup Management)］または［メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)］を選択します。

2. 右ペインのウィザードのリストで、［ディスクプールの構成 (Configure Disk Pool)］をクリックします。

3 ［ようこそ (Welcome)］パネルで構成できるディスクプールの形式は使用環境のストレージサーバーの形式によって決まります。

ウィザードパネルの例を次に示します。

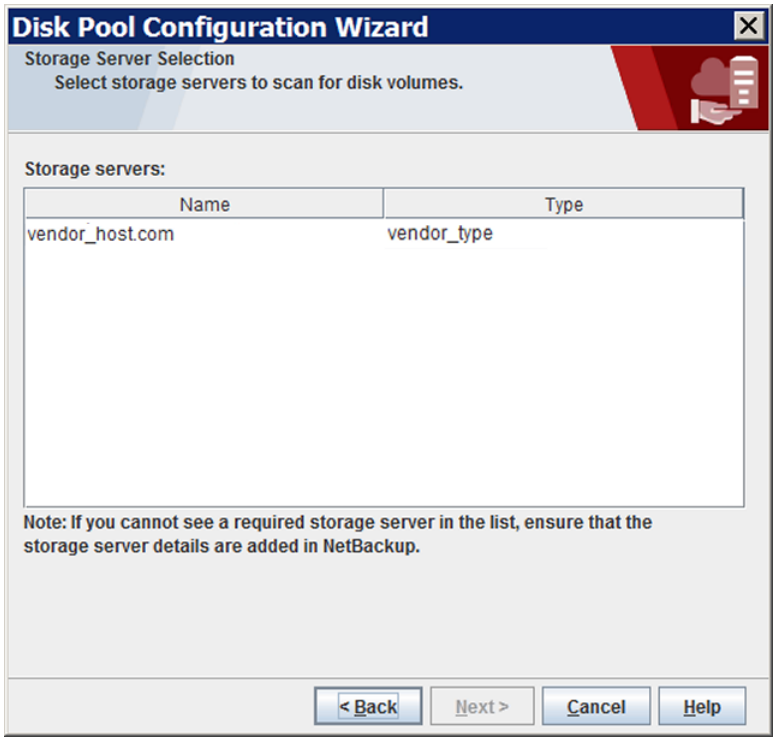


ウィザードの［ようこそ (Welcome)］パネルの情報を読みます。次に、適切なストレージサーバー形式を選択し、［次へ (Next)］をクリックます。

［ストレージサーバーの選択 (Storage Server Selection)］パネルが表示されます。

4 ［ストレージサーバーの選択 (Storage Server Selection)］パネルで、選択したストレージサーバー形式として構成されたストレージサーバーが表示されます。

ウィザードパネルの例を次に示します。



このディスクプールのストレージサーバーを選択します。

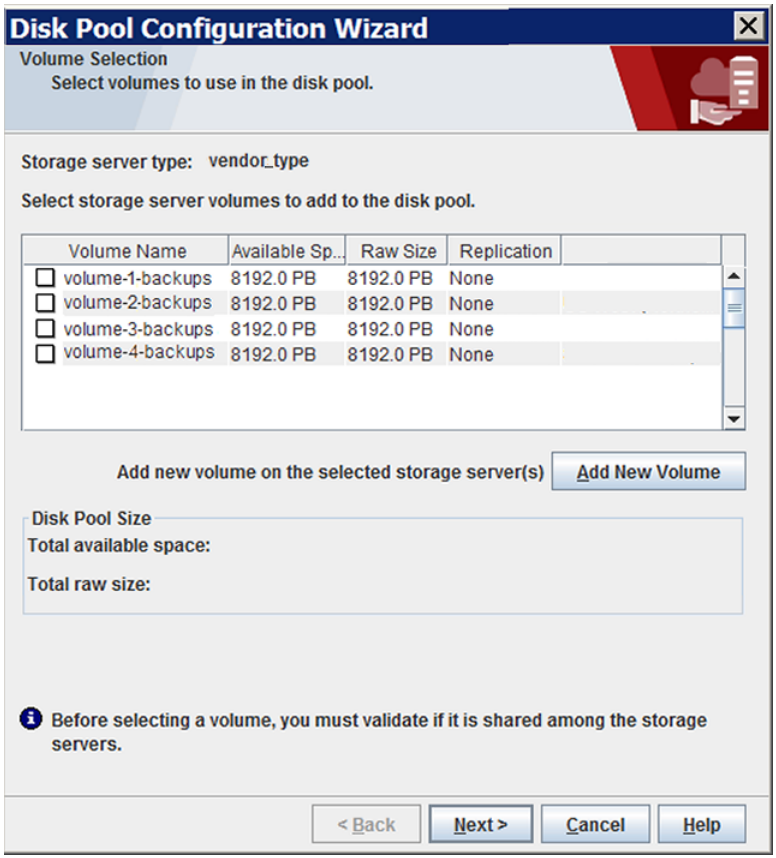
クラウドストレージサーバーを選択した後、［次へ (Next)］をクリックします。［ボリュームの選択 (Volume Selection)］ウィザードパネルが表示されます。

5 ［ボリュームの選択 (Volume Selection)］パネルには、ベンダーのクラウドストレージ内に自分のアカウントですでに作成したボリュームが表示されます。

メモ: 利用可能な合計領域 (Total available space)、合計最大物理容量 (Total raw size)、低水準点 (Low water mark)、高水準点 (High water mark) の各プロパティは、クラウドストレージディスクプールには適用されません。

これらすべての値はストレージ容量から導出され、クラウドプロバイダから取得することはできません。

ウィザードパネルの例を次に示します。



ボリュームを追加するには、［新しいボリュームの追加 (Add New Volume)］をクリックします。クラウドベンダーのボリュームに必要な情報を含むダイアログボックスが表

示されます。ダイアログボックスで必要な情報を入力します。次のリンクを使って、ボリューム名の要件に関する情報を検索します。

p.14 の「NetBackup のクラウドストレージベンダーについて」を参照してください。

ボリュームを選択するには、そのボリュームのチェックボックスにチェックマークを付けます。選択できるのは 1 つのボリュームだけです。

ディスクプールのボリュームを選択した後、[次へ (Next)]をクリックします。ウィザードの動作はストレージサーバーに暗号化を構成したかどうかによって、次のように異なります。

暗号化なし

暗号化を必要としないストレージの宛先のボリュームを選択した場合、[ディスクプールの追加情報 (Additional Disk Pool Information)]パネルが表示されます。

次の手順 (6) に進みます。

暗号化

暗号化を必要とするストレージの宛先のボリュームを選択した場合、暗号化パスフレーズを入力する必要がある[設定 (Settings)]ダイアログボックスが表示されます。パスフレーズは、このストレージボリュームとストレージサーバーの組み合わせに対するキーグループのキーに使用されます。

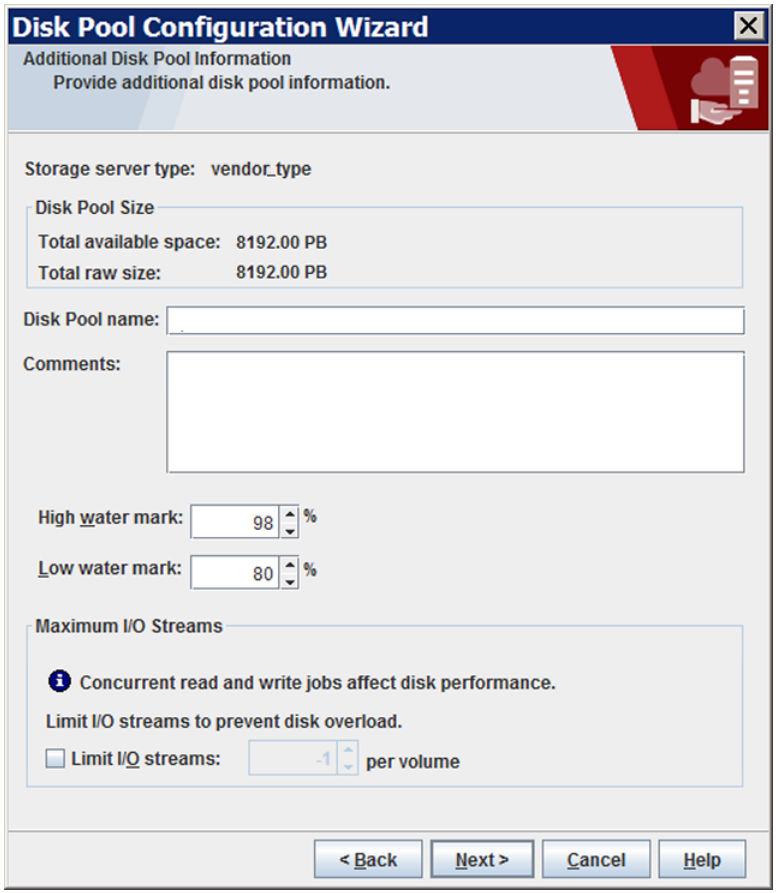
p.101 の「NetBackup クラウドストレージの暗号化のキー管理について」を参照してください。

パスフレーズを入力して[設定 (Settings)]ダイアログボックスの[OK]をクリックすると、ダイアログボックスが閉じます。[ボリュームの選択 (Volume Selection)]ウィザードパネルの[次へ (Next)]をクリックして、[ディスクプールの追加情報 (Additional Disk Pool Information)]ウィザードパネルに進みます。

次の手順 (6) に進みます。

6 ［ディスクプールの追加情報 (Additional Disk Pool Information)］パネルで、このディスクプールのプロパティを入力または選択します。

ウィザードパネルの例を次に示します。



p.153 の「クラウドストレージディスクプールのプロパティ」を参照してください。

ディスクプールの追加情報を入力したら、［次へ (Next)］をクリックします。［概略 (Summary)］パネルが表示されます。

7 ［概略 (Summary)］パネルで、選択内容を確認します。

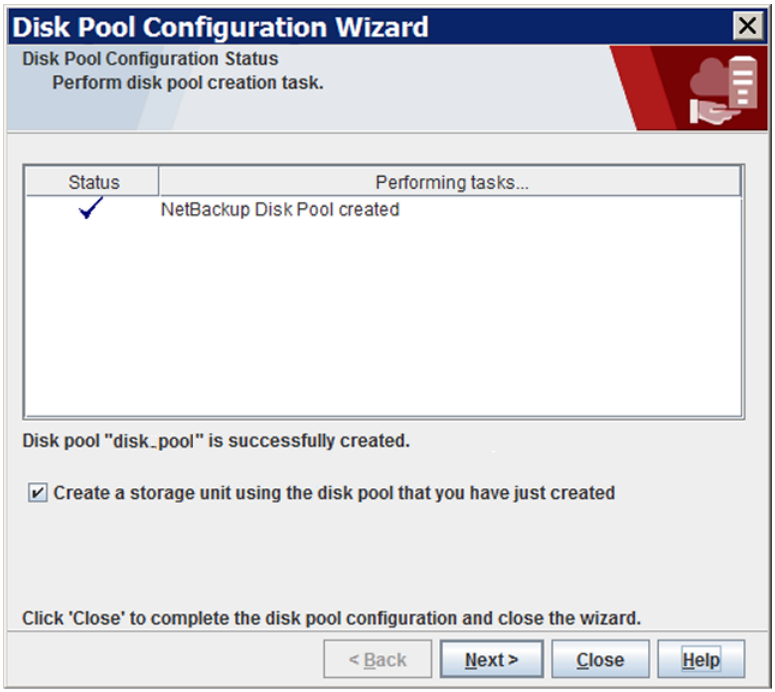
概略が選択内容を正確に示している場合は、［次へ (Next)］をクリックします。

Veritasは、KMS キーグループ名とKMS キー名を保存することを推奨します。これらの名前はキーのリカバリに必要です。

p.138 の「NetBackup クラウドストレージ暗号化の KMS キー名のレコードの保存」を参照してください。

8 NetBackup はディスクプールの作成が完了すると、処理が正常に完了したことを示すメッセージが表示されます。

ウィザードパネルの例を次に示します。



NetBackup でディスクプールが作成されると、以下のことができます。

ストレージユニットの構成　［作成したディスクプールを使用してストレージユニットを作成する (Create a storage unit using the disk pool that you have just created)］を選択していることを確認してから［次へ (Next)］をクリックします。［ストレージユニットの作成 (Storage Unit Creation)］ウィザードパネルが表示されます。次の手順に進みます。

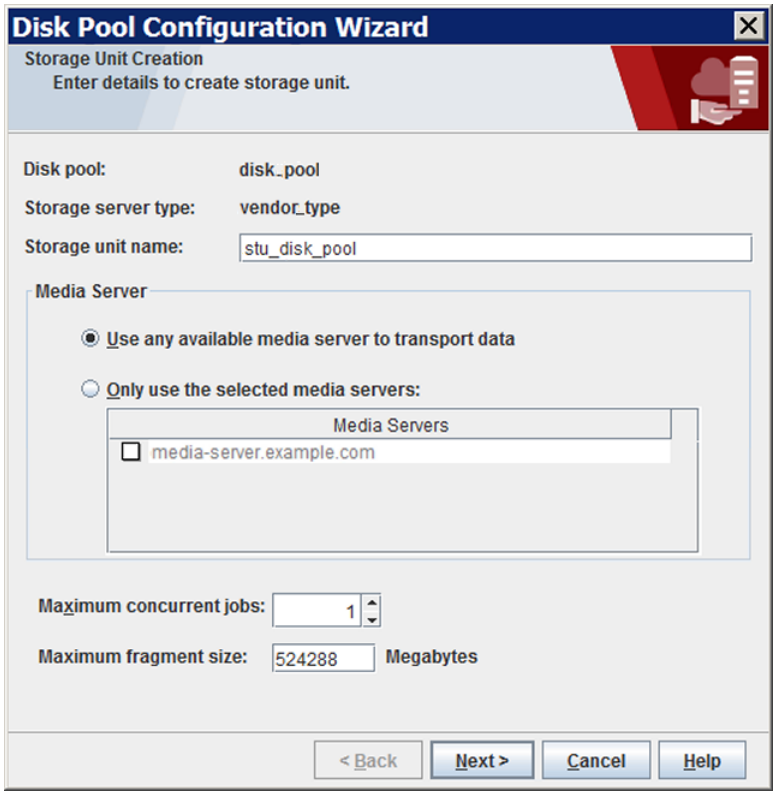
終了 (Exit)　［閉じる (Close)］をクリックします。

後から 1 つ以上のストレージユニットを構成できます。

p.142 の「クラウドストレージ用のストレージユニットの構成」を参照してください。

9 ［ストレージユニットの作成 (Storage Unit Creation)］ウィザードパネルで、ストレージユニットに適切な情報を入力します。

ウィザードパネルの例を次に示します。



p.143 の「クラウドストレージユニットのプロパティ」を参照してください。

ストレージユニットの情報を入力または選択した後、［次へ (Next)］をクリックしてストレージユニットを作成します。

ストレージユニットのプロパティを使用して、バックアップトラフィックを制御できます。

p.145 の「クライアントとサーバーの最適比率の構成」を参照してください。

p.146 の「メディアサーバーへのバックアップ通信量の制御」を参照してください。

10 ストレージユニットの構成が完了すると、［完了 (Finished)］パネルが表示されます。［完了 (Finish)］をクリックしてウィザードを終了します。

NetBackup クラウドストレージ暗号化の KMS キー名のレコードの保存

Veritasでは、暗号化キー名とキータグのレコードを保存するようお勧めしています。キーをリカバリしたり再作成する必要がある場合は、キータグが必要です。

p.101 の「クラウドストレージのデータ暗号化について」を参照してください。

キー名のレコードを保存する方法

1. キーグループ名を特定するには、マスターサーバー上で次のコマンドを使用します。

   UNIX の場合: `/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/nbkmsutil -listkgs`

   Windows の場合: *install_path*¥Program Files¥Veritas¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbkmsutil.exe -listkgs

   次に出力例を示します。

```
Key Group Name        : CloudVendor.com:symc_backups_gold
Supported Cypher      : AES_256
Number of Keys        : 1
Has Active Key        : Yes
Creation Time         : Tues Oct 01 01:00:00 2013
Last Modification Time: Tues Oct 01 01:00:00 2013
Description           : CloudVendor.com:symc_backups_gold
```

2 キーグループごとに、グループに属するすべてのキーをファイルに書き込みます。マスターサーバー上でコマンドを実行します。コマンドの構文は次のとおりです。

UNIX の場合: `/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/nbkmsutil -listkeys -kgname key_group_name > filename.txt`

Windows の場合: `install_path¥Program Files¥Veritas¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbkmsutil.exe -listkeys -kgname key_group_name > filename.txt`

次に出力例を示します。

```
nbkmsutil.exe -listkeys -kgname CloudVendor.com:symc_backups_gold
> encrypt_keys_CloudVendor.com_symc_backups_gold.txt

Key Group Name        : CloudVendor.com:symc_backups_gold
Supported Cypher      : AES_256
Number of Keys        : 1
Has Active Key        : Yes
Creation Time         : Tues Jan 01 01:00:00 2013
Last Modification Time: Tues Jan 01 01:00:00 2013
Description           : Key group to protect cloud volume
FIPS Approved Key     : Yes

  Key Tag               : 532cf41cc8b3513a13c1c26b5128731e
                          5ca0b9b01e0689cc38ac2b7596bbae3c
  Key Name              : Encrypt_Key_April
  Current State         : Active
  Creation Time         : Tues Jan 01 01:02:00 2013
  Last Modification Time: Tues Jan 01 01:02:00 2013
  Description           : -
Number of Keys: 1
```

3 キーレコードの作成に使ったパスフレーズをファイルに含めます。

4 安全な場所にファイルを格納します。

クラウド環境へのバックアップメディアサーバーの追加

クラウド環境に追加のメディアサーバーを追加できます。追加のメディアサーバーによってバックアップのパフォーマンスの改善が助長されます。このようなサーバーはデータムーバーとして知られています。追加するメディアサーバーには、ストレージサーバーのクレデンシャルが割り当てられます。このクレデンシャルによって、データムーバーはストレージサーバーと通信します。

NetBackup メディアサーバーは、クラウドストレージの必要条件に適合する必要があります。

p.105 の「クラウドストレージの NetBackup メディアサーバーについて」を参照してください。

クラウド環境にバックアップメディアサーバーを追加するには

1. NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[クレデンシャル (Credentials)]>[ストレージサーバー (Storage Server)]を展開します。
2. クラウドストレージサーバーを選択します。
3. [編集 (Edit)]メニューで、[変更 (Change)]を選択します。
4. [ストレージサーバーの変更 (Change Storage Server)]ダイアログボックスで、[メディアサーバー (Media Servers)]タブを選択します。
5. クラウドのバックアップを有効にするメディアサーバー (1 台または複数) を選択します。チェックマークの付いているメディアサーバーはクラウドサーバーとして構成されています。
6. [OK]をクリックします。
7. AT&T や Rackspace クラウドプロバイダの場合は、以下を実行します。

   a. ストレージサーバーを構成したときに指定したメディアサーバーから、適切な構成ファイルをコピーします。ファイル名はストレージベンダーによって決まります。形式は次のとおりです。

      `libstspi`*`VendorName`*`.conf`

      このファイルは、オペレーティングシステムに応じて、次のディレクトリに存在します。

      - UNIX および Linux: `/usr/openv/netbackup/db/cloud/`
      - Windows: `install_path¥VERITAS¥NetBackup¥db¥cloud¥`

   b. 追加したメディアサーバーの適切なディレクトリに次のようにファイルを保存します。

      - UNIX および Linux: `/usr/openv/netbackup/db/cloud/`
      - Windows: `install_path¥VERITAS¥NetBackup¥db¥cloud¥`

注意: 新しいメディアサーバーに `libstspi`*`VendorName`*`.conf` をコピーしなかった場合は、このメディアサーバーを使おうとしたバックアップは失敗します。バックアップは NetBackup の状態コード 83 (メディアオープンエラー) で失敗します。

---

8. 必要に応じて、ディスクプール、ストレージユニット、およびポリシーを変更します。

クラウドストレージ用のストレージユニットの構成

ディスクプールを参照するストレージユニットを 1 つ以上作成します。

［ディスクプールの構成ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)］では、ストレージユニットを作成することができます。したがって、ディスクプールを作成するときに、ストレージユニットも作成できます。ディスクプールにストレージユニットが存在するかを判断するには、管理コンソールで［NetBackup の管理 (NetBackup Management)］>［ストレージ (Storage)］>［ストレージユニット (Storage Units)］ウィンドウを参照します。

ストレージユニットはディスクプールのプロパティを継承します。ストレージユニットがレプリケーションプロパティを継承する場合、プロパティによって、NetBackup ストレージライフサイクルポリシーに、ストレージユニットとディスクプールの意図されていた目的が通知されます。自動イメージレプリケーションはストレージライフサイクルポリシーを必要とします。

ストレージユニットのプロパティを使用して、バックアップトラフィックを制御できます。

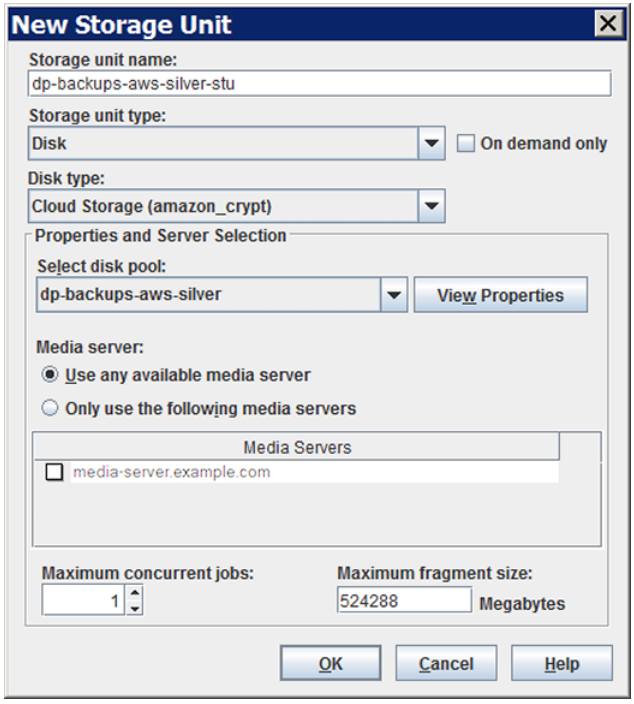
p.145 の「クライアントとサーバーの最適比率の構成」を参照してください。

p.146 の「メディアサーバーへのバックアップ通信量の制御」を参照してください。

［処理 **(Actions)**］メニューを使用してストレージユニットを構成する方法

1 NetBackup 管理コンソールで、［NetBackup の管理 (NetBackup Management)］>［ストレージ (Storage)］>［ストレージユニット (Storage Units)］を選択します。

2 ［処理 (Actions)］メニューから［新規 (New)］>［ストレージユニット (Storage Unit)］を選択します。



3 ［新しいストレージユニット (New Storage Unit)］ダイアログボックスのフィールドに入力します。

p.143 の「クラウドストレージユニットのプロパティ」を参照してください。

クラウドストレージユニットのプロパティ

クラウドディスクプールのストレージユニットの構成オプションは、次のとおりです。

表 **3-16** クラウドストレージユニットのプロパティ

プロパティ	説明
ストレージユニット名 (Storage unit name)	新しいストレージユニットの一意の名前。名前でストレージ形式を示すことができます。ストレージユニット名は、ポリシーおよびスケジュールでストレージユニットを指定する際に使用される名前です。ストレージユニット名は、作成後に変更できません。
ストレージユニット形式 (Storage unit type)	ストレージユニット形式として[ディスク (Disk)]を選択します。
ディスク形式 (Disk Type)	そのディスクタイプのクラウドストレージ (*type*) を選択します。*type*は、ストレージベンダー、暗号化などに基づくディスクプールの種類を表します。
ディスクプール (Disk Pool)	このストレージユニットのストレージが含まれているディスクプールを選択します。 指定された[ディスク形式 (Disk type)]のすべてのディスクプールが[ディスクプール (Disk Pool)]リストに表示されます。ディスクプールが構成されていない場合、ディスクプールはリストに表示されません。
メディアサーバー (Media server)	[メディアサーバー(Media server)]の設定で、クライアントのバックアップを作成してデータをクラウドストレージサーバーに移動できる NetBackup メディアサーバーを指定します。メディアサーバーはデータをリストアまたは複製操作用に移動できます。 次のようにメディアサーバーを指定します。 ■ メディアサーバーリスト内の任意のサーバーでデータを重複排除できるようにするには、[任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)]を選択します。 ■ データを重複排除するのに特定のメディアサーバーを使うには、[次のメディアサーバーのみを使用 (Only use the following media servers)]を選択します。その後、許可するメディアサーバーを選択します。 ポリシーの実行時に、使用するメディアサーバーが NetBackup によって選択されます。

プロパティ	説明
最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)	[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]設定によって、NetBackup がディスクストレージユニットに一度に送信できるジョブの最大数が指定されます。(デフォルトは 1 つのジョブです。ジョブ数は 0 から 256 の範囲で指定できます。) この設定は、Media Manager ストレージユニットの[最大並列書き込みドライブ数 (Maximum concurrent write drives)]設定に対応します。 ジョブは、ストレージユニットが利用可能になるまで NetBackup によってキューに投入します。3 つのバックアップジョブがスケジュールされている場合、[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]が 2 に設定されていると、NetBackup は最初の 2 つのジョブを開始し、3 つ目のジョブをキューに投入します。ジョブに複数のコピーが含まれる場合、各コピーが[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]の数にカウントされます。 [最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]は、バックアップジョブと複製ジョブの通信を制御しますが、リストアジョブの通信は制御しません。カウントは、サーバーごとにではなく、ストレージユニットのすべてのサーバーに適用されます。ストレージユニットの複数のメディアサーバーを選択し、[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]で 1 を選択すると、一度に 1 つのジョブのみが実行されます。 ここで設定する数は、利用可能なディスク領域、および複数のバックアップ処理を実行するサーバーの性能によって異なります。 **警告:** [最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]設定に 0 (ゼロ) を指定すると、ストレージユニットは無効になります。
最大フラグメントサイズ (Maximum fragment size)	通常のバックアップの場合、各バックアップイメージは、ファイルシステムが許容する最大ファイルサイズを超過しないように NetBackup によってフラグメントに分割されます。20 MB から 51200 MB までの値を入力できます。 FlashBackup ポリシーの場合、複製パフォーマンスを最適化するために、デフォルトの最大フラグメントサイズを使用することを Veritas が推奨します。

クライアントとサーバーの最適比率の構成

ストレージユニット設定を使って、クライアントとサーバーの最適比率を構成できます。1 つのディスクプールを使って、複数のストレージユニットでバックアップ通信量を分割するように構成できます。すべてのストレージユニットが同じディスクプールを使うので、ストレージをパーティション化する必要はありません。

たとえば、100 個の重要なクライアント、500 個の通常のクライアント、4 つのメディアサーバーが存在すると想定します。 最も重要なクライアントをバックアップするために 2 つのメディアサーバーを使って、通常のクライアントをバックアップするのに 2 つのメディアサーバーを使うことができます。

次の例では、クライアントとサーバーの比率を最適に構成する方法について記述します。

- NetBackup の重複排除のメディアサーバーを構成し、ストレージを構成します。
- ディスクプールを構成します。
- 最も重要なクライアントのストレージユニット (STU-GOLD など) を構成します。ディスクプールを選択します。[次のメディアサーバーのみを使用 (Only use the following media servers)]を選択します。重要なバックアップに使うメディアサーバーを 2 つ選択します。
- 100 個の重要なクライアント用のバックアップポリシーを作成し、STU-GOLD ストレージユニットを選択します。ストレージユニットで指定したメディアサーバーは、クライアントデータを重複排除ストレージサーバーに移動します。
- 別のストレージユニット (STU-SILVER など) を構成します。同じディスクプールを選択します。[次のメディアサーバーのみを使用 (Only use the following media servers)]を選択します。他の 2 つのメディアサーバーを選択します。
- 500 個の通常のクライアント用にバックアップポリシーを構成し、STU-SILVER ストレージユニットを選択します。ストレージユニットで指定したメディアサーバーは、クライアントデータを重複排除ストレージサーバーに移動します。

バックアップ通信は、ストレージユニット設定によって目的のデータムーバーにルーティングされます。

メモ: NetBackup は、書き込み動作 (バックアップと複製) でのメディアサーバーの選択に対してのみストレージユニットを使います。リストアの場合、NetBackup はディスクプールにアクセスできるすべてのメディアサーバーから選択します。

メディアサーバーへのバックアップ通信量の制御

ディスクプールのストレージユニットで[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]の設定を使用し、メディアサーバーへのバックアップ通信量を制御できます。同じディスクプールで複数のストレージユニットを使う場合、この設定によって、より高い負荷には特定のメディアサーバーが効率的に指定されます。並列実行ジョブの数が多いほど、数が少ない場合に比べて、ディスクはビジー状態になりやすくなります。

たとえば、2 つのストレージユニットが同じセットのメディアサーバーを使用しているとします。一方のストレージユニット (STU-GOLD) の[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]に、もう一方 (STU-SILVER) よりも大きい値が設定されています。[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]に大きい値が設定されているストレージユニットでは、より多くのクライアントバックアップを実行できます。

NetBackup アクセラレータバックアップと NetBackup 最適化合成バックアップについて

NetBackup クラウドストレージは NetBackup アクセラレータと NetBackup 最適化合成をサポートしています。NetBackup アクセラレータバックアップまたは NetBackup 最適化合成バックアップを有効にしたとき、暗号化、測定、スロットル調整は機能し、サポートされます。非クラウドバックアップと同様に NetBackup アクセラレータバックアップと NetBackup最適化合成バックアップの両方を有効にします。NetBackup アクセラレータバックアップとNetBackup 最適化合成バックアップに関する詳細情報が利用可能です。

- Veritas NetBackup&#; 重複排除ガイド
- Veritas NetBackup 管理者ガイド Vol. 1

これらのガイドは次の URL で利用可能です。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

NetBackup アクセラレータをクラウドストレージで有効にする

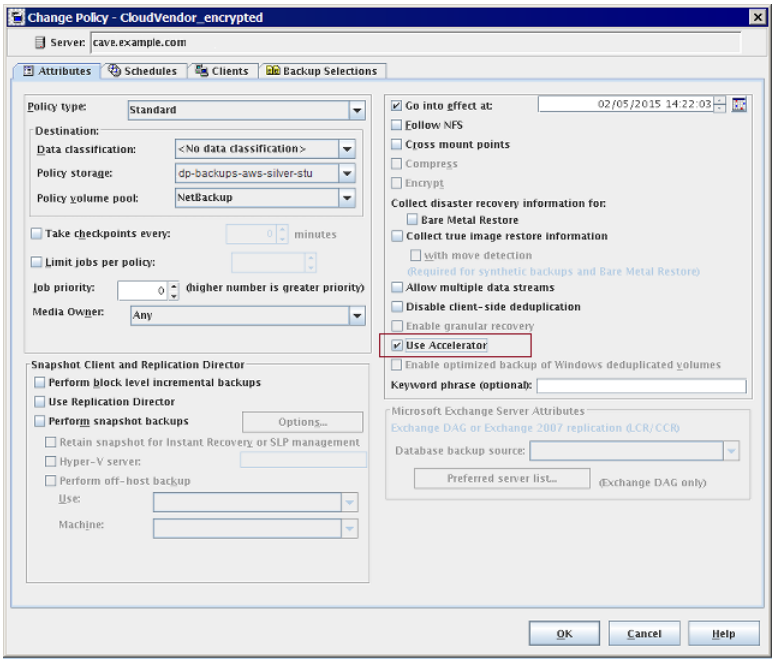
NetBackup クラウドストレージで使用するために NetBackup アクセラレータを有効化するには、以下の手順を使用します。

アクセラレータを NetBackup クラウドストレージで使用できるようにする

1. NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)] >[ポリシー (Policies)]> *ポリシー名*を選択します。[編集 (Edit)]>[変更 (Change)] を選択し、[属性 (Attributes)]タブを選択します。
2. [アクセラレータを使用する (Use accelerator)]を選択します。
3. [ポリシーストレージ (Policy storage)]オプションが有効なクラウドストレージユニットであることを確認します。

   [ポリシーストレージ (Policy storage)]で指定したストレージユニットはサポートされているいずれかのクラウドベンダーのユニットである必要があります。[ポリシーストレージ (Policy storage)]に[任意 (Any Available)]を設定することはできません。

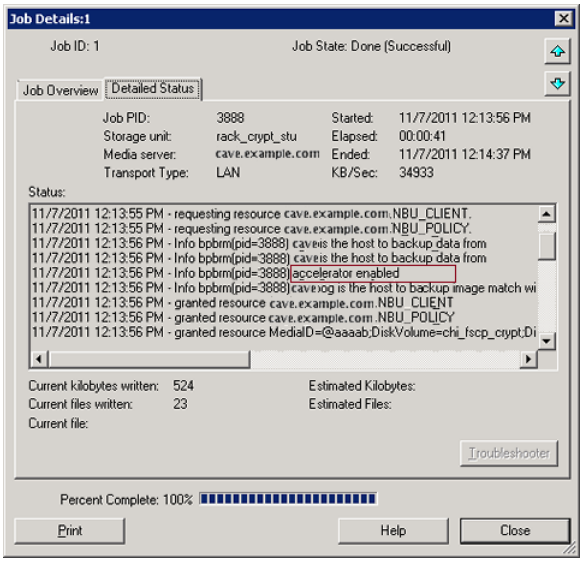
図 3-4　　アクセラレータを有効にする



NetBackup アクセラレータがバックアップ処理時に使用されたかどうかの判断

1. NetBackup 管理コンソールで、[アクティビティモニター (Activity Monitor)]を選択します。チェックするバックアップをダブルクリックします。
2. [状態の詳細 (Detailed Status)]タブをクリックします。
3. [accelerator enabled]の状態を確認します。この表示はバックアップで NetBackup アクセラレータが使用されたことを示します。

図 3-5　バックアップ時のアクセラレータの使用を確認する



最適化合成バックアップをクラウドストレージで有効にする

最適化合成バックアップには 3 つのバックアップスケジュールが必要です。完全バックアップ、増分バックアップ、合成バックアップを有効にした完全バックアップがなければなりません。増分バックアップでは差分増分か累積増分を使用できます。その後で完全バックアップを実行し、次は増分バックアップを少なくとも 1 回実行して、最後に合成を有効にした完全バックアップを実行する必要があります。最終的なバックアップは最適化合成バックアップです。

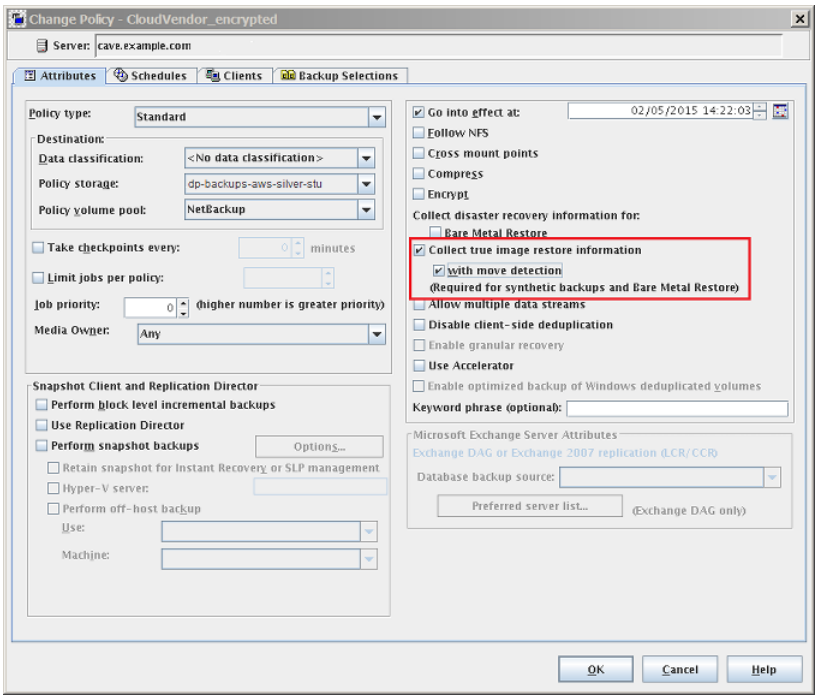
メモ: Hitachi クラウド構成の場合は、暗号化オプションを有効にしていると、True Image Restore（TIR）または合成バックアップが正常に機能しません。TIR または合成バックアップを正常に実行するには、日立社のクラウドポータルを通じて、バケット(または名前空間)のバージョン管理オプションを有効にする必要があります。バージョン管理オプションを有効にする方法について詳しくは、日立社のクラウドプロバイダに問い合わせてください。

NetBackup Cloud Storage で使用するために最適化合成バックアップを有効にする

1. NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)] >[ポリシー (Policies)]> *ポリシー名*を選択します。[編集 (Edit)]>[変更 (Change)] を選択し、[属性 (Attributes)]タブを選択します。
2. [True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)] の[移動検出を行う (with move detection)]を選択します。
3. [ポリシーストレージ (Policy storage)]オプションが有効なクラウドストレージユニットであることを確認します。

   [ポリシーストレージ (Policy storage)]で指定したストレージユニットはサポートされているいずれかのクラウドベンダーのユニットである必要があります。[ポリシーストレージ (Policy storage)]に[任意 (Any Available)]を設定することはできません。

図 **3-6** 最適化合成バックアップを有効にする



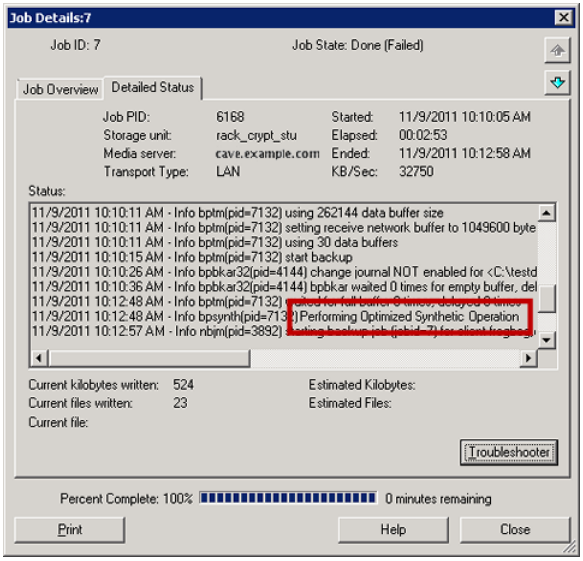
バックアップが最適化合成バックアップであったかどうかの判断

1 NetBackup 管理コンソールで、[アクティビティモニター (Activity Monitor)]を選択します。チェックするバックアップをダブルクリックします。

2 [状態の詳細 (Detailed Status)]タブをクリックします。

3 [Performing Optimized Synthetic Operation]の状態を確認します。この表示はバックアップが最適化合成バックアップだったことを示します。

図 3-7 バックアップが最適化合成であったことを確認する



バックアップポリシーの作成

バックアップポリシーを構成する最も簡単な方法は、ポリシーの構成ウィザードを使用することです。このウィザードではセットアップ処理の手順が示され、ほとんどの構成の最適な値が自動的に選択されます。

ポリシー構成オプションがすべてウィザードで表示されるわけではありません。たとえば、カレンダーを基準としたスケジュールと[データの分類 (Data classification)]の設定がこれに当たります。ポリシーが作成された後、[ポリシー (Policies)]ユーティリティのポリシーを修正して、ウィザードの一部ではないオプションを構成してください。

メモ: レプリケーションディレクタのポリシーを構成するために、ポリシーの構成ウィザードを使わないでください。

バックアップポリシーを作成するポリシー構成ウィザードの使用

ポリシーの構成ウィザードを使ってポリシーを作成するには、次の手順を実行します。

ポリシーの構成ウィザードを使用してバックアップポリシーを作成する方法

1. NetBackup 管理コンソールの左ペインで、NetBackup の管理をクリックします。
2. 右ペインで、[ポリシーの作成 (Create a Policy)] をクリックして、ポリシーの設定ウィザード を開始します。
3. ファイルシステム、データベース、アプリケーションを選択します。
4. [次へ (Next)] をクリックして、ウィザードを開始し、プロンプトに従います。

ウィザードの実行中にその詳細を確認するには、ウィザードパネルの [ヘルプ (Help)] をクリックします。

バックアップポリシーの構成ウィザードを使わないバックアップポリシーの作成

ポリシー構成ウィザードを使用しないで NetBackup 管理コンソールのバックアップポリシーを作成するには、次の手順を使ってください。

ポリシーの構成ウィザードを使用せずにポリシーを作成する方法

1. NetBackup 管理コンソール の左ペインで、[NetBackup の管理]> [ポリシー (Policies)] を展開します。
2. [処理 (Actions)]メニューで[新規 (New)]>[ポリシー (Policy)]をクリックします。
3. 新しいポリシー用の一意の名前を[新しいポリシーの追加 (Add a New Policy)]ダイアログボックスに入力します。
4. 必要に応じて、[ポリシーの構成ウィザードを使用する (Use Policy Configuration Wizard)]チェックボックスをオフにします。
5. [OK]をクリックします。
6. 新しいポリシーの属性、スケジュール、クライアントとバックアップ対象を構成します。

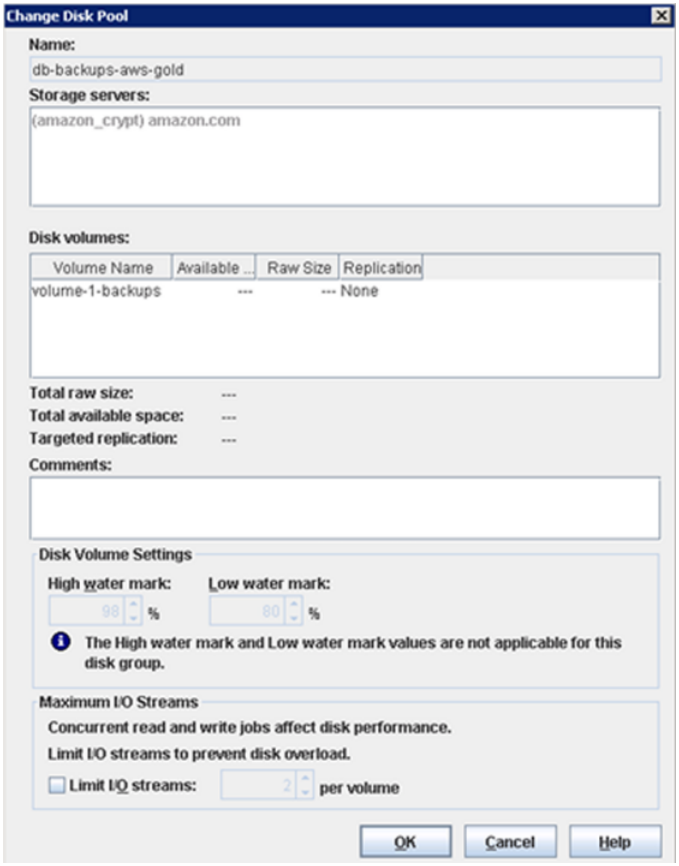
クラウドストレージディスクプールプロパティの変更

ディスクプールのプロパティの一部を変更できます。

ディスクプールのプロパティを変更する方法

1. NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]>[ディスクプール (Disk Pool)]を展開します。
2. 詳細ペインで、変更するディスクプールを選択します。

3 ［編集 (Edit)］メニューで、［変更 (Change)］を選択します。



4 必要に応じて他のプロパティを変更します。

p.153 の「クラウドストレージディスクプールのプロパティ」を参照してください。

5 ［OK］をクリックします。

クラウドストレージディスクプールのプロパティ

ディスクプールのプロパティはディスクプールの目的によって変更できます。

メモ: 利用可能な合計領域 (Total available space)、合計最大物理容量 (Total raw size)、使用可能サイズ (Usable Size)、低水準点 (Low water mark)、高水準点 (High water mark) の各プロパティは、クラウドストレージディスクプールには適用されません。

これらすべての値はストレージ容量から導出され、クラウドプロバイダから取得することはできません。

次の表に、使用可能なプロパティを示します。

表 3-17 クラウドストレージディスクプールのプロパティ

プロパティ	説明
名前	ディスクプールの名前。
ストレージサーバー	ストレージサーバーの名前。
ディスクボリューム (Disk volumes)	ディスクプールを構成するディスクボリューム。
合計最大物理容量 (Total raw size)	ディスクプールのストレージの raw (未フォーマット) サイズの合計。 ストレージのホストはストレージの最大物理容量を表示する場合としない場合があります。 **メモ:** 合計最大物理容量 (Total raw size) はクラウドストレージディスクプールには適用されません。
利用可能な合計領域 (Total available space)	ディスクプールで使用できる空き領域の合計。 **メモ:** 利用可能な合計領域 (Total available space) はクラウドストレージディスクプールには適用されません。
コメント (Comments)	ディスクプールに関連付けられているコメント。
高水準点 (High Water Mark)	[高水準点 (High water mark)] は、ボリュームまたはディスクプールが空きがないと見なされるしきい値です。 **メモ:** [高水準点 (High water mark)] は、クラウドストレージディスクプールには適用されません。
低水準点 (Low Water Mark)	[低水準点 (Low water mark)] は NetBackup がイメージのクリーンアップを停止するしきい値です。 [低水準点 (Low water mark)] は、クラウドストレージディスクプールには適用されません。

プロパティ	説明
I/O ストリーム数を制限 (Limit I/O streams)	ディスクプールの各ボリュームの読み書きストリーム (つまり、ジョブ) の数を制限するために選択します。ジョブはバックアップイメージを読み書きすることがあります。デフォルトでは、制限はありません。 制限に達すると、NetBackup は書き込み操作に別のボリュームを (利用可能であれば) 選択します。ボリュームが利用不能な場合、利用可能になるまで NetBackup はジョブをキューに登録します。 ストリームが多すぎると、ディスクスラッシングのためにパフォーマンスが低下することがあります。ディスクスラッシングとは、RAM とハードディスクドライブ間でデータが過度にスワップすることです。ストリームを少なくするとスループットを改善でき、一定の期間に完了するジョブ数を増やすことができます。 開始点で、ディスクプールのボリューム数別にすべてのストレージユニットの最大並列実行ジョブ数を分割します。
ボリュームごと (per volume)	ボリュームあたりの許可する読み書きストリームの数を選択または入力します。 多くの要因が最適なストリーム数に影響します。 要因はディスク速度、CPU の速度、メモリ容量などです。 [スナップショット (Snapshot)] 用に構成され、[レプリケーションソース (Replication source)] プロパティがあるディスクプールの場合: ■ この設定を変更する場合は、常に増分 2 を使用します。単一のレプリケーションジョブは 2 つの I/O ストリームを使います。 ■ ストリームより多くのレプリケーションジョブがある場合は、ストリームが利用可能になるまで NetBackup はジョブをキューに登録します。 ■ バッチ処理は、単一の NetBackup ジョブ内で多数のレプリケーションを引き起こす可能性があります。スナップショットレプリケーションジョブのバッチ処理に影響する設定もあります。

NetBackup クラウドの認証局 (CA) の管理

NetBackup クラウドは、.PEM (Privacy-enhanced Electronic Mail) 形式の X.509 証明書のみをサポートしています。

`cacert.pem` バンドルの認証局 (CA) の詳細は、次の場所にあります。

- Windows の場合: *install-path*¥NetBackup¥db¥cloud¥cacert.pem
- UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/db/cloud/cacert.pem

メモ: クラスタ配備では、NetBackup データベースパスは、アクティブノードからアクセス可能な共有ディスクを指します。

cacert.pem バンドルの CA を追加または削除できます。

変更を完了した後に、新しいバージョンの NetBackup にアップグレードすると、cacert.pem バンドルが新しいバンドルによって上書きされます。追加または削除したすべてのエントリが失われます。ベストプラクティスとして、編集した cacert.pem ファイルのローカルコピーを保管します。アップグレードされたファイルをローカルコピーを使用して上書きすることで、変更をリストアすることができます。

CA を追加するには

必要なクラウドプロバイダから CA 証明書を取得し、cacert.pem ファイルで CA 証明書を更新する必要があります。証明書は .PEM 形式である必要があります。

1. cacert.pem ファイルを開きます。
2. 自己署名 CA 証明書を、cacert.pem ファイルの先頭または末尾の新しい行に追加します。

   次の情報ブロックを追加します。

   ```
   Certificate Authority Name
   ==========================
   -----BEGIN CERTIFICATE-----
   <Certificate content>
   -----END CERTIFICATE-----
   ```

3. ファイルを保存します。

CA を削除するには

cacert.pem ファイルから CA を削除する前に、関連する証明書を使用しているクラウドジョブがないことを確認します。

1. cacert.pem ファイルを開きます。
2. 目的の CA を削除します。次の情報ブロックを削除します。

```
Certificate Authority Name

==========================

-----BEGIN CERTIFICATE-----

<Certificate content>

-----END CERTIFICATE-----
```

3. ファイルを保存します。

NetBackup によって承認されている CA のリスト

- Baltimore CyberTrust Root
- Cybertrust Global Root
- DigiCert Assured ID Root CA
- DigiCert Assured ID Root G2
- DigiCert Assured ID Root G3
- DigiCert Global Root CA
- DigiCert Global Root G2
- DigiCert Global Root G3
- DigiCert High Assurance EV Root CA
- DigiCert Trusted Root G4
- GeoTrust Global CA
- GeoTrust Global CA 2
- GeoTrust Primary Certification Authority
- GeoTrust Primary Certification Authority - G2
- GeoTrust Primary Certification Authority - G3
- GeoTrust Universal CA
- GeoTrust Universal CA 2
- RSA Security 2048 v3
- Starfield Services Root Certificate Authority - G2
- Thawte Primary Root CA

- Thawte Primary Root CA - G2
- Thawte Primary Root CA - G3
- VeriSign Class 1 Public Primary Certification Authority - G3
- VeriSign Class 2 Public Primary Certification Authority - G3
- Verisign Class 3 Public Primary Certification Authority - G3
- VeriSign Class 3 Public Primary Certification Authority - G4
- VeriSign Class 3 Public Primary Certification Authority - G5
- VeriSign Universal Root Certification Authority

4

監視とレポート

この章では以下の項目について説明しています。

- クラウドバックアップの監視とレポートについて
- クラウドストレージジョブの詳細表示
- 圧縮率の表示
- NetBackup クラウドストレージのディスクレポートの表示
- クラウドストレージ暗号化用の KMS キー情報の表示

クラウドバックアップの監視とレポートについて

ベリタスでは、NetBackup クラウドストレージとクラウドストレージアクティビティを監視し、レポートするためのいくつかの方法について説明します。

NetBackup OpsCenter

NetBackup OpsCenter では、NetBackup クラウドストレージアクティビティに関する最も詳細なレポートが提供されます。クラウドの監視とレポートについて詳しくは『NetBackup OpsCenter 管理者ガイド』を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

OpsCenter は、CloudStore Service Container に接続できない場合、レポートに必要なデータを取得できません。したがって、クラウドストレージを使うには、CloudStore Service Container が NetBackup メディアサーバーでアクティブな状態であることを確認してください。

メモ: Amazon がクラウドサービスプロバイダである場合、OpsCenter は MSDP クラウドストレージサーバーがクラウドにアップロードするデータをレポートできません。

p.178 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナへの接続が失敗する」を参照してください。

NetBackup 管理コンソールの[ディスクプール (Disk Pools)]ウィンドウ	[ディスクプール (Disk Pools)]ウィンドウには、NetBackup がディスクプールをポーリングしたときに保存された値が表示されます。NetBackup は 5 分ごとにディスクプールをポーリングします。 このウィンドウを表示するには、NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]>[ディスクプール (Disk Pools)]を選択します。 **メモ:** NetBackup 管理コンソールでは、[使用済み領域 (Used Capacity)]と[利用可能な領域 (Available Space)]に表示される情報は不正確です。ディスクプールにデータがあっても、[使用済み領域 (Used Capacity)]に表示される値は 0 になります。[利用可能な領域 (Available Space)]の値には最大量が表示されます。正確な使用情報については、プロバイダの Web サイトの情報を確認する必要があります。 **メモ:** Amazon の[使用済み領域 (Used Capacity)]および[利用可能な領域 (Available Space)]に表示される情報は、NetBackup 管理コンソールでは不正確です。これらの値は、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]>[ディスクプール (Disk Pool)]の下にあります。ディスクプールに情報があっても、[使用済み領域 (Used Capacity)]に表示される値は 0 になります。[利用可能な領域 (Available Space)]の値には最大量が表示されます。正確な使用情報については、プロバイダの Web サイトの情報を確認する必要があります。
NetBackup ディスクレポート	p.161 の「NetBackup クラウドストレージのディスクレポートの表示」を参照してください。

クラウドストレージジョブの詳細表示

ジョブの詳細を表示するには、NetBackup のアクティビティモニターを使用します。

クラウドストレージジョブの詳細を表示する方法

1. NetBackup 管理コンソールで、[アクティビティモニター (Activity Monitor)]をクリックします。
2. [ジョブ (Jobs)]タブをクリックします。
3. 特定のジョブの詳細を表示するには、[ジョブ (Jobs)]タブペインに表示されているジョブをダブルクリックします。
4. [ジョブの詳細 (Job Details)]ダイアログボックスで、[状態の詳細 (Detailed Status)]タブをクリックします。

圧縮率の表示

bptm ログには、クラウドストレージでバックアップを作成した後のデータ圧縮率の情報が含まれています。圧縮率は元々のサイズを圧縮後のサイズで除算して算出されます。たとえば、元々のサイズが 15302918144 バイトで、圧縮後が 7651459072 である場合、圧縮率は 2.00 になります。

圧縮率を表示するには

1 バックアップジョブの bptm PID をメモします。

p.160 の「クラウドストレージジョブの詳細表示」を参照してください。

2 `bptm.log` ファイルを開きます。ログファイルは次のディレクトリにあります。

UNIX	`/usr/openv/netbackup/logs/`
Windows	*install_path*¥NetBackup¥logs¥

3 bptm PID インスタンスを検索します。

次の行に、イメージ形式に基づいた圧縮率情報が示されます。

```
date:time <PID> <4> 35:bptm:<PID>:
media_server_IP: compress: image image_name_C1_F1
compressed from data in bytes to data in bytes bytes,
compression ratio ratio_value
```

```
date:time <PID> <4> 35:bptm:<PID>:
media_server_IP: compress: image image_name_C1_HDR
compressed from data in bytes to data in bytes bytes,
compression ratio ratio_value
```

NetBackup クラウドストレージのディスクレポートの表示

NetBackup のディスクレポートには、ディスクプール、ディスクストレージユニット、ディスクのログ、ディスクメディアに格納されているイメージについての情報が含まれています。

表 4-1 では、利用可能なディスクレポートについて説明します。

表 4-1 ディスクレポート

レポート	説明
ディスク上のイメージ (Images on Disk)	[ディスク上のイメージ (Images on Disk)]レポートでは、メディアサーバーに接続されているディスクストレージユニットに存在するイメージリストが生成されます。このレポートは[メディア上のイメージ (Images on Media)]レポートの一部であり、ディスク固有の列のみが示されます。 このレポートは、ストレージユニットの内容の概略を示します。ディスクに問題が発生した場合、またはメディアサーバーがクラッシュした場合にこのレポートを使用すると、消失したデータを把握できます。
ディスクのログ (Disk Logs)	[ディスクのログ (Disk Logs)]レポートには、NetBackup のエラーカタログに記録されているメディアのエラーメッセージまたは情報メッセージが表示されます。このレポートは[メディアのログ (Media Logs)]レポートの一部であり、ディスク固有の列のみが示されます。
ディスクストレージユニットの状態 (Disk Storage Unit Status)	[ディスクストレージユニットの状態 (Disk Storage Unit Status)]レポートには、NetBackup の現在の構成におけるディスクストレージユニットの状態が表示されます。 複数のストレージユニットが同じディスクプールを指している場合があります。レポートの問い合わせがストレージユニットごとに行われる場合、レポートでは、ディスクプールストレージの容量が複数回カウントされます。
ディスクプールの状態 (Disk Pool Status)	[ディスクプールの状態 (Disk Pool Status)]レポートには、ディスクプールのストレージユニットの状態が表示されます。このレポートは、NetBackup ディスク機能を有効にするライセンスがインストールされている場合にのみ表示されます。

p.159 の「クラウドバックアップの監視とレポートについて」を参照してください。

ディスクレポートを表示する方法

1. NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]>[レポート (Reports)]>[ディスクのレポート (Disk Reports)]を展開します。
2. ディスクレポートの名前を選択します。
3. 右ペインで、レポートの設定を選択します。
4. [レポートの実行 (Run Report)]をクリックします。

クラウドストレージ暗号化用の KMS キー情報の表示

キーグループとキーレコードについての以下の情報をリストするために nbkmsutil コマンドを使うことができます。

キーグループ	「KMS キーグループ情報を表示する方法」を参照してください。
キー	「KMS キー情報を表示する方法」を参照してください。

メモ: ベリタス社ではレコードキー情報を保管することを推奨します。キーをリカバリする必要がある場合、出力に表示されるキータグが必要です。

KMS キーグループ情報を表示する方法

◆ すべてのキーグループをリストするには、-listkgs オプションを指定して nbkmsutil を使います。コマンド形式は次のとおりです。

UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/bin/admincmd/nbkmsutil -listkgs

Windows の場合:
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbkmsutil -listkgs

UNIX ホストストレージ上の出力の例は次のとおりです。Windows では、ボリューム名は使用されません。

```
nbkmsutil -listkgs

Key Group Name         : CloudStorageVendor.com:symc_volume_for_backups
Supported Cypher       : AES_256
Number of Keys         : 1
Has Active Key         : Yes
Creation Time          : Tues Jan 01 01:00:00 2013
Last Modification Time: Tues Jan 01 01:00:00 2013
Description            : -
```

KMS キー情報を表示する方法

◆ キーグループ名に属するすべてのキーをリストするには、-listkgs と -kgname オプションを指定して nbkmsutil を使います。コマンド形式は次のとおりです。

UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/bin/admincmd/nbkmsutil -listkeys -kgname AdvDiskServer1example.com:AdvDisk_Volume

Windows の場合: *install_path*¥Veritas¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbkmsutil -listkeys -kgname AdvDiskServer1example.com:

UNIX ホストストレージ上の出力の例は次のとおりです。Windows では、ボリューム名は使用されません。

```
nbkmsutil -listkeys -kgname CloudStorageVendor.com:symc_volume_for_backup

Key Group Name        : CloudStorageVendor.com:symc_volume_for_backups
Supported Cypher      : AES_256
Number of Keys        : 1
Has Active Key        : Yes
Creation Time         : Tues Jan 01 01:00:00 2013
Last Modification Time: Tues Jan 01 01:00:00 2013
Description           : -

  Key Tag      : 532cf41cc8b3513a13c1c26b5128731e5ca0b9b01e0689cc38ac2b7596bbae3c
  Key Name              : Encrypt_Key_April
  Current State         : Active
  Creation Time         : Tues Jan 01 01:02:00 2013
  Last Modification Time: Tues Jan 01 01:02:00 2013
  Description           : -
```

5

操作上の注意事項

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup bpstsinfo コマンドの操作上の注意事項
- 追加のメディアサーバーを構成できない
- NetBackup アクセス制御が有効になっている場合、クラウドの構成が失敗することがある
- クラウドストレージサーバーのアーティファクトの削除

NetBackup bpstsinfo コマンドの操作上の注意事項

次の表に、NetBackup クラウドストレージで bpstsinfo コマンドを使用するための操作上の注意事項を示します。

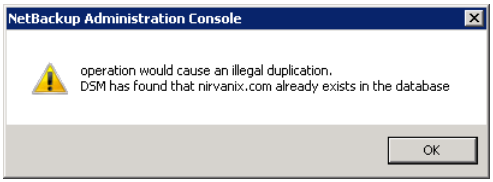
表 5-1 bpstsinfo **コマンドの操作上の注意事項**

備考	説明
-stype オプションか -storageserverprefix のいずれかを使用する	ストレージサーバー情報のリストを表示するには、bpstsinfo コマンドを制約する -stype オプションか -storageserverprefix オプションを使ってください。これらのオプションを使用しない場合、すべてのプロバイダが検索されるので、時間がかかり、タイムアウトになる場合もあります。
正しい -stype を指定する	情報を要求するプラグインは、戻される情報に影響します。従って、bpstsinfo コマンドで正しい -stype を使用する必要があります。-stype を確認するには、次のコマンドを使用します。 nbdevquery -liststs -storage_server *fq_host_name* ストレージが暗号化されている場合、-stype には _crypt 接尾辞が含まれます。

備考	説明
bpstsinfo コマンド出力に表示される暗号化されたストレージユニットと暗号化されていないストレージユニット	暗号化された論理ストレージユニット (LSU) の情報を表示する際に bpstsinfo コマンドを使用すると、出力には暗号化された LSU と暗号化されていない LSU の両方が表示されます (両タイプが存在する場合)。この出力が予測どおりの結果です。bpstsinfo コマンドはストレージのプラグインレベルで動作し、暗号化などの高レベルの詳細は考慮しません。 暗号化されたストレージを指定するコマンドの例を次に示します。 bpstsinfo -lsuinfo -storage_server amazon.com -stype amazon_crypt

追加のメディアサーバーを構成できない

第 1 のメディアサーバーと同じマスターサーバーを使う第 2 のメディアサーバーで[クラウドストレージサーバーの構成ウィザード (Cloud Storage Server Configuration Wizard)]を実行しようとすると、操作が失敗します。次のような**不正な複製**のエラーが表示されます。



ウィザードで実行できるオプションは、[キャンセル (Cancel)]または[戻る (Back)]をクリックすることだけです。[戻る (Back)]をクリックした場合、ウィザードを続行できる構成の変更はありません。

クラウド環境で複数のメディアサーバーを使う場合は、正しい手順を使う必要があります。詳細情報は別の項で利用可能です。

p.141 の「クラウド環境にバックアップメディアサーバーを追加するには」を参照してください。

NetBackup アクセス制御が有効になっている場合、クラウドの構成が失敗することがある

NetBackup アクセス制御を使う環境でクラウドストレージサーバーを構成しようとすると、次のようなエラーメッセージを受け取る場合があります。

[**キーグループでエラーが発生しました。キーがソケットに接続できません** (Error creating Key Group and Keys cannot connect on socket)]

NetBackup がこのエラーメッセージを生成するのは、NetBackup アクセス制御内でユーザーに十分な権限がないからです。クラウドストレージサーバーを構成するアカウントは、NBU_KMS 管理グループのメンバーでなければなりません。

NetBackup アクセス制御とアカウントのセットアップについて詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

クラウドストレージサーバーのアーティファクトの削除

ストレージサーバーを誤って削除すると、構成ファイルは孤立した状態でコンピュータに残ります。新しいストレージサーバーを作成しようとすると、ログインエラーを示すエラーメッセージが表示されて失敗します。ストレージサーバーを正しく削除するには、次の手順を実行します。

ストレージサーバーの削除

1. ストレージサーバーのすべてのイメージを期限切れにします。
2. ストレージユニットを削除します。
3. ディスクプールを削除します。
4. ストレージサーバーを削除します。
5. `.pref` ファイルを `db/cloud` ディレクトリから削除します。

6

トラブルシューティング

この章では以下の項目について説明しています。

- 統合ログについて
- レガシーログについて
- NetBackup クラウドストレージログファイル
- libcurl ログの有効化
- NetBackup 管理コンソールが開きません
- クラウドストレージの構成上の問題のトラブルシューティング
- クラウドストレージの操作上の問題のトラブルシューティング

統合ログについて

統合ログとレガシーログは NetBackup で使われるデバッグログの 2 つの形式です。NetBackup のすべてのプロセスは、これらのログの形式のいずれかを使います。サーバープロセスとクライアントプロセスは統合ログを使用します。

統合ログ機能は、ログファイル名およびメッセージを共通の形式で作成します。これらのログファイルは、テキストエディタで簡単に表示することができません。統合ログファイルは、バイナリ形式のファイルで、一部の情報が関連するリソースファイルに含まれています。`vxlogview` コマンドを使用した場合だけ、ログの情報を正しく収集して表示することができます。

レガシーログとは違って、統合ログではログ用のサブディレクトリを作成する必要はありません。オリジネータ ID のログファイルはログの構成ファイルで指定した名前のサブディレクトリに書き込まれます。すべての統合ログは次のディレクトリのサブディレクトリに書き込まれます。

Windows の場合	*install_path*¥NetBackup¥logs
UNIX の場合	/usr/openv/logs

[NetBackup 管理コンソール (NetBackup Administration Console)]でログを管理できます。左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]>[ホストプロパティ (Host Properties)]>[マスターサーバー (Master Servers)]または[メディアサーバー (Media Servers)]を展開します。変更するサーバーをダブルクリックします。ダイアログボックスの左ペインで、[ログ (Logging)]をクリックします。

また、次のコマンドの使用によって統合ログを管理できます。

vxlogcfg	統合ログ機能の構成設定を変更します。 vxlogcfg コマンドの詳細について。
vxlogmgr	統合ログをサポートする製品が生成するログファイルを管理します。 vxlogmgr コマンドの詳細について。
vxlogview	統合ログによって生成されたログを表示します。 p.170 の「vxlogview を使用した統合ログの表示の例」を参照してください。 vxlogview コマンドの詳細について。

これらのコマンドは次のディレクトリに存在します。

Windows の場合	*install_path*¥NetBackup¥bin
UNIX の場合	/usr/openv/netbackup/bin

これらのコマンドについて詳しくは『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

レガシーログの詳細情報を参照できます。

p.171 の「レガシーログについて」を参照してください。

vxlogview コマンドを使用した統合ログの表示について

vxlogview コマンドを使用すると、統合ログ機能で作成されたログを表示できます。これらのログは次のディレクトリに保存されます。

UNIX の場合	/usr/openv/logs
Windows の場合	*install_path*¥NetBackup¥logs

統合ログファイルは、レガシーログで書き込まれたファイルとは異なり、簡単にテキストエディタで表示することはできません。統合ログファイルは、バイナリ形式のファイルで、一部の情報は関連するリソースファイルに含まれています。vxlogview コマンドを使用した場合だけ、ログの情報を正しく収集して表示することができます。

NetBackup ログファイルと PBX ログファイルを表示するために vxlogview を使えます。

vxlogview コマンドを使って PBX のログを表示するには次のことを行います。

- 権限があるユーザーであることを確認します。UNIX と Linux の場合は、root 権限を持たなければなりません。Windows の場合は、管理者権限を持たなければなりません。
- PBX プロダクト ID を指定するには、vxlogview コマンドラインでパラメータとして -p 50936 を入力します。

vxlogview はすべてのファイルを検索するため、低速の処理になる場合があります。特定プロセスのファイルに検索を制限することによって結果をより速く表示する方法の例については、次のトピックを参照してください。

vxlogview を使用した統合ログの表示の例

次の例は、vxlogview コマンドを使って統合ログを表示する方法を示します。

表 6-1 vxlogview コマンドの使用例

項目	例
ログメッセージの全属性の表示	`vxlogview -p 51216 -d all`
ログメッセージの特定の属性の表示	NetBackup (51216) のログメッセージの日付、時間、メッセージの種類およびメッセージテキストだけを表示します。 `vxlogview --prodid 51216 --display D,T,m,x`
最新のログメッセージの表示	オリジネータ 116 (nbpem) によって 20 分以内に作成されたログメッセージを表示します。-o 116 の代わりに、-o nbpem を指定することもできます。 `# vxlogview -o 116 -t 00:20:00`

特定の期間からのログメッセージの表示	指定した期間内に nbpem で作成されたログメッセージを表示します。
	
	`# vxlogview -o nbpem -b "05/03/15 06:51:48 AM"`
	`  -e "05/03/15 06:52:48 AM"`

項目	例
より速い結果の表示	プロセスのオリジネータを指定するのに -i オプションを使うことができます。 `# vxlogview -i nbpem` vxlogview -i オプションは、指定したプロセス (nbpem) が作成するログファイルのみを検索します。検索するログファイルを制限することで、vxlogview の結果が速く戻されます。一方、vxlogview -o オプションでは、指定したプロセスによって記録されたメッセージのすべての統合ログファイルが検索されます。 **メモ:** サービスではないプロセスに -i オプションを使用すると、vxlogview によってメッセージ[ログファイルが見つかりません。(No log files found)]が戻されます。サービスではないプロセスには、ファイル名にオリジネータ ID がありません。この場合、-i オプションの代わりに -o オプションを使用します。 -i オプションはライブラリ (137、156、309 など) を含むそのプロセスの一部であるすべての OID のエントリを表示します。
ジョブ ID の検索	特定のジョブ ID のログを検索できます。 `# vxlogview -i nbpem | grep "jobid=job_ID"` jobid=という検索キーは、スペースを含めず、すべて小文字で入力します。 ジョブ ID の検索には、任意の vxlogview コマンドオプションを指定できます。この例では、-i オプションを使用してプロセスの名前 (nbpem) を指定しています。このコマンドはジョブ ID を含むログエントリのみを返します。jobid=*job_ID* を明示的に含まないジョブの関連エントリは欠落します。

vxlogview コマンドの詳細については、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。ガイドは次の URL から入手できます。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

レガシーログについて

レガシーログと統合ログは NetBackup で使われるデバッグログの 2 つの形式です NetBackup のすべてのプロセスは統合ログまたはレガシーログを使います。

p.168 の「統合ログについて」を参照してください。

レガシーデバッグログの場合、各プロセスが個別のログディレクトリにデバッグアクティビティのログファイルを作成します。NetBackup のレガシーデバッグログのディレクトリは次のディレクトリにあります。

Windows	*install_path*¥NetBackup¥logs *install_path*¥Volmgr¥debug
UNIX	/usr/openv/netbackup/logs /usr/openv/volmgr/debug

これらの最上位ディレクトリには、レガシーログを使用する NetBackup の各プロセスのディレクトリが含まれます。デフォルトでは、NetBackup は使用する可能性があるすべてのログディレクトリのサブセットのみを作成します。たとえば、デフォルトでは UNIX サーバーで次のディレクトリが作成されます。

- nbfp
- nbliveup
- nblogadm
- user_ops

レガシーログを使用するすべての NetBackup プロセスでログ記録を有効化するには、ログアシスタントを使用していない限り、ログファイルのディレクトリを新たに作成する必要があります。ログアシスタントについて詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。このガイドは、次の場所から入手できます。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

次のバッチファイルを使用して、すべてのデバッグログディレクトリを一度に作成することができます。

- Windows の場合: *install_path*¥NetBackup¥logs¥mklogdir.bat
- UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/logs/mklogdir

mklogdir コマンドについて詳しくは『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。このガイドは、次の場所から入手できます。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

ディレクトリが作成された後、NetBackup は各プロセスに関連付けられるディレクトリにログファイルを作成します。デバッグログファイルは、プロセスの起動時に作成されます。ログファイルがあるサイズに達すると、NetBackup プロセスはそのファイルを閉じて新しいログファイルを作成します。

NetBackup 状態収集デーモン(vmscd)でデバッグログを有効にするには、nbemm を起動する前に次のディレクトリを作成します。

Windows の場合　*install_path*¥Volmgr¥debug¥vmscd¥

UNIX の場合　/usr/openv/volmgr/debug/vmscd

または、ディレクトリの作成後に vmscd を再起動します。

クラウドストレージ用の NetBackup ログファイルディレクトリの作成

NetBackup の機能を構成する前に、NetBackup のコマンドがログファイルを書き込むディレクトリを作成します。マスターサーバーとご利用の機能で使う各メディアサーバーにディレクトリを作成します。ログファイルは次のディレクトリに存在します。

- UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/logs/
- Windows の場合: *install_path*¥NetBackup¥logs¥

NetBackup ログ記録について詳しくは、次の URL にある『NetBackup ログリファレンスガイド』を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

NetBackup のコマンドのログディレクトリを作成する方法

◆ オペレーティングシステムに応じて、次のスクリプトの 1 つを実行します。

UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/logs/mklogdir

Windows の場合: *install_path*¥NetBackup¥logs¥mklogdir.bat

tpconfig コマンドのログディレクトリを作成する方法

◆ オペレーティングシステムに応じて、debug ディレクトリと tpcommand ディレクトリを作成します (デフォルトでは、debug ディレクトリと tpcommand ディレクトリは存在しません)。ディレクトリのパス名は次のとおりです。

UNIX の場合: /usr/openv/volmgr/debug/tpcommand

Windows の場合: *install_path*¥Veritas¥Volmgr¥debug¥tpcommand

NetBackup クラウドストレージログファイル

NetBackup クラウドストレージは Veritas OpenStorage フレームワーク内に存在します。したがって、クラウドのアクティビティについては、OpenStorage と同じログファイルといくつかの追加のログファイルが使われます。

NetBackup の一部のコマンドまたは処理では、メッセージがそれぞれ固有のログファイルに書き込まれます。それらのコマンドやプロセス用に、ユーティリティがログメッセージを書き込むことができるようにログディレクトリが存在する必要があります。

他の処理では、Veritas Unified Log (VxUL) ファイルが使用されます。各プロセスに VxUL オリジネータ ID が付けられます。 VxUL のログファイルには、標準化された名前およびファイル形式が使用されます。VxUL のログファイルを表示するためには、NetBackup の `vxlogview` のコマンドを使ってください。

ログファイルの表示方法と管理方法についての詳細情報が利用可能です。次の『NetBackup ログリファレンスガイド』を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

次に、ログメッセージのコンポーネント識別子を示します。

- `sts_` 接頭辞はストレージの読み書きを行うプラグインとの通信に関連しています。
- クラウドストレージサーバーのプレフィックスはそのクラウドベンダーのストレージネットワークとの相互作用に関連しています。
- `encrypt` 接頭辞は暗号化プラグインとの通信に関連しています。
- `KMSCLIB` 接頭辞は NetBackup キーマネージメントサービスとの通信に関連しています。

ほとんどの通信は NetBackup メディアサーバーで発生します。したがって、ディスク操作に使うメディアサーバーのログファイルを最も参照することになります。

警告: ログレベルが高いほど、NetBackup のパフォーマンスに対する影響が大きくなります。ログレベル 5 (最も高い) を使うのは、ベリタス社の担当者から指示された場合だけにしてください。ログレベル 5 はトラブルシューティングにのみ使います。

NetBackup のログレベルは、NetBackup マスターサーバーの[ログ (Logging)]ホストプロパティで指定します。特定のオプションに固有の一部のプロセスについては、表 6-2 に示すように構成ファイルでログレベルを設定します。

ログの説明を表 6-2 に示します。

表 6-2 NetBackup のログクラウドストレージの場合

動作	OID	プロセス (Processes)
バックアップおよびリストア	N/A	次の処理のメッセージがログファイルに表示されます。 ■ `bpbrm`(Backup Restore Manager)。 ■ `bpdbm`(Database Manager)。 ■ `bpdm`(Disk Manager)。 ■ `bptm`(Tape Manager) の I/O 処理。 ログファイルは次のディレクトリに存在します。 ■ UNIX の場合: `/usr/openv/netbackup/logs/` ■ Windows の場合: *`install_path`*`¥NetBackup¥logs¥`

動作	OID	プロセス (Processes)
バックアップおよびリストア	117	nbjm(Job Manager)
イメージのクリーンアップ、検証、インポートおよび複製	N/A	bpdbm Database Manager のログファイル。 ログファイルは次のディレクトリに存在します。 ■ UNIX の場合: /usr/openv/netbackup/logs/bpdbm ■ Windows の場合:*install_path*¥NetBackup¥logs¥bpdbm
クラウドの接続操作	N/A	bpstsinfo ユーティリティはクラウドストレージサーバーへの接続についての情報をログファイルに書き込みます。
クラウドのアカウントの構成	222	クラウドストレージのアカウントを作成するプロセスは Remote Manager and Monitor Service です。RMMS はメディアサーバー上で動作します。
Cloud Storage Service Container	N/A	NetBackup Cloud Storage Service Container (nbcssc) では、次のディレクトリにログファイルが書き込まれます。 ■ Windows の場合: *install_path*¥Veritas¥NetBackup¥logs¥nbcssc ■ UNIX または Linux の場合: /usr/openv/netbackup/logs/nbcssc
クレデンシャルの構成	N/A	tpconfig ユーティリティ。tpconfig コマンドは tpcommand ディレクトリにログファイルを書き込みます。
デバイスの構成	111	nbemm の処理
デバイスの構成	178	Enterprise Media Manager (EMM) プロセスで実行される Disk Service Manager プロセス。
デバイスの構成	202	Remote Manager and Monitor Service で動作するストレージサーバーインターフェースの処理。RMMS はメディアサーバー上で動作します。
デバイスの構成	230	Remote Manager and Monitor Service で動作する Remote Disk Service Manager (RDSM) インターフェース。RMMS はメディアサーバー上で動作します。

p.184 の「クラウドストレージの操作上の問題のトラブルシューティング」を参照してください。

libcurl ログの有効化

cURL ログを有効にするには、ストレージサーバーのプロパティ *CLOUD_PREFIX*:LOG_CURL を YES に設定します。CLOUD_PREFIX の値は各ストレージプロバイダの接頭辞の値です。指定可能な値は、次のとおりです。

AMZ	Amazon
AMZGOV	Amazon GovCloud
ATT	AT&T
AZR	Microsoft Azure
CLD	Cloudian HyperStore
GOOG	Google Nearline
HT	日立
ORAC	Oracle クラウド
RACKS	Rackspace
SWSTK-SWIFT	SwiftStack (Swift)
VER	Verizon

たとえば、AT&T の LOG_CURL を有効にするには、ATT:LOG_CURL を YES に設定します。

p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。

NetBackup 管理コンソールが開きません

NetBackup CloudStore Service Container のデフォルトポートを変更すると、NetBackup 管理コンソールが開かないことがあります。2 カ所の値を変更する必要があります。

CloudStore Service Container 構成ファイル	CloudStore Service Container 構成ファイルは、次のディレクトリに存在します。
	■ UNIX の場合: `/usr/openv/java/cloudstorejava.conf`
	■ Windows の場合: *install_path*¥Veritas¥NetBackup¥bin¥cloudstorewin.conf
	次の例に、デフォルト値を示します。
	`[NBCSSC]`
	`NBCSSC_PORT=5637`

オペレーティングシステムの services ファイル	services ファイルは次の場所にあります。 ■ Windows の場合: `C:¥WINDOWS¥system32¥drivers¥etc¥services` ■ Linux の場合: `/etc/services`

CloudStore Service Container 構成ファイルの値を変更した場合、services ファイルの値も変更します。

デフォルトでは、NetBackup CloudStore Server Container のポートは 5637 です。

p.178 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナへの接続が失敗する」を参照してください。

クラウドストレージの構成上の問題のトラブルシューティング

構成の問題のトラブルシューティングでは、次の項の情報が役に立つ場合があります。

p.178 の「NetBackup の拡張性のあるストレージのホストプロパティを利用できない」を参照してください。

p.178 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナへの接続が失敗する」を参照してください。

p.180 の「クラウドストレージのディスクプールを作成できない」を参照してください。

p.180 の「クラウドストレージを作成できません」を参照してください。

p.176 の「NetBackup 管理コンソールが開きません」を参照してください。

p.181 の「クラウドストレージサーバーへのデータ転送が、SSL モードで失敗する」を参照してください。

p.182 の「Amazon GovCloud クラウドストレージの設定が非 SSL モードで失敗する」を参照してください。

p.182 の「Google Nearline ストレージからのデータリストアは失敗する場合がある」を参照してください。

p.183 の「認証バージョン V2 でのストレージ領域のフェッチの失敗」を参照してください。

NetBackup の拡張性のあるストレージのホストプロパティを利用できない

NetBackup CloudStore Service Container がアクティブでない場合は、[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)] のホストプロパティが利用不能になります。次の 2 つの現象のいずれかが起こる可能性があります。

- メディアサーバーの [拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)] プロパティが利用不能です。
- ポップアップのボックスに、[拡張性のあるストレージの設定を取得できません (Unable to fetch Scalable Storage settings)] のメッセージが表示される場合があります。

NetBackup CloudStore Service Container が非アクティブになっている原因を判断して、問題を解決し、次にサービスコンテナを開始します。

p.190 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナの起動とシャットダウンのトラブルシューティング」を参照してください。

p.190 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナの停止と起動」を参照してください。

NetBackup CloudStore サービスコンテナへの接続が失敗する

NetBackup クラウドストレージの `csconfig` 構成コマンドは、NetBackup CloudStore Service Container に対して接続を 3 回試み、各接続試行のタイムアウトは 60 秒です。NetBackup OpsCenter は、NetBackup CloudStore Service Container に接続して、レポート用のデータも取得します。

接続を確立することができない場合は、次の情報を確認してください。

- NetBackup CloudStore Service Container がアクティブある。
  p.190 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナの起動とシャットダウンのトラブルシューティング」を参照してください。
  p.190 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナの停止と起動」を参照してください。
- ファイアウォールが適切に設定されている。
-
- `cacert.pem` ファイルが、次の場所において NetBackup のマスターサーバー、メディアサーバーの両方に存在する。
  - UNIX/Linux の場合: `/usr/openv/var/webtruststore`

- Windows の場合: `<install_path>/var/webtruststore`

cacert.pem ファイルがマスターサーバーまたはメディアサーバーに存在しない場合は、ホストで nbcertcmd -getCACertificate コマンドを実行してください。このコマンドを実行した後、そのホストで NetBackup CloudStore サービスコンテナを再起動してください。
コマンドの詳細については、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

メモ: この cacert.pem ファイルに、NetBackup 認可サービスが生成する CA 証明書が含まれています。

- cacert.pem ファイルが NetBackup のマスターサーバーとメディアサーバーで同一のものである。
- セキュリティ証明書が次の場所に存在する。
  - UNIX/Linux の場合: /usr/openv/var/vxss/credentials
  - Windows の場合: `<install_path>/var/vxss/credentials`

  セキュリティ証明書が存在しない場合は、マスターサーバーで bpnbaz -ProvisionCert を実行してください。このコマンドを実行した後、マスターサーバーとメディアサーバーで NetBackup CloudStore サービスコンテナを再起動してください。
  p.97 の「ホスト名ベースの証明書の配備」を参照してください。
- NetBackup クラウドの構成をサポートしないオペレーティングシステム上でマスターサーバーを実行する場合は、メディアサーバー上の NetBackup CloudStore サービスコンテナをマスターサービスコンテナとして使用することを選択できます。これを行うには、すべてのクラウド対応メディアサーバー上の cloudstore.conf ファイルの CSSC_MASTER_NAME パラメータを、以前に選択したメディアサーバーの名前で更新します。ただし、他のメディアサーバーから nbcssc サービスのマスター構成として機能するメディアサーバーへの通信、およびその逆の通信は失敗します。このエラーは、両方のメディアサーバーが、信頼できるホストが通信の要求を行ったかどうかを検証するために発生します。

メモ: nbcssc サービスのマスター構成として機能するメディアサーバーは NetBackup マスターサーバーと同じ NetBackup バージョンを実行する必要があります。

NetBackup がクラウドストレージでサポートするオペレーティングシステムについては、NetBackup オペレーティングシステム互換性一覧を参照してください。次の URL から入手できます。
http://www.netbackup.com/compatibility

p.92 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナについて」を参照してください。
この問題を解決するには、クラウド構成をサポートしているメディアサーバーとマスターサーバーで認可されたホストエントリを追加します。
手順について詳しくは『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』の「サーバーリストへのサーバーの追加」の項を参照してください、

- メディアサーバーでは、証明書配備のセキュリティレベルが[最高 (Very High)]に設定されている場合、自動証明書配備が無効になります。すべての新しい証明書要求に認証トークンが必要になります。したがって、証明書を配備する前に認証トークンを作成する必要があります。
  詳しい手順については、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「認証トークンの作成」の項を参照してください。

クラウドストレージのディスクプールを作成できない

次の表では、NetBackup にディスクプールを作成できない場合に考えられる解決策を説明しています。

表 6-3 ディスクプールを作成できない場合のソリューション

エラー	説明
`The wizard is not able to obtain Storage Server information. Cannot connect on socket. (25)`	このエラーメッセージは[ディスクの構成ウィザード (Disk Configuration Wizard)]で表示されます。 クラウドベンダーホストへの[ディスクの構成ウィザード (Disk Configuration Wizard)]の問い合わせがタイムアウトしました。ネットワークが遅いか、または多数のオブジェクト (たとえば、Amazon S3 のバケット) がある可能性があります。 この問題を解決するためには、NetBackup `nbdevconfig` コマンドを使用してディスクプールを構成します。ウィザードとは異なり、`nbdevconfig` コマンドはコマンド応答時間を監視しません。 このコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。このガイドは、次の場所から入手できます。 http://www.veritas.com/docs/DOC5332

クラウドストレージを作成できません

NetBackup でクラウドストレージを作成できない場合は、次の点を確認してください。

- `cacert.pem` ファイルが、次の場所において NetBackup のマスターサーバー、メディアサーバーの両方に存在する。
  - UNIX/Linux の場合: `/usr/openv/var/webtruststore`
  - Windows の場合: `<install_path>/var/webtruststore`

cacert.pem ファイルが存在しない場合は、マスターサーバーで nbcertcmd -getCACertificate を実行してください。このコマンドを実行した後、NetBackup CloudStore サービスコンテナを再起動してください。
コマンドの詳細については、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

メモ: この cacert.pem ファイルは NetBackup 固有のファイルです。このファイルには、NetBackup 認可サービスによって生成された CA 証明書が含まれています。

- cacert.pem ファイルが NetBackup のマスターサーバーおよびメディアサーバーで同一のものである。
- マシンの証明書が次の場所に存在する。
  - UNIX/Linux の場合: /usr/openv/var/vxss/credentials
  - Windows の場合: <install_path>/var/vxss/credentials

  セキュリティ証明書が存在しない場合は、マスターサーバーで bpnbaz -ProvisionCert を実行してください。このコマンドを実行した後、マスターサーバーおよびメディアサーバーで NetBackup CloudStore サービスコンテナを再起動してください。
  p.97 の「ホスト名ベースの証明書の配備」を参照してください。
- NetBackup CloudStore サービスがアクティブである。
  p.190 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナの停止と起動」を参照してください。
- メディアサーバーがバージョン 8.0 以前の場合、NetBackup マスターサーバーで［8.0 以前のホストとの安全でない通信を有効にする (Enable insecure communication with 8.0 and earlier hosts)］オプションが選択されている。このオプションは、NetBackup 管理コンソールの［セキュリティ管理 (Security Management)］、［グローバルセキュリティ設定 (Global Security Settings)］、［安全な通信 (Secure Communication)］の順に選択したタブで利用できます。
- メディアサーバーでは、証明書配備のセキュリティレベルが［最高 (Very High)］に設定されている場合、自動証明書配備が無効になります。すべての新しい証明書要求に認証トークンが必要になります。したがって、証明書を配備する前に認証トークンを作成する必要があります。
  詳しい手順については、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「認証トークンの作成」の項を参照してください。

クラウドストレージサーバーへのデータ転送が、SSL モードで失敗する

NetBackup は、SSL モードでのクラウドストレージとの通信時に、認証局（CA）によって署名された証明書のみをサポートします。クラウドサーバー (パブリックまたはプライベー

ト) に CA による署名付き証明書があることを確認します。CA によって署名された証明書がない場合は、SSL モードでの NetBackup とクラウドプロバイダ間のデータ転送が失敗します。

Amazon GovCloud クラウドストレージの設定が非 SSL モードで失敗する

Amazon GovCloud クラウドプロバイダ (s3-fips-us-gov-west-1.amazonaws.com) の FIPS 領域では、セキュアモードの通信のみをサポートします。このため、FIPS 領域を持つ Amazon GovCloud クラウドストレージを設定するときに［SSL を使用する (Use SSL)］オプションを無効にすると、設定は失敗します。

SSL モードを再度有効にするには、`-us` パラメータ付きで `csconfig` コマンドを実行して、SSL の値を「2」に設定します。

これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。このガイドは、次の場所から入手できます。

http://www.veritas.com/docs/DOC5332

Google Nearline ストレージからのデータリストアは失敗する場合がある

Google Nearline ストレージからのデータリストアは、NetBackup の `READ_BUFFER_SIZE` が割り当て済み読み込みスループットより大きな値に設定されている場合、失敗する可能性があります。Google は、Google Nearline ストレージクラスに格納されているデータの総合サイズに基づいて読み取りスループットを割り当てます。

メモ: `READ_BUFFER_SIZE` のデフォルト値は 100 MB です。

Google Nearline からのデータのリストアが失敗した後、NetBackup bptm ログに次のエラーが記録されます。

```
HTTP status: 429, Retry type: RETRY_EXHAUSTED
```

Google では、場所別に Google Nearline ストレージクラスに格納される TB データ単位の読み取りスループットを 4 MB/s としています。Google が割り当てる読み取りスループットに合わせるには、NetBackup の READ_BUFFER_SIZE 値を変更する必要があります。

たとえば、Google Nearline ストレージクラスに格納したデータが 5 TB である場合、`READ_BUFFER_SIZE` 値は、割り当て済み読み取りスループットである 20 MB になるように変更する必要があります。

詳しくは、Google ガイドラインを参照してください。

https://cloud.google.com/storage/docs/nearline?hl=en

p.114 の「クラウドストレージサーバープロパティの変更」を参照してください。

p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。

フランクフルト地域でクラウドストレージ構成のバックアップが失敗することがある

NetBackup 7.7.1 以降のバージョンでは、フランクフルト地域を使ったクラウドストレージの構成をサポートしています。7.7.1 より前のバージョンの NetBackup メディアサーバーは、フランクフルト地域を使ったクラウドストレージの構成をサポートしていません。

クラウドバックアップは、次のシナリオで失敗することがあります。

NetBackup 7.7.1 より前のメディアサーバーでクラウドストレージサーバーを構成しました。既存のバケットを使ってフランクフルト地域でディスクプールを作成しました。

このようなクラウドバックアップのエラーを避けるには、フランクフルト地域を使ってクラウドストレージを構成する際に、クラウドメディアサーバーが NetBackup 7.7.1 以降のバージョンであることを確認します。

クラウド圧縮オプションを使うクラウドストレージ構成のバックアップが失敗することがある

NetBackup クラウドデータ圧縮オプションでは、クラウドストレージ構成に関連付けられているすべてのクラウドメディアサーバーが NetBackup 7.7.3 以降である必要があります。

クラウドバックアップは、次のようなクラウド圧縮のシナリオで失敗することがあります。

圧縮オプションを有効にし、互換性があるメディアサーバーを使って NetBackup 管理コンソールまたはコマンドラインインターフェースでクラウドストレージサーバーを構成しました。次に、コマンドラインインターフェースを使って同じクラウド構成に NetBackup 7.7.3 より古いバージョンのメディアサーバーを追加します。

このようなクラウドバックアップのエラーを避けるには、圧縮オプションがあるクラウドストレージ構成に追加するすべてのメディアサーバーが、NetBackup 7.7.3 以降のバージョンであることを確認します。

認証バージョン V2 でのストレージ領域のフェッチの失敗

認証バージョン V2 を使う場合に、ストレージ領域のフェッチがポップアップエラー `Unable to process request (228)` で失敗する場合は、次のトラブルシューティング手順を実行します。

`nbsl` および `nbcssc` サービスが起動して実行中であることを確認します。

nbcssc ログを有効にし、詳細度を最も高いレベルに設定します。領域のフェッチを再試行します。

p.94 の「NetBackup cloudstore.conf 設定ファイル」を参照してください。

問題が解決しない場合は、nbcssc ログで cURL エラーを検索します。cURL エラーコードにより、問題の根本原因を判断できます。

不正な構成シナリオの例を次に示します。

- cURL エラーで、無効な認証が問題の原因であると示されている場合は、identity API バージョン 2 のエンドポイント (v2.0/tokens) が認証に使われていることを確認します。
  たとえば、https://mycloud.xyz.com:5000 の代わりに http://mycloud.xyz.com.com:5000/v2.0/tokens が認証で使われている必要があります。
- cURL エラーで、CA 以外によって署名された証明書が問題の原因であると示されている場合、authentication と storage endpoint (これらが個別にホストされている場合) の cacert.pem に自己署名の証明書を追加します。

クラスタ環境でのインストール後に nbcssc サービスが起動しない

この問題は、クラスタ化されたマスターサーバーの非アクティブノードで証明書が利用できないために発生します。クラスタ化されたマスターサーバーのインストールが完了したら、非アクティブノードで証明書を生成する必要があります。

非アクティブノードで証明書を生成する手順については、『Veritas NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

クラウドストレージの操作上の問題のトラブルシューティング

操作上の問題のトラブルシューティングでは、次の項の情報が役に立つ場合があります。

p.178 の「NetBackup の拡張性のあるストレージのホストプロパティを利用できない」を参照してください。

p.185 の「クラウドストレージバックアップが失敗する」を参照してください。

p.190 の「nbcssc 処理の再起動によって、すべての cloudstore.conf の設定が元に戻される」を参照してください。

p.190 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナの起動とシャットダウンのトラブルシューティング」を参照してください。

p.176 の「NetBackup 管理コンソールが開きません」を参照してください。

クラウドストレージバックアップが失敗する

次のトピックを参照してください。

- 「アクセラレータバックアップの失敗」
- 「WRITE_BUFFER_SIZE を大きくした後にバックアップが失敗する」
- 「ストレージボリュームがクラウドベンダーインターフェースによって作成された」
- 「AIX メディアサーバーによる大きなファイルのバックアップ」
- 「NetBackup CloudStore Service Container が非アクティブ」
- 「[任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)]オプションが選択されているとバックアップが失敗することがあります。」
- 「エラーコード 83 またはエラーコード 2106 が表示され、クラウドバックアップとリストアの操作が失敗します。」
- 「証明書の問題のため、クラウドストレージのバックアップに失敗します。」
- 「Amazon S3 対応クラウドストレージへのバックアップジョブが状態コード 41 で失敗する」

アクセラレータバックアップの失敗

次のようなメッセージがジョブの詳細に表示されます。

```
Critical bptm(pid=28291) accelerator verification failed: backupid=
  host_name_1373526632, offset=3584, length=141976576, error=
  2060022, error message: software error
Critical bptm(pid=28291) image write failed: error 2060022: software

  error
Error bptm(pid=28291) cannot write image to disk, Invalid argument
end
  writing; write time: 0:02:31
Info bptm(pid=28291) EXITING with status 84
Info bpbkar(pid=6044) done. status: 84: media write error media write

  error(84)
```

このエラーは、複数のクラウドストレージサーバーがある環境で発生します。このエラーは、あるクラウドストレージサーバーに宛てられたクライアントの NetBackup アクセラレータのバックアップがその後に別のクラウドストレージサーバーに宛てられたことを示します。

クラウドストレージへのアクセラレータバックアップに対しては、次のことを確認します。

- 各クライアントを常に同じストレージサーバーにバックアップします。他のストレージサーバーが同じクラウドストレージベンダーのストレージである場合にもそうしてください。
- クライアントのバックアップに常に同じバックアップポリシーを使用し、ポリシーのストレージ宛先を変更しないでください。

WRITE_BUFFER_SIZE を大きくした後にバックアップが失敗する

クラウドのストレージサーバーの WRITE_BUFFER_SIZE プロパティがコンピュータの総スワップ領域を超えると、バックアップが状態 84 で失敗する場合があります。

この問題を解決するために、WRITE_BUFFER_SIZE のサイズをコンピュータの総スワップ領域より小さい値に調整します。

ストレージボリュームがクラウドベンダーインターフェースによって作成された

次のようなメッセージがジョブの詳細に表示されます。

```
Info bptm(pid=xxx) start backup
Critical bptm(pid=xxxx) image open failed: error 2060029:
authorization
  failure
Error bpbrm(pid=xxxx) from client gabby: ERR - Cannot write to STDOUT.
 E
  rrno  = 32: Broken pipe
Info bptm(pid=xxxx) EXITING with status 84
```

次のようなメッセージが bptm ログファイルに表示されます。

[container_name というコンテナが Veritas のコンテナではないか、またはタグデータエラーです。イメージの作成に失敗しました。(Container *container_name* is not Veritas container or tag data error, fail to create image.)] Please make sure that the LSU is created by means of NBU.

このエラーは、ボリュームがクラウドストレージベンダーのインターフェースを使って作成されたことを示します。

NetBackup の[ディスクプールの構成ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)]を使ってクラウドストレージのボリュームを作成する必要があります。ウィザードはボリュームに必要なパートナー ID を適用します。ベンダーのインターフェースを使ってコンテナを作成する場合、パートナー ID は適用されません。

問題を解決するには、クラウドストレージベンダーのインターフェースを使ってコンテナを削除します。NetBackup でディスクプールを削除し、[ディスクプールの構成ウィザード (Disk Pool Configuration Wizard)]を使ってディスクプールを再作成します。

p.160 の「クラウドストレージジョブの詳細表示」を参照してください。

p.173 の「NetBackup クラウドストレージログファイル」を参照してください。

AIX メディアサーバーによる大きなファイルのバックアップ

AIX メディアサーバーが大きなファイルをバックアップする場合、メモリの問題が発生する場合があります。これらのメモリの問題が原因で、バックアップが失敗する可能性があります。バックアップは NetBackup の状態コード 84 ([メディアの書き込みエラー (media write error)]) または NetBackup の状態コード 87 ([メディアのクローズエラー (media close error)]) で失敗します。この問題を解決するには、AIX の `ulimit` のサイズを無制限に変更します。`ulimit` の値を変更した後、必ず NetBackup サービスまたはデーモンを停止して、再起動してください。

次に例を示します。

```
ulimit -m unlimited

ulimit -d unlimited

ulimit -s unlimited
```

NetBackup CloudStore Service Container が非アクティブ

NetBackup CloudStore Service Container が非アクティブの場合は、バックアップをクラウドストレージに送信できません。

NetBackup では、NetBackup コマンドを使って NetBackup クラウドストレージを構成するときに、CloudStore Service Container がアクティブであるこかどうかが確認されません。したがって、このような状況で開始したバックアップは失敗します。

p.190 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナの起動とシャットダウンのトラブルシューティング」を参照してください。

[任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)]オプションが選択されているとバックアップが失敗することがあります。

クラウドストレージサーバーの構成中に、メディアサーバーとマスターサーバーが同じバージョンになっていることを確認する必要があります。

メモ: この制限は、既存のクラウドストレージサーバーには適用されません。

クラウドバックアップは、次のシナリオで失敗することがあります。

ストレージユニットの構成中に[任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)]を選択し、クラウドストレージの構成中に NetBackup がマスターサーバーのバージョンと異なるメディアサーバーのバージョンを使っている場合。

この問題を解決するには、次を実行します。

ストレージユニットの構成中に[次のメディアサーバーのみを使用 (Only use the following media servers)]を選択し、[メディアサーバー (Media Servers)]ペインで、マスターサーバーと同じバージョンのメディアサーバーを選択します。

エラーコード 83 またはエラーコード 2106 が表示され、クラウドバックアップとリストアの操作が失敗します。

次のいずれかの理由により、エラーコード 83 またはエラーコード 2106 が表示され、クラウドバックアップとリストアの操作が失敗する場合があります。

- メディアサーバーの日付と時刻の設定がずれています (GMT/UTC 時間と同期していません)。
- ストレージサーバーの指定されたクレデンシャルが正しくありません。

次の手順を実行します。

メディアサーバーの日付と時刻の設定を変更して、GMT/UTC 時間と同期するようにします。

ストレージサーバーのクレデンシャルを更新します。`tpconfig` コマンドを使用して、クレデンシャルを更新します。詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

証明書の問題のため、クラウドストレージのバックアップに失敗します。

証明書の問題のためにクラウドストレージのバックアップに失敗する場合、次のことを確認します。

- `cacert.pem` ファイルが、次の場所において NetBackup のマスターサーバー、メディアサーバーの両方に存在する。
  - UNIX/Linux の場合: `/usr/openv/var/webtruststore`
  - Windows の場合: `<install_path>/var/webtruststore`

  `cacert.pem` ファイルが存在しない場合は、マスターサーバーで `nbcertcmd -getCACertificate` を実行してください。このコマンドを実行した後、NetBackup CloudStore サービスコンテナを再起動してください。
  コマンドの詳細については、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

  メモ: この cacert.pem ファイルは NetBackup 固有のファイルです。このファイルには、NetBackup 認可サービスによって生成された CA 証明書が含まれています。

- `cacert.pem` ファイルが NetBackup のマスターサーバーおよびメディアサーバーで同一のものである。

- マシンの証明書が次の場所に存在すること。
  - UNIX/Linux の場合: `/usr/openv/var/vxss/credentials`
  - Windows の場合: `<install_path>/var/vxss/credentials`

  セキュリティ証明書が存在しない場合は、マスターサーバーで `bpnbaz -ProvisionCert` を実行してください。このコマンドを実行した後、マスターサーバーおよびメディアサーバーで NetBackup CloudStore サービスコンテナを再起動してください。

  p.97 の「ホスト名ベースの証明書の配備」を参照してください。
- NetBackup CloudStore サービスがアクティブである。

  p.190 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナの停止と起動」を参照してください。
-
- メディアサーバーでは、証明書配備のセキュリティレベルが[最高 (Very High)]に設定されている場合、自動証明書配備が無効になります。すべての新しい証明書要求に認証トークンが必要になります。したがって、証明書を配備する前に認証トークンを作成する必要があります。

  詳しい手順については、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「認証トークンの作成」の項を参照してください。

Amazon S3 対応クラウドストレージへのバックアップジョブが状態コード 41 で失敗する

NetBackup は利用可能な最大の帯域幅を使用し、相応の要求をプッシュしますが、Amazon S3 対応クラウドが多数の要求を処理できません。

クラウドベンダーは要求の速度を低下させる 503 エラーを返し、バックアップジョブは次のエラーで失敗します。

- メディアサーバーで `bptm` は次のログを記録します。

  ```
  bptm:4940:<media_server_name>: AmzResiliency:
  AmzResiliency::getRetryType cURL error: 0, multi cURL error: 0,
  HTTP status: 503, XML response: SlowDown, RetryType:
  RETRY_EXHAUSTED
  ```
- メディアサーバーで `bpbrm` は次のログを記録します。

  ```
  bpbrm Exit: client backup EXIT STATUS 41: network connection timed
  out
  ```

この問題は、NetBackup とクラウドストレージ間で高帯域幅が利用可能な場合にのみ発生します。

トラブルシューティングするには、次のいずれかを実行します。

- 帯域幅の調整を構成して要求の数を減らします。

p.121 の「NetBackup クラウドストレージサーバーの接続プロパティ」を参照してください。

- 読み取り/書き込みバッファの数を減らします。
  p.117 の「NetBackup クラウドストレージサーバー帯域幅スロットルのプロパティ」を参照してください。
- クラウドベンダーに問い合わせて並列要求の上限の数を増やします。これには追加のコストが発生する可能性があります。

NetBackup CloudStore サービスコンテナの停止と起動

NetBackup 管理コンソールを使って NetBackup CloudStore サービスコンテナ (nbcssc) サービスを停止、起動します。

p.92 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナについて」を参照してください。

p.190 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナの起動とシャットダウンのトラブルシューティング」を参照してください。

CloudStore サービスコンテナを起動または停止する方法

1. NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup 管理 (NetBackup Administration)] >[アクティビティモニター (Activity Monitor)]を展開します。
2. [デーモン (Daemons)]タブ (UNIX) または[サービス (Services)]タブ (Windows) をクリックします。
3. [詳細 (Details)]ペインで、nbcssc (UNIX、Linux) または[NetBackup CloudStore サービスコンテナ (NetBackup CloudStore Service Container)](Windows) を選択します。
4. [処理 (Actions)]メニューで、[選択されたデータベースの停止 (Stop Selected)]または[選択されたデータベースの起動 (Start Selected)](Windows) または[デーモンの停止 (Stop Daemon)]または[デーモンの起動 (Start Daemon)](UNIX) を選択します。

nbcssc 処理の再起動によって、すべての cloudstore.conf の設定が元に戻される

欠落エントリとコメントは、cloudstore.conf ファイルでは使用できません。cloudstore.conf ファイルの値を削除またはコメントアウトすると、nbcssc 処理の再起動によってすべての設定がデフォルトの値に戻ります。

NetBackup CloudStore サービスコンテナの起動とシャットダウンのトラブルシューティング

次のトピックを参照してください。

- 「プロビジョニングされていないセキュリティ証明書」
- 「サービスがアクティブなときにセキュリティモードが変更された」
- 「CloudStore サービスコンテナがクラスタ環境で起動に失敗する」

プロビジョニングされていないセキュリティ証明書

クラウドストレージに使う NetBackup メディアサーバーでは、プロビジョニングされたセキュリティ証明書が必要です。そうでない場合は、CloudStore Service Container は開始できません。証明書が存在することを確認します。

p.93 の「NetBackup CloudStore Service Container のセキュリティ証明書」を参照してください。

NetBackup 7.7 以降　証明書が存在しない場合は、NetBackup マスターサーバーから 1 つ作成します。

p.93 の「NetBackup CloudStore Service Container のセキュリティ証明書」を参照してください。

サービスがアクティブなときにセキュリティモードが変更された

サービスがアクティブの間に、NetBackup CloudStore サービスコンテナのセキュリティモードを変更しないでください。サービスがアクティブの間にセキュリティモードが変わると、サービスの起動またはシャットダウンで問題が発生する場合があります。開始時と同じモードでサービスを停止してください。

p.94 の「NetBackup CloudStore Service Container のセキュリティモード」を参照してください。

p.190 の「NetBackup CloudStore サービスコンテナの停止と起動」を参照してください。

CloudStore サービスコンテナがクラスタ環境で起動に失敗する

NetBackup マスターサーバーがクラスタ環境内にある場合は、nbcssc の必要な証明書がパッシブノードに自動的に配備されません。このため、nbcssc サービスがアクティブノードのフェールオーバー時に起動しません。このシナリオは、NetBackup のプッシュインストール後に新しいノードを追加した場合に、主に UNIX クラスタ環境または Microsoft Windows Server フェールオーバークラスタ (WSFC) のセットアップで発生します。

フェールオーバーの前に、次の手順を実行します。

1. マスターサーバークラスタのアクティブノードで次のコマンドを実行します。

   Windows の場合: `Install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpnbaz -setupat`

   UNIX の場合: `/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/bpnbaz -setupat`

   コマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

2. マスターサーバーのアクティブノードですべてのサービスを再起動します。

GLACIER リストアジョブのキャンセル後に bptm プロセスの終了に時間がかかる

GLACIER にあるイメージのリストアジョブをキャンセルした後で、UNIX メディアサーバーで Amazon GLACIER をリストアすると、bptm プロセスが終了するのに約 4 時間かかります。

回避策

プロセスを手動で強制終了する必要があります。

索引

記号

インデックスマーカーを 1 つ以上追加する 79
ウィザード
　ポリシーの構成 151
カタログ
　クラウド構成ファイル 11
クラウド
　ストレージユニットのプロパティ 143
クラウドのディスクプール
　プロパティの変更 152
クラウドストレージ
　Amazon S3 の API 形式 17
　EMC Atmos API 形式 47
　Microsoft Azure API 形式 54
　OpenStack Swift の API 形式 62
　構成 80
クラウドストレージを構成する 80
クラウドストレージインスタンス
　削除 89、91
　変更 89
　管理 89
　追加 88
クラウドストレージサーバー
　CloudCatalyst 126
　の暗号化プロパティ 127
　プロパティ 116
　プロパティの変更 114
　接続のプロパティ 121
　［帯域幅 (Bandwidth)］プロパティ 117
クラウドストレージプロパティ
　削除 89
　変更 89
　管理 89
クラウドストレージホストのプロパティ 87
クラウド構成ファイル 11
サーバー
　NetBackup のデバッグログ 172
ストレージサーバー
　について 103
　クラウドのプロパティの変更 114
ストレージサーバー (storage server)。「クラウドストレージサーバー」を参照
ストレージプロバイダ
　Rackspace 73
ストレージユニット
　クラウドのプロパティ 143
　重複排除用の構成 142
ストレージユニット名 (Storage unit name) 144
ストレージユニット形式 (Storage unit type) 144
スロットル調整データ転送速度 84
セキュリティ証明書
　クラウドストレージの場合 93
ディスク形式 (Disk Type) 144
バックアップが失敗する
　WRITE_BUFFER_SIZE を大きくした後に 186
バックアップの失敗
　AIX メディアサーバーによる大きなファイルのバックアップ 187
　NetBackup CloudStore Service Container が非アクティブ 187
　アクセラレータバックアップの失敗 185
　ストレージボリュームがクラウドベンダーインターフェースによって作成された 186
　［任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)］オプション 187
プライベートクラウド
　Amazon S3 対応クラウドプロバイダ 37
　AT&T 53
　Rackspace 76
プロパティ
　CloudCatalyst ストレージサーバー 126
　クラウドストレージサーバー 116
　帯域幅 117
　接続 121
　暗号化 127
ホスト ID ベースの証明書
　トークンなしの配備 98
　トークンを使った配備 99
ホスト名ベースの証明書
　配備 97
ポリシー
　プロパティの変更 152

作成 151
ポート番号
CloudStore サービスコンテナ 92
CloudStore サービスコンテナに対する設定 95
レガシーログ 172
ディレクトリ 172
場所 172
レプリケーションディレクタ
ポリシーの構成ウィザード、サポート外 151
レポート 159
ログ
レガシー 172
優先設定
スロットル調整 127
共通 122
暗号化 128
動的ホスト構成プロトコル (DHCP) 98
帯域幅
スロットル調整 117
拡張性のあるストレージ、NetBackup 84～85
拡張性のあるストレージのホストプロパティ 82、84～85
拡張性のあるストレージのホストプロパティを利用できない 178
暗号化
関連項目 101
最大フラグメントサイズ (Maximum fragment size) 145
最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs) 145
最適化された合成バックアップ
概要 147
構成
クラウドストレージの最適化合成バックアップ 149
ディスクプールの構成ウィザード 129
構成 (configuration)
アクセラレータ 147
機能 8
状態収集デーモン 172
監視 159
統合ログ 168
ファイルの形式 170
場所 168
統合ログのジョブ ID 検索 171
要件 82
認証局 (CA) 98
重複排除ストレージユニット
任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server) 144
次のメディアサーバーのみ使用する (Only use the following media servers) 144
重複排除ストレージユニットの構成 142
［クラウド設定 (Cloud Settings)］タブ 82
［暗号化 (Encryption)］
プロパティ 127

A

amazon (S3)
IAM ユーザー 47
Amazon GLACIER
長期保護 39
Amazon S3
ベンダー 18
概要 17
構成オプション 27
構成オプション (詳細) 33
要件 25
資格情報ブローカーの詳細 36
Amazon ライフサイクル
リストア 46

B

bpstsinfoコマンド
操作上の注意事項 165

C

cloud master host 106
CloudCatalyst
ESFS_HOST クラウドの接続プロパティ 123
スロットル調整の設定 118
CloudCatalyst のローカルキャッシュディレクトリ 30、51、59、68、75
CloudStore Service Container
サービスがアクティブなときにセキュリティモードが変更された 191
セキュリティモード 94
セキュリティ証明書 93
概要 92
CloudStore サービスコンテナ
の起動とシャットダウンのトラブルシューティング 190
クラスタ環境で起動に失敗する 191
ポート番号 92
ポート番号の設定 95
cloudstore.conf 設定ファイル 94

E

EMC Atmos
ベンダー 48
概要 47
構成オプション 50

要件 48
設定オプション (詳細) 52

F

FlashBackup ポリシー
［最大フラグメントサイズ (Maximum fragment size)］(ストレージユニット設定) 145

H

hotfix 97

I

IAM ユーザー
権限 47

K

Key Management Service (KMS) 83

L

LIFECYCLE
クラウド階層化 43
バックアップ 45

M

Microsoft Azure
ベンダー 55
概要 54
構成オプション 57
構成オプション (詳細) 60
要件 55
mklogdir.bat 172
MSDP クラウドストレージサーバー
プロパティ 126

N

NetBackup
hotfix 97
NetBackup CloudCatalyst
ESFS_HOST クラウドの接続プロパティ 123
MSDP クラウドストレージサーバーのプロパティ 126
クラウドストレージサーバーのプロパティ 117
クラウドストレージサーバーの構成ウィザードでの有効化 30、51、59、67、75
ローカルキャッシュディレクトリ 30、51、59、68、75
NetBackup CloudStore Service Container。「CloudStore Service Container」を参照
NetBackup Key Management Service (NBKMS) 83
NetBackup Service Layer (NBSL) 98
NetBackup の拡張性のあるストレージのホストプロパティを利用できない 178
NetBackup アクセラレータ
概要 147
NetBackup 拡張性のあるストレージ 84～85

O

OpenStack Swift
プロキシ設定 71
プロバイダの構成オプション 65、69
ベンダー 63
概要 62
構成オプション (クラウドストレージインスタンス) 31、71
要件 64

R

Rackspace
プライベートクラウド 76

V

vmscd 172
vmscd ディレクトリ 173
vxlogview コマンド 169
ジョブ ID オプション 171